

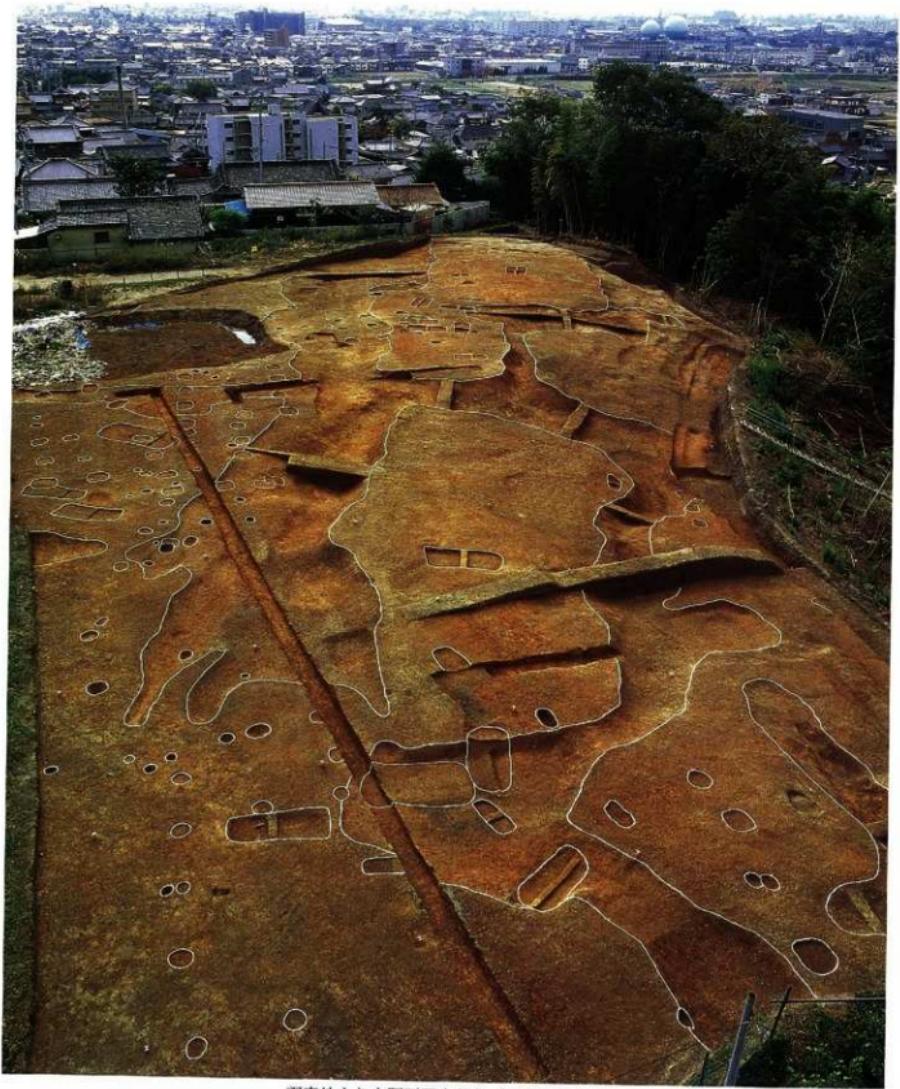
大阪府寝屋川市所在

大 尾 遺 跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う
小路遺跡発掘調査報告書

2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター



調査地より大阪平野を望む（調査区は5区）



2区検出墓壙1



5区検出墓壙19



5区検出墓壙30



5区墓壙14出土石槍

序 文

大尾遺跡は第二京阪道路および一般国道1号バイパス建設に伴う発掘調査によって確認されました。遺跡は大阪平野を一望できるたいへん見晴らしのよい丘陵上に立地しており、遺跡のすぐ西側には国指定史跡「高宮廃寺跡」、北側には太秦古墳群など、周辺には重要な遺跡が数多く広がっております。

調査ではこの立地を生かした大規模な弥生時代の方形周溝墓群や、古代の掘立柱建物跡群など貴重な遺構が数多く発見されております。弥生時代の方形周溝墓群は周辺地域を見渡してもこれまでに確認された例はなく、今回が初めての発見となります。後世の開発によりかなりの削平を受けてはおりますが、検出した周りの溝からは累々と墓が築かれていた様子が浮かび上がってまいりました。また古代の掘立柱建物群は、出土遺物から西側に隣接する国指定史跡「高宮廃寺跡」が隆盛を極めた7世紀後半から奈良時代前半にかけて建てられたものであることが明らかとなり、両者の関係が注目されます。このように当遺跡はこの地域の歴史を解明していく上で非常に重要な遺跡の一つであることが明らかとなりました。

これも偏に大阪府教育委員会、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道工事事務所、日本道路公団 関西支社をはじめとする、地元自治会、並びに関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝しております。あわせて今後とも当センターの事業につきましてのご理解とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

2003年2月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、第二京阪道路、及び一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴って実施された小路遺跡（大尾遺跡）の発掘調査報告書である。大尾遺跡は寝屋川市国守町に所在し、平成12年度に実施した小路遺跡確認調査により新規発見された遺跡である。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道工事事務所の委託を受け、日本道路公団 関西支社の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財團法人 大阪府文化財調査研究センター（現 財團法人 大阪府文化財センター）が実施した。
3. 現地での発掘調査は平成13年6月20日～平成14年3月25日にわたり実施し、ひきつづき整理事業を行った。発掘調査および整理事業の担当は、以下の通りである。

中部調査事務所長　　藤田憲司
調査第一係長　　一瀬和夫
技　　師　　伊藤　武
専門調査員　　植村　悟・阿河大介

4. 各調査区の全景および遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物の撮影・焼き付けについては主査片山彰一、非常勤職員水取康人が担当した。木棺墓から検出された朱の鑑定は当センター山口誠治が行った。
5. 発掘調査および報告書の作成にあたって、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、以下の方々からご教示・ご指導いただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略）
寝屋川市教育委員会
門真市教育委員会
四條畷市教育委員会
深澤芳樹（独立行政法人 奈良文化財研究所）
6. 発掘調査、遺物整理作業および報告書作成にあたっては、以下の方々に参加・協力を得た。
青山由美子、伊達佳代
7. 本書の編集は伊藤が行った。
8. 本調査に関わる遺物・写真・実測図等は財團法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値である。
2. 発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系（旧座標）に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を示す。ちなみに座標北は磁北より東へ $6^{\circ} 40'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 12'$ 振れている。座標および水準の記載はすべてm単位である。
3. 本書で使用した土壤色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』に準拠した。
4. 遺構図における断面位置は図面上に「L」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。
5. 建物跡の平面形は模式図で表現した。このうち実際に検出した柱穴を●で、復原される柱穴を○で表した。なおピット番号は省略してP.□と表記した。
6. 調査においては、遺構番号は1～5区通しで付した。遺構ごとに1から番号を付しているため、同じ調査区内に「溝20」も「土坑20」も存在する。
7. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石製品2/3を基本としたが、適宜遺物に即して異なる縮尺としており、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに縮尺率を明示しているのでそちらを参照されたい。また土器の実測図のうち、弥生土器、土師器は基本的に断面を白抜きとし、それ以外を黒塗りで表現した。挿図中の遺物番号と写真図版中の遺物番号は対応する。
8. 遺物写真的うち、俯瞰撮影を行ったものなど縮尺率が判明するものののみ縮尺率を記した。
9. 引用文献、参考文献は各章の末尾に記した。
10. 索引分担は目次に記した。

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と方法 (伊藤) 1

　　第1節 調査に至る経緯 1

　　第2節 調査方法 4

第2章 位置と環境 (植村) 5

　　第1節 地理的環境 5

　　第2節 歴史的環境 5

第3章 調査の成果 (伊藤) 9

　　第1節 基本層序 9

　　第2節 遺構と遺物 15

　　1区 15

　　2区 20

　　3区 29

　　4区 39

　　5区 48

第4章 調査成果の検討とまとめ (伊藤) 77

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1:50,000)	1
第2図 調査区配置図 (1:1,000)	2
第3図 国土座標と地区割り方法	3
第4図 調査地周辺遺跡分布図 (1:15,000)	6
第5図 基本層序柱状図	10・11
第6図 5区横断面図	12
第7図 1区検出遺構全体図	16
第8図 1区検出建物1・塚1平・断面図	17
第9図 1区検出溝14・16・17・20・47・48断面図	17
第10図 1区出土遺物 (1~4、2層、5、3層、6~16、溝14)	18
第11図 1区出土遺物 (17~19、溝20上層、20・21、溝20下層)	19
第12図 2区検出遺構全体図	21
第13図 2区検出建物2・20平・断面図	22
第14図 2区検出建物3・塚2平・断面図	23
第15図 2区検出墓塚1・2平・断面図	24
第16図 2区検出溝21~23・28・30・落込1断面図	25
第17図 2区出土遺物 (22~31、2層、32~38、3層、39・40、建物2、41、建物3、42、ピット123、 43、ピット136、44・45、溝26、46~48、落込1、49、地山直上)	26
第18図 2区出土遺物 (50~53、溝21、54、溝22、55~58、溝63)	27
第19図 3区検出遺構全体図	30
第20図 3区検出建物4~6平・断面図	31
第21図 3区検出建物7・8・塚3平・断面図	32
第22図 3区検出溝1~6・8・9・13・15・18・33断面図	33
第23図 3区検出墓塚3・土坑7・8平・断面図	34
第24図 3区検出土坑4~6平・断面図	36
第25図 3区出土遺物 (59、1層、60・61、3層、62、地山直上、63、建物4、64、建物7、65~68、溝2、 69~73、溝6、74~77、溝15、78~91、溝33)	37
第26図 4区検出遺構全体図	40
第27図 4区検出墓塚5~8平・断面図	41
第28図 4区検出建物9・10・21平・断面図	42
第29図 4区検出建物11・12平・断面図	43
第30図 4区検出墓塚4・土坑26平・断面図及び出土遺物	44
第31図 4区検出溝35~43断面図	45
第32図 4区出土遺物 (94・95、3層、97、建物9、98、建物10、99・100、建物11、101、墓塚6、102、墓塚5、 96、溝46、103~110、溝39、111・112、溝40、113、溝41)	47
第33図 5区検出遺構全体図	49・50

第34図	5区検出建物13~15平・断面図	51
第35図	5区検出建物16・17・塚4平・断面図	52
第36図	5区検出建物18・19平・断面図	53
第37図	5区検出墓壙34~36平・断面図	54
第38図	5区検出溝49~56断面図	55
第39図	5区検出溝57・58・60~62断面図	56
第40図	5区検出墓壙16~18・20平・断面図	58
第41図	5区検出墓壙19・21平・断面図及び出土遺物	59
第42図	5区検出墓壙9~13平・断面図	61
第43図	5区検出墓壙14・15平・断面図及び出土遺物	62
第44図	5区検出墓壙22~26平・断面図	66
第45図	5区検出墓壙27~30・37平・断面図	68
第46図	5区出土遺物 (117~121. 2層、122~140. 3層、141・142. 地面直上、143~148. 建物18、 149. 建物13、150. ピット264)	72
第47図	5区出土遺物 (151~153. 溝49、154~171. 溝50上層、172~176. 溝50下層、177~179. 溝51下層、 180. 墓壙34、181. 墓壙37)	73
第48図	5区出土遺物 (182. 溝53上層、183~191. 溝53下層)	74
第49図	5区出土遺物 (192~197. 溝54上層、198~211. 溝54下層)	75
第50図	5区出土遺物 (212~217. 溝56下層、218・219. 溝59、220~223. 溝60、224~227. 溝61、 228~239. 溝62)	76
第51図	木棺底板と小口板との組合せ模式図	79
第52図	遺構変遷図	80・81

表目次

第1表 方形周溝墓および墓壙一覧表 ······ 78 第2表 建物跡規模一覧表 ······ 84

写真図版目次

図版 1. 1区遺構

1. 1区全景 (西から) 2. 下段東側柱頭部全景 (西から) 3. 段・塚17
(西から) 4. 墓告1 (東から) 5. 墓1・溝47・48 (東から)

図版 2. 1・2区遺構

1. 溝20 (東から) 2. 溝14 (南西から) 3. 溝16 (西から)
4. 2区全景 (南から)

図版 3. 2区遺構

1. 溝30・31 (南から) 2. 段・溝34-64 (北から) 3. 墓物2 (北から)
4. 墓物3 (南から) 5. 墓2 (南から) 6. 溝28 (西から)

図版 4. 2区遺構

1. 墓壙2 (南から) 2. 墓壙2 (西から)
3. 墓壙1粘土室状況 (東から) 4. 溝22土器出土状況 (東から)
5. 溝63土器出土状況 (北から) 6. 墓壙1先掘状況 (東から)

図版 5. 3区遺構

1. 3区全景 (南から) 2. 北半西端柱頭部全景 (東から)
3. 溝5 (南から) 4. 墓物4 (北から) 5. 墓物5 (南から)

図版 6. 3区遺構

- 遺物6（西から）
- 遺物7（西から）
- 建物8（東から）
- 墓3（北から）
- 土坑4・5・6（西から）
- 土坑7（南東から）
- 土坑8（西から）
- 墓9（西から）

図版7. 3区遺構

- 測溝墓9（南東から）
- 測溝墓6（南から）
- 測溝墓7（北西から）
- 周溝墓8（東東から）
- 周溝墓10（北東から）

図版8. 3区遺構

- 周溝墓11（西から）
- 溝15（西から）
- 溝10・11（南から）
- 溝18（北から）
- 溝33（北から）
- 溝3南半部（北から）

図版9. 4区遺構

- 4区全貌（北西から）
- 墓墳6～8（西から）
- 墓墳5（北内から）
- 墓墳6（西から）
- 墓墳6仙洋冢上行便（西から）

図版10. 4区遺構

- 墓墳7（北西から）
- 墓墳8（西から）
- 墓墳4（北から）
- 墓墳6植生帯状況（北西から）
- 建物9・22（東東から）
- 建物10（西から）
- 建物11（西から）
- 建物12（北から）

図版11. 4区遺構

- 溝35（西から）
- 溝36（東から）
- 溝37・38（北から）
- 土坑25（西から）
- 溝42・44（東から）
- 溝43（西から）
- 溝29（東から）

図版12. 5区遺構

- 5区全景（北から）
- 5区南半部全景（北東から）

図版13. 5区遺構

- 建物12～15全景（北西から）
- 建物17（西から）
- 建物13（西から）
- 建物14（北から）
- 建物15（西から）

図版14. 5区遺構

- 建物16（北東から）
- 建物17（南から）
- 建物18・19（西から）
- ピット236（建物18）完掘状況
- 溝4（南から）
- 墓墳34（西から）
- 墓墳35（東から）
- 墓墳36（北から）

図版15. 5区遺構

- 方形切妻屋根形全長（北東から）
- 周溝墓23・25（東から）
- 周溝墓22（西から）
- 周溝墓26・27・29（南東から）
- 周溝墓33・34（東から）

図版16. 5区遺構

- 墓墳9～15全景（北から）
- 墓墳23～28全景（東から）

図版17. 5区遺構

- 測溝墓32（東から）
- 溝49（北東から）
- 溝50北方断面（東から）
- 西斜面土層堆積状況（市街から）
- 墓墳9完掘状況（西から）
- 墓墳10完掘状況（西から）

図版18. 5区遺構

- 墓墳11完掘状況（北から）
- 墓墳12木棺痕跡状況（北から）

- 墓墳13木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳13石棺出土状況（東から）

図版19. 5区遺構

- 墓墳14完掘状況（西から）
- 墓墳14石棺出土状況（西から）
- 墓墳15木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳16木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳17木棺痕跡状況（東から）

図版20. 5区遺構

- 墓墳17木棺痕跡状況（西から）
- 墓墳18木棺痕跡状況（西から）
- 墓墳18小口石棺出土状況（西から）
- 墓墳18小口穴蓋状況（西から）

図版21. 5区遺構

- 墓墳19木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳19木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳19木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳19木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳19石棺出土状況（東から）

図版22. 5区遺構

- 墓墳20木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳20木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳20小口穴蓋状況（東から）
- 墓墳20完掘状況（東から）
- 墓墳21完掘状況（北から）

図版23. 5区遺構

- 墓墳22完掘状況（東から）
- 墓墳23木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳24木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳24木棺痕跡断面（東から）

図版24. 5区遺構

- 墓墳22完掘状況（東から）
- 墓墳23完掘状況（東から）
- 墓墳22完掘状況（東から）
- 墓墳28木棺痕跡状況（東から）

図版25. 5区遺構

- 墓墳29完掘状況（東から）
- 墓墳30完掘状況（東から）
- 墓墳30木棺痕跡状況（東から）
- 墓墳30完掘状況（東から）

図版26. 1区出土遺物

図版27. 1・2区出土遺物

図版28. 2区出土遺物

図版29. 2・3区出土遺物

図版30. 3・4区出土遺物

図版31. 4区出土遺物

図版32. 4・5区出土遺物

図版33. 5区出土遺物

図版34. 5区出土遺物

図版35. 5区出土遺物

図版36. 5区出土遺物

図版37. 5区出土遺物

図版38. 4・5区出土石器

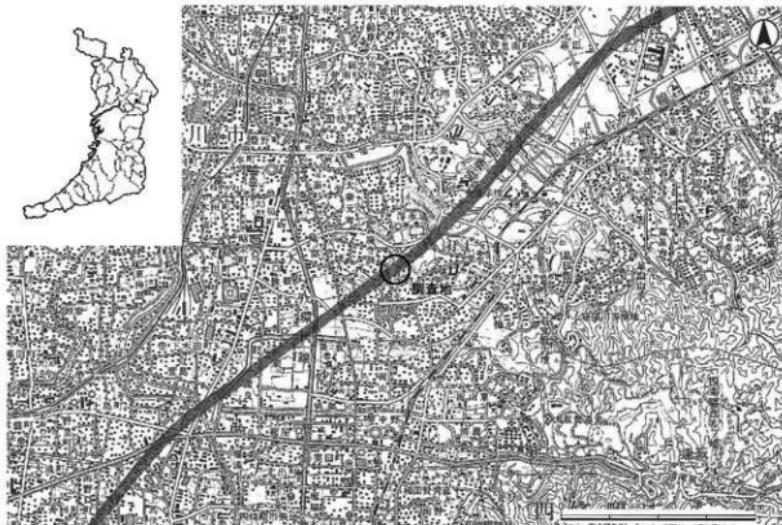
第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯

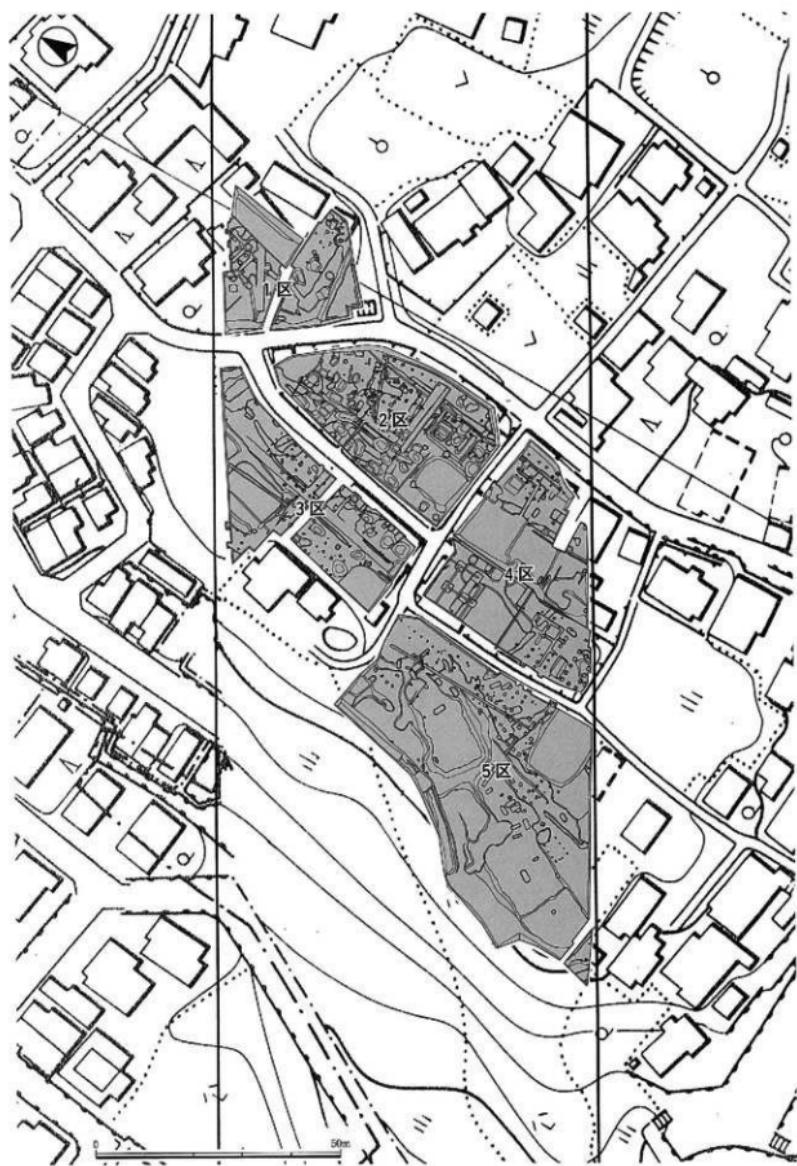
大尾遺跡は大阪府寝屋川市国守町に所在する。生駒山地の西側斜面から派生した丘陵の先端頂部に立地し、遺跡の西側には国指定史跡「高宮廃寺跡」、北側には太秦古墳群が位置するなど、遺跡が存在する可能性の非常に高い地域であった。この地に第二京阪道路および一般国道1号バイパス建設が計画されたため、当センターは平成12年11月から平成13年3月までの間、小路遺跡確認調査として道路建設予定地内に41箇所（うち大尾遺跡周辺には12箇所）のトレンチを設定して遺構・遺物の有無、および遺構が確認された場合にはその深度の確認を行った。その結果、丘陵頂部の平坦部に設定したトレンチの多くからは溝や土坑、ピット等の遺構を検出し、遺物包含層や遺構から弥生土器や古代の土器が出土することが確認された。これによって道路建設予定地内が遺跡であることが判明したため、文化財保護法に基づく遺跡発見通知が提出され、「大尾遺跡」として周知されることとなった。

以上の成果にもとづき、国土交通省 近畿地方整備局 波速国道工事事務所の委託を受けた当センターが、日本道路公団 関西支社の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、平成13年6月から平成14年3月までの間、埋蔵文化財発掘調査を実施した。

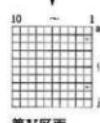
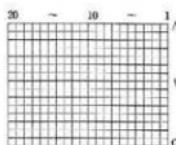
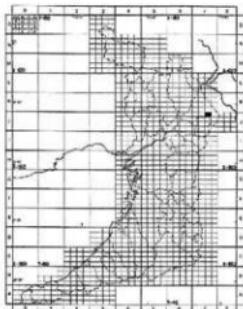
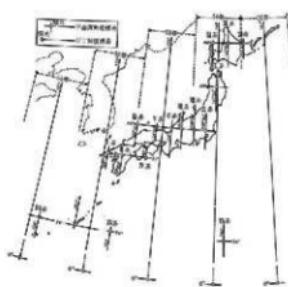
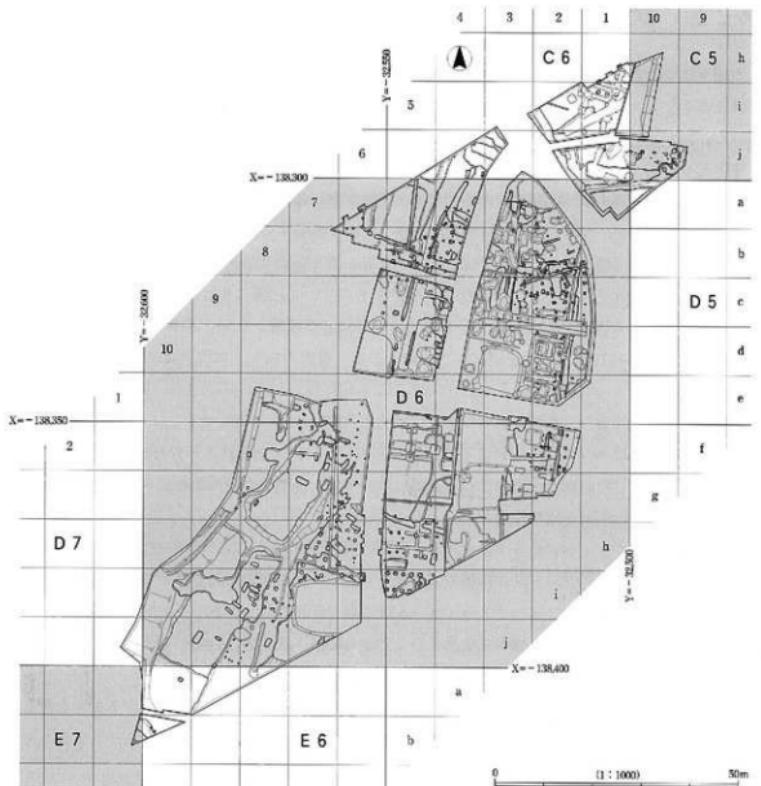
調査対象地は、道路建設予定地のうちの現在も使用されている道路、近隣住宅へのライフライン埋設箇所、および確認調査によって遺跡の存在を裏付ける成果が得られなかった丘陵西側の斜面を除く部分であり、調査面積は4,970m²に及んだ。



第1図 調査地位置図 (1:50,000)



第2図 調査区配置図 (1:1,000)



第3図 國土座標と地区割り方法

第2節 調査方法

大尾遺跡の調査は、基本的に当センターの前身の一つである（財）大阪文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」¹⁾を基準とし、国土座標軸に則った基準線を遺物の取り上げ、遺構図面作成に用いた。

地区割りは国土座標軸（第VI座標系）を基準とし、I～IVの大小4段階の区画を設定した。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。遺構・遺物が密に確認された場合には、更にV・VIの2段階の細分が行われるが、今回の調査では使用しなかったので割愛する。第I区画は1万分の1地形図を利用したもので、1区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は2500分の1の地形図を利用する。第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画に分けたもので、1区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第III区画は第II区画を東西20分割、南北15分割する一辺100mの区画となる。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10分割した一辺10mの区画となる。遺物の取り上げ作業は、全てこの第IV区画を基準に行った。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。

遺構の平面測量はヘリコプターによる写真測量を行い、1/50の平面図とそれを縮小縮寫した1/100の遺構全体図を作成した。精度が要求される遺構については、基準線からの距離をスケール等を用いて計算し、1/20、1/10の図面を隨時作成した。

調査区は、大きく1～5区の5つに分けた。北端の調査区を1区とし、その南の調査区を2区、2区の西側の調査区を3区、2・3区の南側の調査区を4区、4区の西側の調査区を5区とした。調査は数字順とは関係なく、1区→3区→2区→4区→5区の順で行った。

調査方法は、先ず下草・竹・雜木を伐採することから始め、表土層、近年の盛土、および近・現代の耕上層を重機にて掘削し、その後人力による掘削、精査によって遺構を検出した。

調査においては、遺構番号は1～5区通じで1から付した。遺構の種類ごとに1から番号を付していくため、同じ調査区内に「溝1」も「土坑1」も存在する。なお遺物の登録番号も1～5区通じで1から番号を振った。整理作業の段階で行なう遺物への注記は「大ビ1-□」とした。

註

1) (財) 大阪文化財センター 1988 「遺跡調査基本マニュアル」

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大尾遺跡は大阪府寝屋川市国守町内に所在し、大阪平野を一望できる旧河内潟北岸付近の丘陵尾根上に立地する。この尾根は生駒山地へとつながる枚方丘陵から派生し、当調査地まで南下している。この枚方丘陵は枚方市から寝屋川市にかけての幅3~4km、長さ7kmにわたる。主に大阪層群から構成され、東には生駒山麓から北流する天野川、北には淀川が西流し、西は枚方換曲を境界としている。

縄文時代前期には海岸線が枚方換曲付近まで入り込んでおり、旧河内潟を形成していた。時代が下るにつれて、海岸線は退いていき、寝屋川や讚良川、その他の小河川などによって堆積した沖積平野が形成されていく。とはいえ、宝永元年の大和川付替えや、新田開発が行なわれるまで、深野池、新開池など、河内潟の名残を残していた。

調査地から東へ約500mの地点には東高野街道が南北に走り、高宮廃寺、太秦廃寺の西側には河内街道が南北に走っている。東高野街道は古代の官道（南海道）を踏襲しているといわれ、現在の京都府八幡市石清水八幡宮を起点としている。そのため、京へと通じる街道としても利用され、また、南北朝時代に高師直率いる足利軍が南下した街道でもある。河内街道の名称は明治41年測大正3年修正の地図に初めて登場するが、奈良時代中期に遡るとされる高宮神社、高宮廃寺、太秦廃寺などの古代社寺を東に望み、讚良郡の条里に従って直線的に南下している。街道の名称こそは無いものの、古代から交通の要衝として村々を支えてきたことであろう。これらの街道と街道の間は東西道が横切り、また、街道沿いの集落を繋いでいたことであろう。

第2節 歴史的環境

大尾遺跡は弥生時代中期後半の方形周溝墓群、それらを削平して営まれた飛鳥・奈良時代の集落跡、中世後期の火葬墓などの複合遺跡である。ここでは特に、大尾遺跡を取り巻く歴史的環境を考える上で、重要と思われる近接した遺跡を取り上げ、周辺地域の動向を見る。

旧石器時代 当遺跡からは明確な旧石器時代の遺物は出土していないが、北に控える太秦遺跡では、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器が採集され、西に所在する高宮遺跡でも国府型ナイフ形石器が出土している。当遺跡の南約600mの地点に所在している讚良川遺跡では縄文時代の包含層(上流からの堆積土)からナイフ形石器が出土し、上流に遺物包蔵地の存在を示唆している。

縄文時代 高宮遺跡では不定形土坑を検出し、前期の土器片、石鏃などが出土している。大尾遺跡から南に約600m、讚良川右岸の三味原遺跡では、周囲より少し小高い丘陵上から石鏃、石錐等が出土している。中期から後期にかけて海岸線は後退していく、寝屋川や讚良川による沖積地（扇状地）が出現していく。この扇状地上に所在している讚良川遺跡は、中期初頭から後期初頭にかけての集落遺跡で、検出された貯蔵穴からは土器と共に獸骨、貝殻などが出土している。晩期に形成された遺跡としては長保寺遺跡があげられる。平安後期の井戸壁から滋賀里Ⅲ・Ⅳ式土器が出土しており、前者の土器には初の圧痕が認められる。高宮八丁遺跡では滋賀里Ⅳ・船橋・長原式土器と弥生時代初期の土器が同じ層から出土しており、また初の圧痕が認められている。これらのこととは、河内潟湖周辺の低地性の集落、稻作開



第4図 調査地周辺遺跡分布図 (1:25,000)

始の時期を探る上で重要な発見である。

弥生時代 高宮八丁遺跡では、前期の生活遺構と見られるものは無いが、中期になると溝や土坑などが急増することが確認されている。このことは、前期の段階では湿地帯に近い状態であったが、中期に至ると地盤が安定してきたことを示すものである。しかし、河内潟周辺の平地という好条件の地に所在しているにもかかわらず、中期以降に姿を消している。中期以降の集落遺跡には太秦遺跡があげられる。この遺跡は発掘調査が実施されることなく消滅してしまっている。そのため、詳細は不明であるが、採集資料と豊野沢水場内の試掘調査では、中期から後期にかけての遺物が確認されている。高宮八丁遺跡で生活していた人々が移動し、高地性集落を形成したものと考えられている。また、後期の小規模な住居跡も確認されている。大尾遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓群を検出しておらず、太秦遺跡との関連が興味深い。長保寺遺跡では弥生時代全般にわたっての上器が出土し、高宮八丁遺跡と共に付近に大集落が形成されていたことを窺わせる遺跡である。また、讃良川右岸の小路遺跡でも弥生時代後期の土

器が採集され、国守遺跡や讃良川遺跡では中期の土器が、打上中道遺跡では後期の土器が出土している。

古墳時代 前期の遺跡は希薄であるが、長保寺遺跡内の自然河川からは庄内式土器、古墳時代前期の須恵器や韓式系須恵器等が出土し、周間に遺跡の存在を窺わせている。中期から後期になると、長保寺遺跡からは掘立柱建物群、群集土塙墓が検出され、最盛期を迎えたと見られている。また、井戸枠には堆構造船の船材が転用されているなど、寝屋川河口付近の集落として、当時の水運事情を偲ばせる遺跡である。長保寺遺跡が衰退していく後期になると高宮遺跡に集落が形成され始める。古墳時代後期後半には高宮八丁遺跡で溝や自然河川、土坑等が検出され、須恵器や土師器と共に建築部材が出土することから集落が形成されていたことを裏付ける。

中期以降、太秦遺跡を含めた周辺には古墳群が形成される。太秦遺跡内の各所からは、柳葉式銅鏡や子持勾玉などが出土するなど、前期の古墳も存在していたようである。しかし、太秦高塚古墳（トノ山古墳）、太秦1号墳を除き、現在では外見上ほとんど削平されており、字名を留めているのみである。また、後期の方墳の一部も確認されている。墳丘は削平されているが、周濠からは円筒・形象埴輪、須恵器、土師器が出土している。浄水場内の試掘調査では形象埴輪片が確認されている。三昧頭遺跡では後期の古墳周濠が検出され、円筒・形象埴輪、須恵器、土師器等が出土している。この古墳は更良岡山古墳群の一部と考えられる。讃良川遺跡では讃良川の旧河道より古墳時代後期から飛鳥時代にかけて約1世紀にわたる遺物が出土しており、讃良川が運び出した土砂が相当な量であったことがわかる。大尾遺跡と併行して調査が実施された太秦古墳群では、前方後円墳1基、円墳1基、方墳11基が検出されている。

飛鳥～奈良時代 各所で寺院が造営され始める。調査地のすぐ西側には国指定史跡高宮廃寺が隣接する。この高宮廃寺は薬師寺式伽藍配置を持ち、出土した瓦などから白鳳時代に創建され、平安時代には廃絶した寺院であったことが明らかとなっている。この高宮廃寺の周間に広がる高宮遺跡からは、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落が発見されている。高宮廃寺を創建する古代氏族（高宮氏）の居館と見られる大型の掘立柱建物、竪穴住居が検出され、丘陵頂上から南斜面一帯に集落が営まれていたこと、また高宮廃寺創建にあたり、高宮遺跡中央の見晴らしの良い箇所を寄進している様子が窺える。

大尾遺跡から北に約1km、太秦遺跡北の地点には、現在熟田神社が鎮座しており、ここは太秦廃寺と推定されている。『古事記』・『日本書紀』によると、古代讃良郡幡多郷は渡來系氏族（秦氏）の住居地とされており、境内からは礎石や奈良時代後葉の軒丸瓦が出土している。また、讃良川上流左岸には白鳳時代に創建されたとされる讃良寺があったと推定されている。その下流の三昧頭遺跡からは、この寺院のものと思われる瓦が出土しており、讃良川遺跡では讃良川による流出堆積土より白鳳時代の遺物が出土している。

長保寺遺跡では自然河川や土坑などのほか、正方位よりわずかに東に振る掘立柱建物群を検出している。この振れは讃良郡の条里水田の振れと一致するものであり、その強い間わりが指摘されている。

平安時代 高宮遺跡では井戸が検出され、瓦器碗や土師皿と共に「保延六年」（1140年）と墨書きされた曲物が出土している。このことで、空白であったこの時期の高宮周辺の様子がわかり始めてきている。また長保寺遺跡では後期の井戸、掘立柱建物群が検出されたほか、横倒しの須恵器瓶子に黄色の小石を20個入れ、土師器杯を伏せた地鎮に伴う浅い掘り込み状の遺構なども検出されている。

鎌倉・室町時代 高宮廃寺は平安時代には廃絶状態であったが、鎌倉時代に延喜式内社大社御祖神社の神宮寺として、旧講堂を利用し再建されている。現在の大社御祖神社が鎮座している社殿は江戸時代に西塔上に移動されたものであり、IH宮地伝承地が神社北西に残っている。その伝承地で掘立柱建物が検

出され、創建期の神社社殿遺構と推察されている。長保寺遺跡では多数の柱穴とともに、建物に伴う溝などが検出されている。この溝からは鎌倉時代の羽釜や瓦器碗、室町時代の瓦質火鉢等が出土し、集落が形成されていたことを物語っている。また国守遺跡からは巴文軒丸瓦や火舎、備前焼擂鉢等が出土している。

参考文献

- 寝屋川市教育委員会 1998 『寝屋川市史』第一巻
寝屋川市教育委員会 1998 『寝屋川市史』第二巻
大阪府教育委員会 1988 『高野街道』歴史の道調査報告書 第二集
大阪府教育委員会 1988 『京街道』歴史の道調査報告書 第五集
寝屋川市教育委員会 1979 『片町線複線化工事に伴う 国守遺跡 調査概要報告』寝屋川市文化財資料
寝屋川市教育委員会 1980 『高宮遺跡発掘調査概要報告』 寝屋川市文化財資料 2
寝屋川市教育委員会 1985 『高宮遺跡発掘調査概要報告VI』 寝屋川市文化財資料 8
寝屋川市教育委員会 1986 『高宮遺跡発掘調査概要報告』 寝屋川市文化財資料 9
寝屋川市教育委員会 1993 『長保寺遺跡－（株）伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 寝屋川市文化財資料19
宮地良典・田崎庄良昭・寒川 旭 2001 『大阪東北部地域の地質』地域地質研究報告 5万分の1 地質図幅 京都 (11) 第51号 NI-53-14-8

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

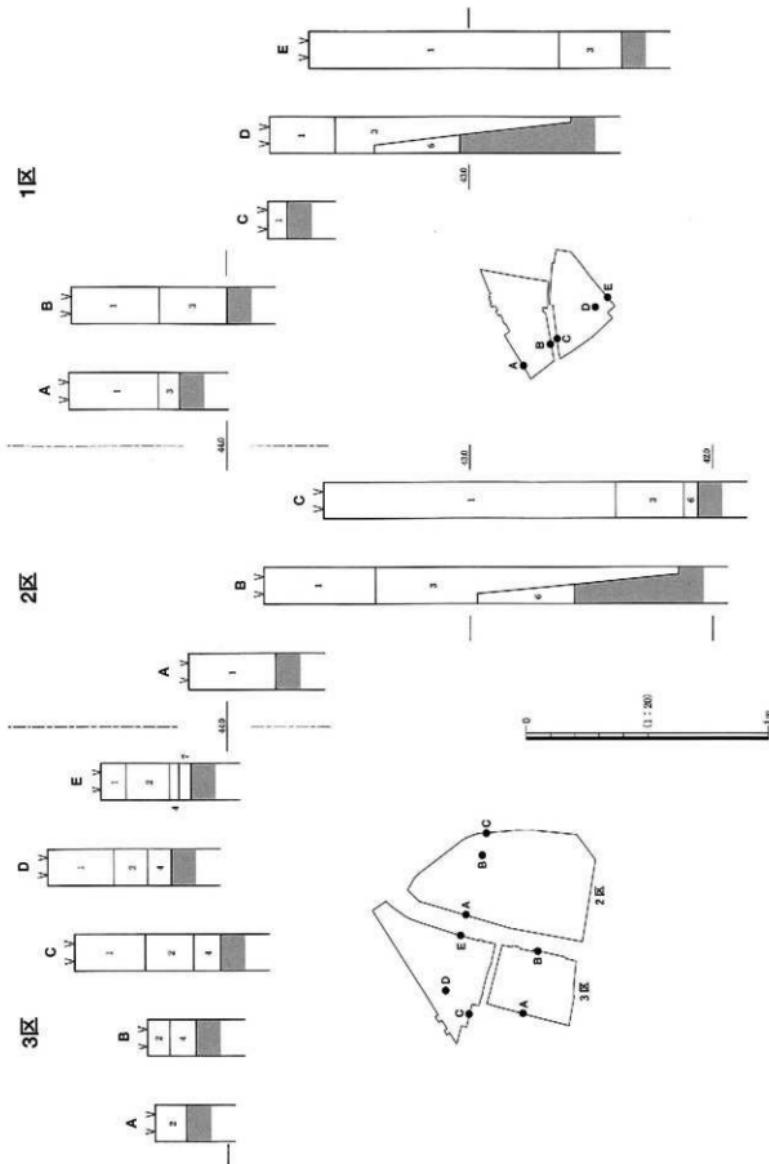
大尾遺跡は生駒山地西麓から派生する丘陵の頂部に立地する。丘陵は1区側から5区へと向かって舌状に延びるため、1区付近の標高がもっとも高い。5区は丘陵の先端となり、これより南と西は急勾配な斜面となる。調査地内には一部を除き近年まで住宅が建っていたため、その造成に伴う遺構面の削平、および解体に伴う遺構面への攪乱が著しい。耕作地として利用されていた場所については、遺構の遺存状態は比較的良好であった。

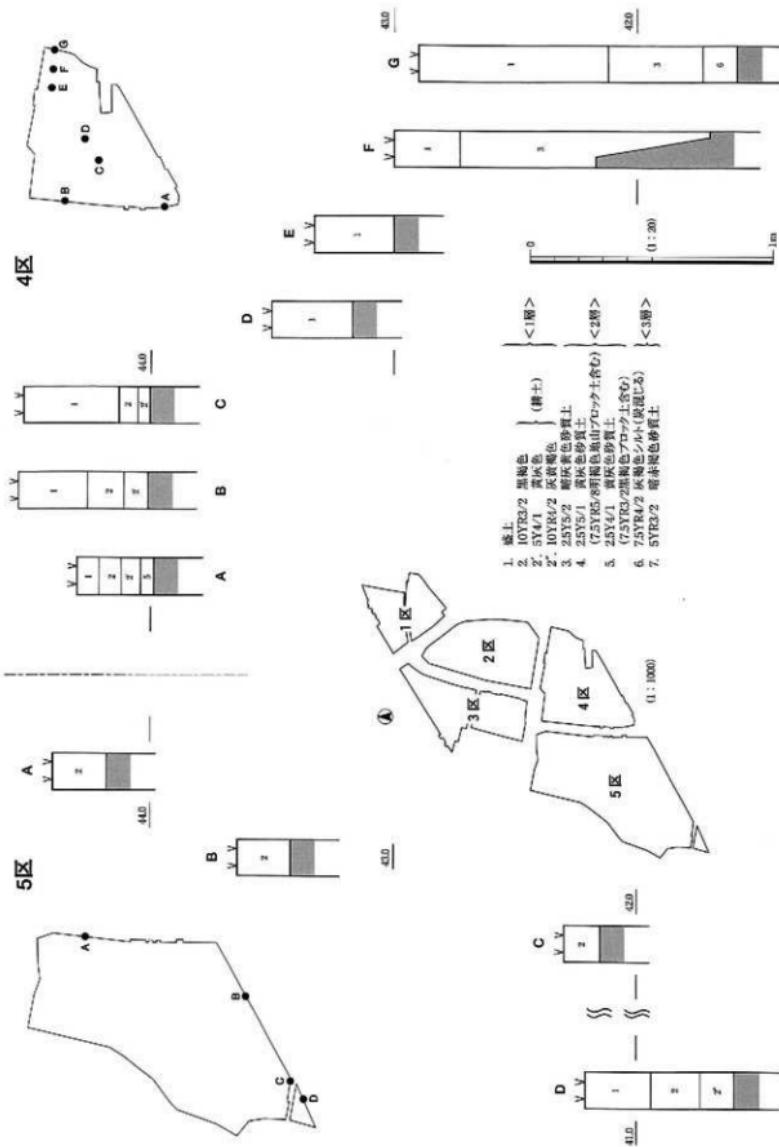
【1区】

調査地の北端に位置する調査区である。5つの調査区の中ではもっとも標高が高く、調査区の北端では現地盤高T.P.44.65mを測る。調査区は東西に横断する擁壁によって、北側の上段と南側の下段とに分かれる。この段は近年の宅地造成に伴うものであるが、もとの自然地形も谷筋へ向かって北から南へと緩やかに下がっている。地山の高低差は調査区北端と南端では約1.8mを測る。上段では地表面より36cmの盛土（1層）があり、その下に8~28cmの厚さに暗灰黄色砂質土層（2層）が堆積する。2層の掘削後の面が地山（遺構面）となる。2層は近世の遺物包含層であり、12世紀から13世紀の瓦器小片（第10図-4）などと共に、18世紀後半以降の炮烙片（第10図-1）が出土している。なお、上段のうちの東半部は溜池造成により遺構面が削平されている。下段は上段より現地盤で約80cm低い。擁壁際では宅地造成によって2層は削平され確認できない。1層掘削後の面が直ちに地山（遺構面）となる。地山は南に向かって緩やかに下がり、下段中央付近では1層の下に2層が16cm、灰褐色シルト層（3層）が35cm堆積する。3層は8世紀までの遺物（第10図-5）を包含する。なお、南半には耕作地境の段があり、この段造成によって3層は削平される。下段南端では1層が1.3m、2層が26cm堆積し、地山となる。

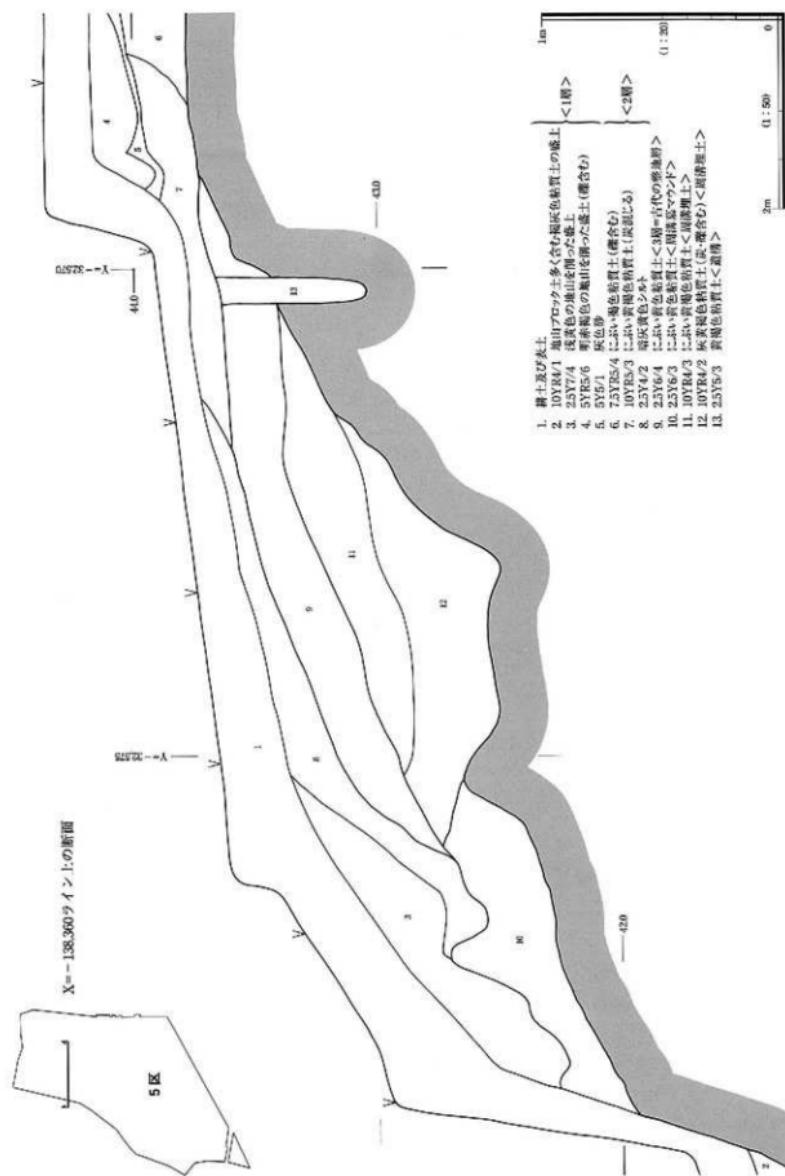
【2区】

1区の南側に位置する調査区である。丘陵の東斜面にあたっており、地山は全体に西から東に向かって緩やかに下がる。地山の高低差は調査区西端と東端では約1.7mを測る。調査区西端では現代の盛土（1層）が36cmあり、1層掘削後の面が直ちに地山（遺構面）となる。地山が東へ下がるにしたがい、西端から約6m付近から暗灰黄色砂質土層（2層）が堆積し始め、西端から約9m付近からは、さらにその下に灰褐色シルト層（3層）が堆積する。1区と同じく東辺には耕作地境の段があり、この段上では1層が45cm、2層が43cm、3層が40cmとなる。段の造成によって一旦3層は削平されるが、段下の調査区東端では1層が1.2m、2層が28cm、3層が6cmと、再び3層が確認できる。これより下が地山（遺構面）であり、基本的には1区とまったく同じ層序である。近世の遺物包含層である2層からは、古代の土師器・須恵器（第17図-25~31）や13世紀代の瓦器小片（第17図-23・24）などと共に、18世紀後半以降の炮烙片（第17図-22）が出土している。3層は弥生時代中期後半から8世紀までの遺物を包含する（第17図32~38）。なお、当調査区は住宅解体にともなう遺構面への攪乱が著しい。





第5図 基本層序柱状図



【3区】

2区の西側に位置する調査区で、丘陵の頂部にあたる。調査区内はほぼ平坦であるが、西北部には耕作地境の段があり、地山は西に向けて一段低くなる。調査区より西側は丘陵の斜面にあたり、急勾配な斜面となる。調査地中央に擁壁、および水道管が東西に横断するため、調査区が北と南に2分される。北半部は近年まで耕作地として利用されていたため、遺構の遺存状態は非常に良好である。その当時の耕土層が14~20cm、その上に現代の盛土が10~29cm堆積し、両者を1層として掘削した。1層の下には地山のブロック土を含む黄灰色砂質土層（2層）が、薄い箇所で4cm、平均11cm堆積する。2層は基本的に1・2区の2層に相当する層である。おそらく近世の遺物包含層と思われるが、明確に時期を決定できる遺物は出土しなかった。北半部のうちの東半には、さらにその下に暗赤褐色砂質土層（3層）が5cm程度堆積する。これより下が地山（遺構面）である。3層は弥生時代中期後半の遺物を包含するが、古代の遺物は含まれていない（第25図-60・61）。しかし3層除去後の面で古代の遺構を検出していることから、基本的には1・2区の3層に相当する8世紀までの遺物包含層と考えられる。南半部は地山（遺構面）まで非常に浅い。南半部のうちの西半では表土層（1層）を13cm掘削して直ちに地山に達する。東半では表土層が9cm、その下に暗赤褐色土を含む黄灰色砂質土層（2層）が11cm堆積し、地山に達する。なお南半部の2層は北半部の2層相当層である。

【4区】

2・3区の南側に位置する調査区である。宅地開発に伴う築壇造成によって、調査区は大きく西側の上段と東側の下段とに2分される。上段は3区と同じく丘陵の頂部にあたるため、標高が高く平坦である。下段は2区と同じく丘陵の東斜面にあたっており、全体に西から東に向かって緩やかに下がる。地山の高低差は調査区の西端と東端とでは約2.4mもある。上段では北方で7~28cm、南方で9cmの盛土があり、その下に2層に細分できる耕土層が13~25cm堆積する。両者を1層として重機にて掘削した。上段のうちの北半では1層掘削後の面が直ちに地山（遺構面）となる。南半では1層と地山との間に黒褐色のブロック土を含む黄灰色砂質土層（2層）が5cm堆積する。これは3区の南半の2層と同じく、1~3区の2層に相当する層である。下段のうちの西半は約80cmにおよぶ切土造成によって、地山が大きく削平されている。33cmの盛土（1層）を除去した面が直ちに地山となる。東半は2区と同じく東へ向かって地山が徐々に下がっていく。それにしたがい2区同様に暗灰黄色砂質土層（2層）が堆積し始める。東辺には2区からつづく耕作地境の段があり、この段上では2層の厚さは56cmにおよぶ。この耕作地境の段より西側には2区3層に対応する灰褐色シルト層（3層）の堆積は確認できないが、段下の調査区東端では2層と地山との間に厚さ14cmに堆積していることが確認できる。1層と2層は調査区東端でそれぞれ78cm、39cmの厚さである。2層には明確に時期を決定できる遺物は含まれておらず、3層は弥生時代中期後半から7世紀までの遺物（第32図-94・95）しか包含していない。しかし各層は1・2区からつづくまったく同じ土層であることから、2層は近世の遺物包含層、3層は弥生時代中期後半から8世紀までの遺物包含層とすることができます。

【5区】

4区の西側に位置する。当調査区が丘陵の頂部先端にあたり、調査区の南と西は急勾配な斜面となる。調査区の東辺部は丘陵の頂部にあたるため、標高が高く比較的の平坦であるが、西半は丘陵斜面にあたる

ため、東から西に下がる斜面となる。地山の高低差は調査区東端と西端では約3mを測る。また南に向かっても緩やかに下っており、調査区北端と南端とでは約3.6mの地山の高低差がある。調査に入る以前は東西に2段の耕作地が造成されており、東辺部では厚さ22cmの耕土層（1層）除去後の面が直ちに地山（遺構面）となる。西へ向かうにしたがい耕土層下に盛土（第6図3～5）をして斜面の勾配を緩くしている。これは近・現代の耕作地造成に伴う盛土（1層）である。その下ににぶい褐色粘質土・にぶい黄褐色粘質土・暗灰黄色シルト層（3者合わせて2層）が斜面に向かって順に堆積する（第6図-6～8）。にぶい黄褐色粘質土・暗灰黄色シルト層は約20cm、にぶい褐色粘質土層は厚いところで約30cmの厚さを測る。弥生時代中期後半から7世紀までの遺物（第46図-117～120）を包含するのみで、近世の遺物は含まれていないが、他の調査区と同じく近世の遺物包含層と思われる。斜面の低い部分にはさらにその下ににぶい黄色粘質土層（3層）が約25cm堆積する（第6図-9）。古代の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。また、この3層は方形周溝墓の周溝堤上最上層の上とまったく同じであり、古代の造成に伴う整地層と考えられる。弥生時代中期後半から7世紀後葉までの遺物を多く包含する（第46図-122～140）。斜面西端部には部分的にではあるが、3層の下ににぶい黄色粘質土層の堆積が確認できる（第6図-10）。方形周溝墓の周溝堤上（第6図-11・12）がこの層の上面にのることから、にぶい黄色粘質土層は周溝墓のマウンドであったことがわかる。

第2節 遺構と遺物

1区

【遺構】(第7～9図)

調査地のもっとも北に位置する調査区である。宅地造成により北側の上段と南側の下段とに分かれる。地山上面で近世以降・7世紀後葉から8世紀前葉・弥生時代中期後半の3時期の遺構を検出した。

近世以降の遺構 (第9図)

段と溝(溝17)をそれぞれ1条ずつ検出した。

段・溝17 調査区の下段側で検出した。耕作地の雑壟造成に伴う段と、その裾に設けられた溝である。丘陵の等高線と並行するように築かれるため、当調査区内ではほぼ東西方向に向くが、西側の延長は2区に至って南北方向へと向きを変える。段の高低差は約40cmを測る。溝17はこの段と一緒に遺構として掘削されており、その幅は段の肩から約1.5mを測る。深さは約25cmである。埋土はにぶい黄橙色のやや粘質のシルトである。

なお、上段側の東半部はブロック塀を境に溜池であったことが確認された。遺構は全く遺存していない。

7世紀後葉から8世紀前葉の遺構 (第8図)

掘立柱建物跡1棟(建物1)、掘立柱塀跡1条(塀1)のほか小ピット数基を検出した。

建物1 調査区の北端で検出した。梁間2間の南北棟で、桁行は3間目の柱穴までを確認した。おそらく2間×3間でおさまるものと思われる。柱間は梁間・桁行とも1.9m等間で、主軸は座標北から東に5°振る。柱掘方は隅丸長方形を呈する。

塀1 下段北寄りで検出した。柱間6間の東西塀であるが、さらに調査区の東側に延びることが予想される。柱間は2.5m等間であるが、西から1間目と3間目の柱穴は後世の擾乱により削られており確認できない。建物1と同じく座標北から東に5°振っており、両者が同時期に存在していたことを示唆する。柱掘方は隅丸長方形を呈する。

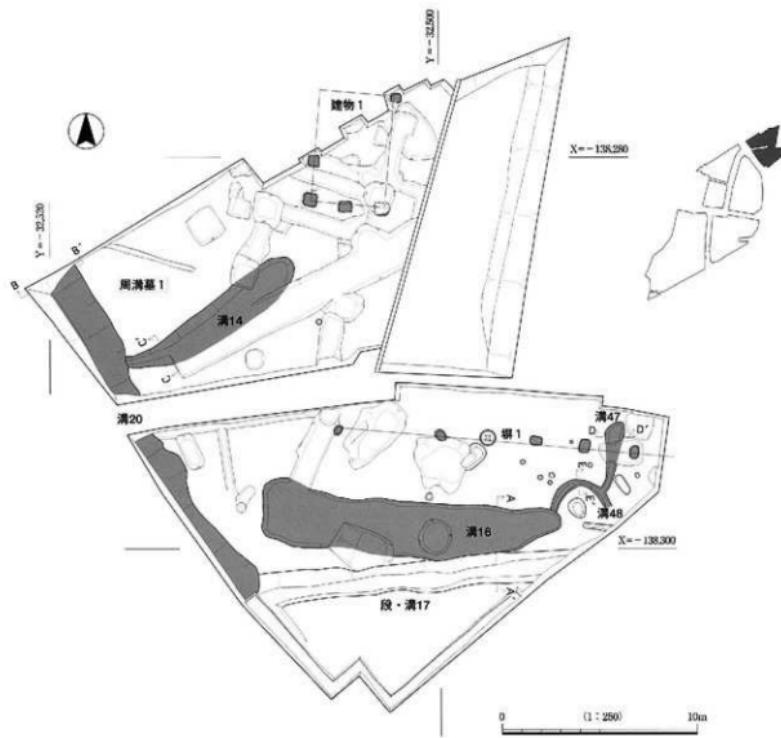
弥生時代中期後半の遺構 (第9図)

溝5条(溝20・14・16・47・48)と、それらの溝から復原できる方形周溝墓1基(周溝墓1)を検出した。

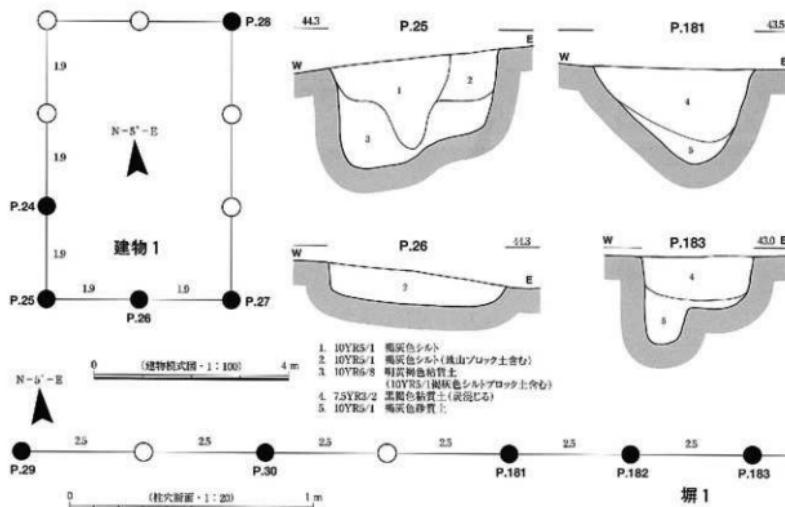
溝20 調査区の西壁に沿って検出した。溝の西脇は調査区外のため確認できていないが、幅が3m以上あることは確実である。横断面はV字状を呈し、深さは約1.3mを測る。埋土は下層から明黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰黄褐色シルトの3層である。下層からは弥生土器が、上層からは弥生土器のほか7世紀中葉から後葉の須恵器が出土した。遺跡内部の区画溝であったと考えられる。

溝14 上段西寄りで検出した。西端は細くなり、溝20にはば直角に取り付く。長さ10m、深さ約30cmで、最大幅は約2mに復原できる。埋土は褐色粘質土で、弥生土器を多く含む。

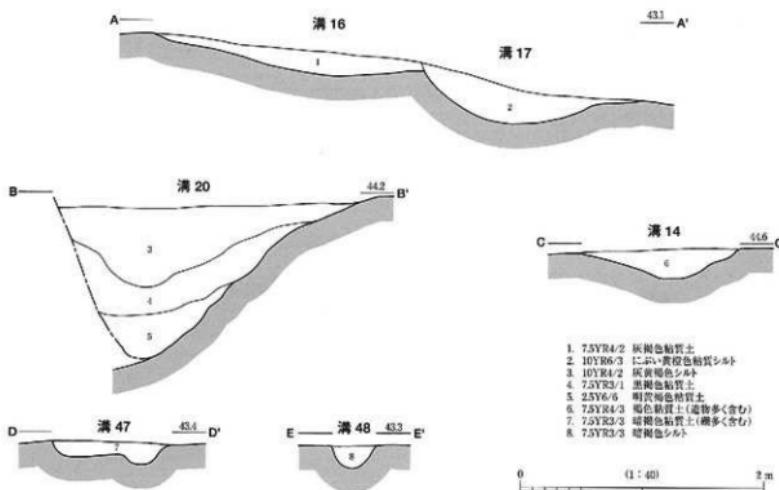
周溝墓1 調査当初から方形周溝墓として認識できたものではないが、上記のように、溝14の西端が細くなり溝20と直角につながること、また溝14に弥生土器が多く含まれていることから、溝20を西辺、溝14を南辺の周溝とする方形周溝墓として復原した。墳丘のマウンド、および主体部は確認できなかった。溝14の規模から墳丘は東西約9.5mであったと推定できるが、東辺の周溝も調査区内であるにもかかわらず確認できなかった。主軸は座標北から西に約32°振る。これを方形周溝墓とするには問題も



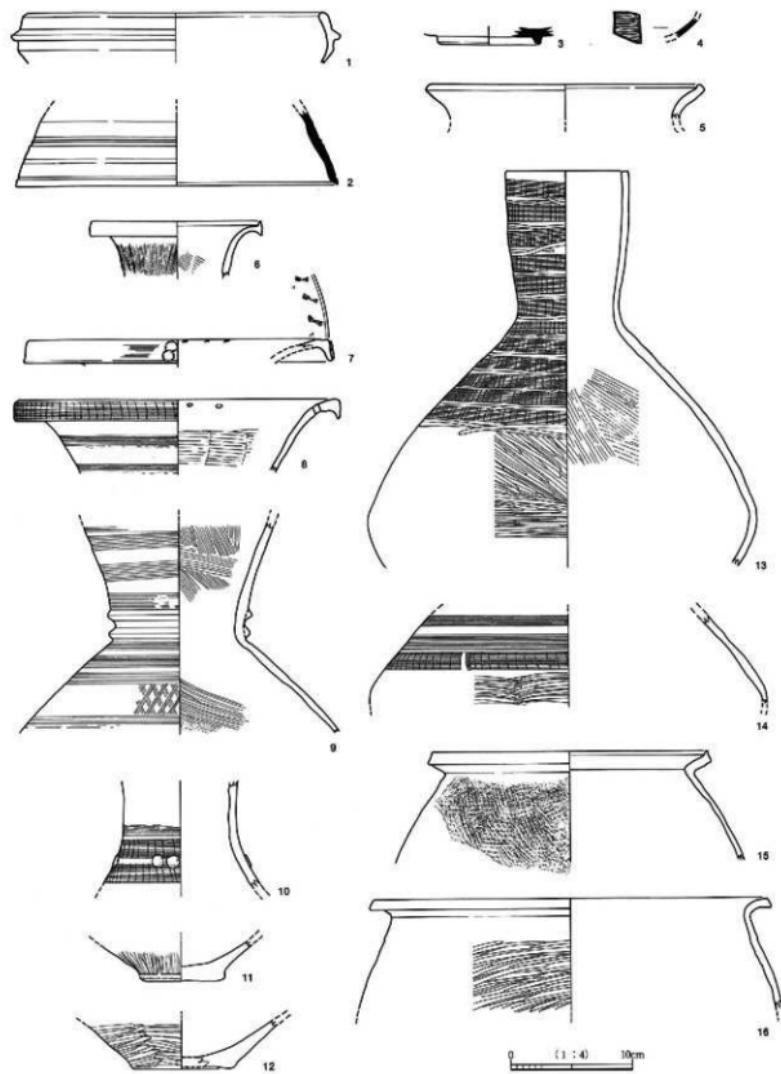
第7図 1区検出遺構全体図



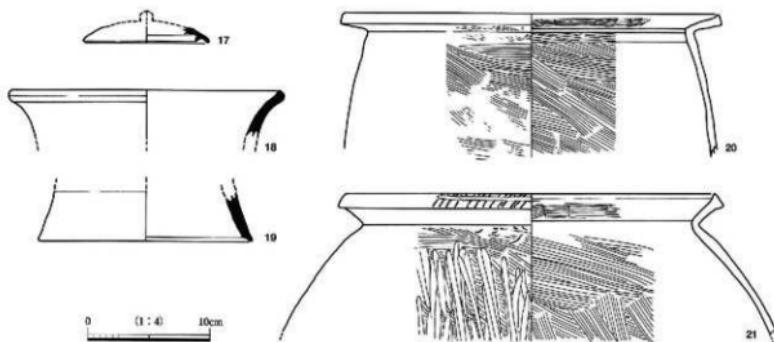
第8図 1区検出建物1・堀1平・断面図



第9図 1区検出溝14・16・17・20・47・48断面図



第10図 1区出土遺物 (1~4、2層、5、3層、6~15、浦14)



第11図 1区出土遺物 (17~19. 溝20上層、20・21. 溝20下層)

あり、それについては第4章で検討する。

溝16 下段中央で検出した。東西方向の溝で、長さ約15m、幅約3m、深さ約20cmを測る。遺物が出土しておらず、造構の時期を特定できなかつたが、埋土が溝14の埋土に似る灰褐色粘質土であるから、弥生時代の溝とした。ただし造構の肩部は非常に緩やかであり、また全体にも浅いことから、造構とするよりは単なる溝状の窪みと考えたほうがよいかもしれない。

溝47 下段東半で検出した。南北方向の溝で、長さ約3.5m、最大幅約1m、深さ10~20cmを測る。南端は細くなり溝48に取り付く。埋土は礫を含む暗褐色粘質土である。

溝48 同じく下段東半で検出した。弧を描く溝で、幅約35cm、深さ約20cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。

【遺物】(第10・11図)

2層からは古墳時代の須恵器器台(2)、7世紀後葉から8世紀前葉の須恵器壺(3)のほか、12世紀代の瓦器碗片(4)、18世紀後半以降の炮烙片(1)が出土した。これにより、2層の年代が18世紀後半以降であることが判明する。(1)は枚方市星ヶ丘周辺で焼かれたものか。3層からは8世紀前半の土師器壺(5)が出土した。溝16・20からは弥生時代中期後半の上器(6~16・20・21)が出土するが、溝20の上層には7世紀中葉から後葉にかけての須恵器(17~19)も含む。これはこの時期に溝を埋める整地が行われたことを示している。(6~14)は壺、(15・16・20・21)は壺で、(8・10・12・14)は生駒西麓産の胎土である。細頸壺(13)は肩部から口縁部にかけて12条の櫛描縦状紋を施し、それぞれの間に2周するヘラミガキを施す。(21)は体部外面にハケメの後、粗いヘラミガキを施す。口縁部の列点紋上にも1条のヘラミガキが巡る。

2区

【遺構】(第12~16図)

1区の南側に位置する。溜池や住宅解体に伴う擾乱が著しく、遺構の残りが非常に悪い。地山上面で近世以降・7世紀後葉から8世紀前葉・古墳時代・弥生時代中期後半の4時期の遺構を検出した。

近世以降の遺構 (第16図)

溝4条(溝30・31・34・64)と段を1段検出した。

段・溝34・64 調査区東辺で検出した。1区からつづく耕作地の雑壟造成に伴う一連の遺構であり、同様に溝は段の裾に設けられる。両者は1区ではほぼ東西方向であったが、当調査区に至っては座標北から僅かに東に振る南北方向へと向きを変える。段の高低差は約35~50cmで、溝34の幅は段の肩から約1m、深さは約10cmを測る。溝64は溝34の東側に接する溝である。おそらく溝34の機能低下に伴っての掘り直されたものと思われ、溝34と重複する箇所も多い。幅は約0.8~1.5mで、深さは約10cmを測る。

溝30・31 調査区西寄りで検出した。同じく耕作地の造成に伴う遺構である。上記の段と並行する南北溝であり、座標北から僅かに東に振る。溝31は上記の段から西に約12m隔て、溝30はさらにその西に約1.5m隔てる。溝31の東側と西側とでは高低差が約20cmあり、その高低差は溝31の北側にも僅かな段として確認できる。これによって、溝31は溝34と同様に本来は段の裾に設けられた溝で、溝30はその段の上段際に設けられた溝であったことがわかる。溝30は幅約30cm、深さ約5cm、溝31は幅約50~70cm、深さ約10cmを測る。埋土は共に暗灰黄色砂質土である。

以上によって、溝34(段)から溝31(段)までが耕作地の一区画であったことが明らかとなった。

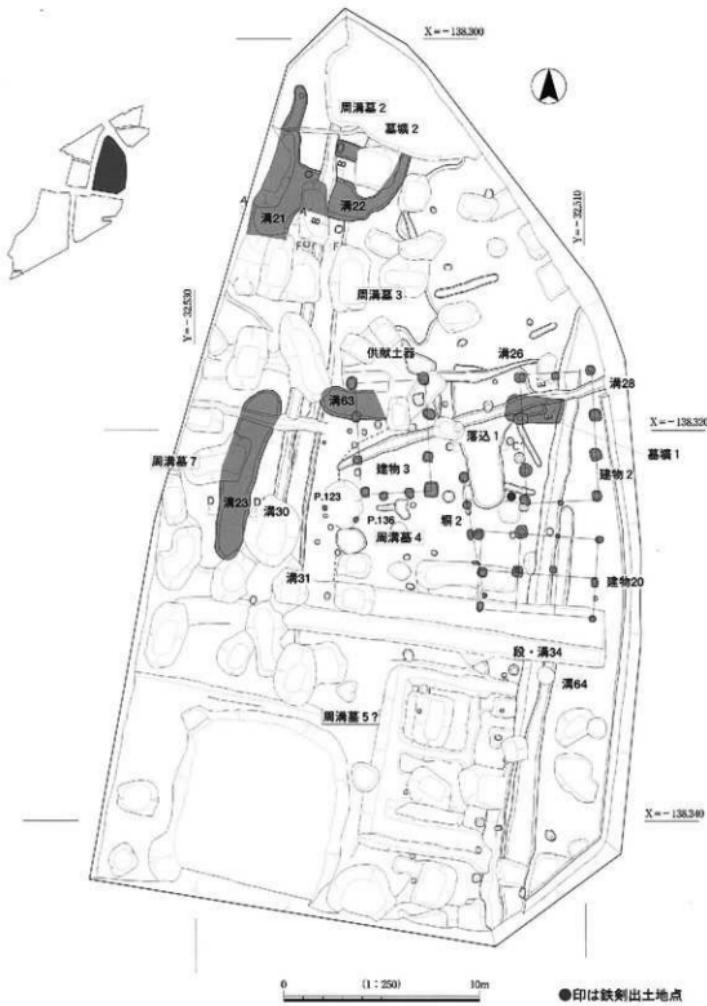
7世紀後葉から8世紀前葉の遺構 (第13・14図)

掘立柱建物跡3棟(建物2・3・20)、掘立柱塀跡1条(塀2)、落ち込み1基(落込1)、溝2条(溝26・28)のほか小ピット(ピット123・136ほか)を多数検出した。

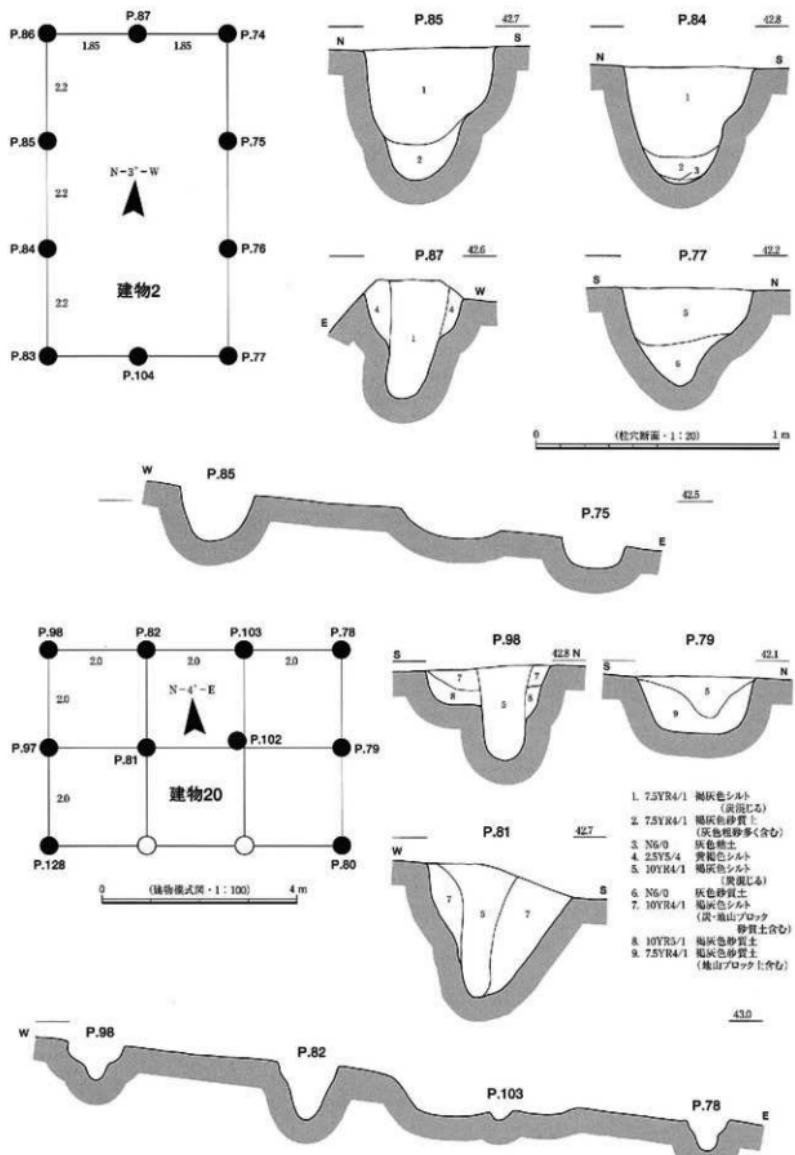
建物2 調査区の東端で上記の段と溝34を跨ぐように検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟で、主軸は座標北から西に3°振る。柱間は梁間が1.85m等間、桁行は2.2m等間で、柱掘方は隅丸の方形、あるいは長方形を呈する。ピット82・83からは7世紀後葉の土師器片が出土している。

建物3 調査区の中央、建物2の西側に4.9m隔てて検出した。桁行3間の南北棟であるが、北側妻柱が擾乱によって失われているため、梁間が何間であったのかが判然としない。梁間が3.6mあるので、通常ならばこの間に妻柱を1本据えて、梁間2間、柱間は1.8m等間と復原すべきであろうが、南側の妻柱筋上には、柱間が1.2m等間になるよう2個の柱穴が位置する。この2個の柱穴が建物に伴うものであるのか疑問も残るが、建物に伴うものだとすれば、少なくとも南側妻柱筋は3間ということになる。建物への出入口とすべきか。なお、後述する3区検出の建物5のように、全く妻柱の痕跡をとどめていない例もあり、検討の余地を残す。桁行の柱間は1.9m等間で、主軸は建物2と同じく座標北から西に3°振る。また、北側の妻柱筋も建物2と揃えており、両者が同時期に存在していたことを示唆する。柱掘方は隅丸方形や楕円形を呈する。ピット70から7世紀後葉のものと思われる須恵器坏片が出土した。

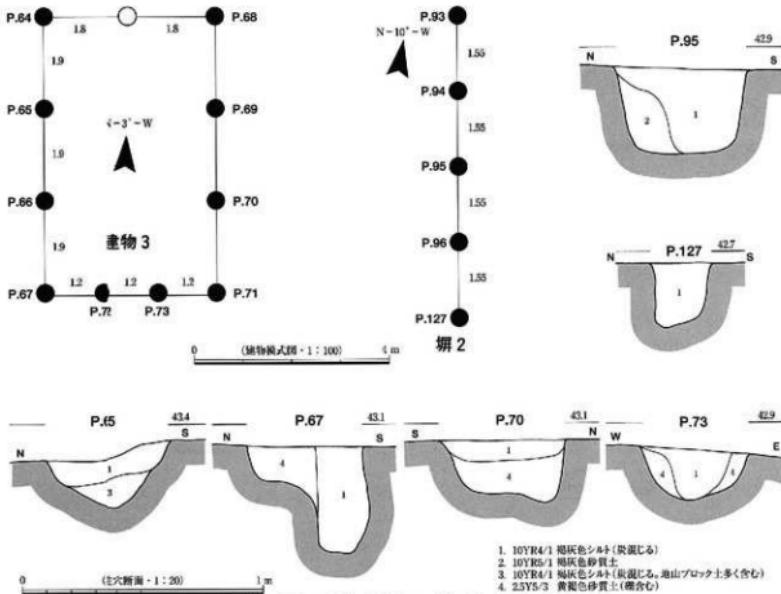
建物20 建物2の南側で検出した。東西方向に向く梁間2間、桁行3間の縦柱建物跡である。検出した当初は、建物2と一体となる桁行6間の長い南北棟と考えていたが、建物2の北から3間目の柱筋上で



第12図 2区検出遺構全体図



第13図 2区検出建物2・20平・断面図



第14図 2区検出建物3・塚2平・断面図

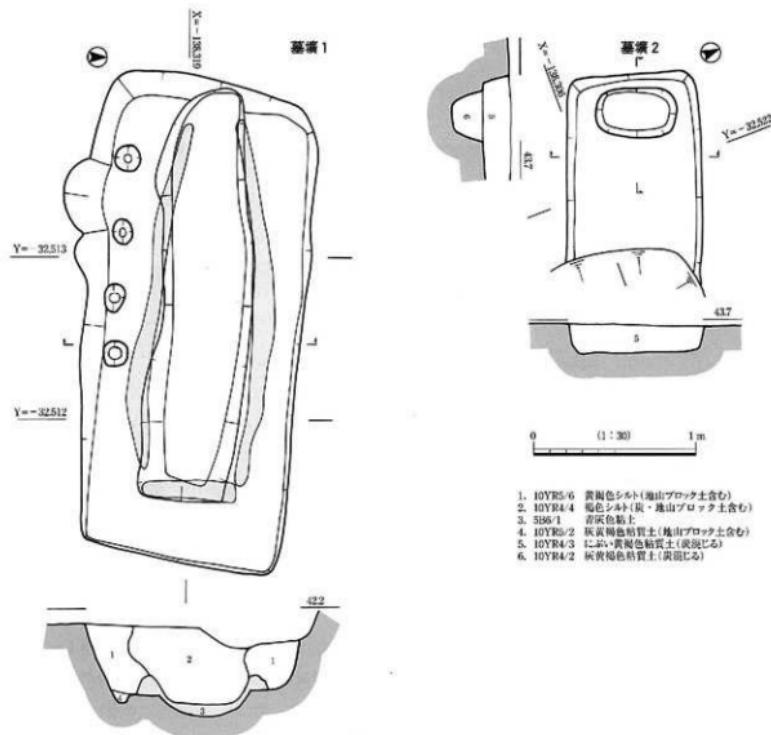
支柱の柱穴が検出されたことから、建物2とは別の建物であることが判明し、建物2よりもさらに西側に1間延びた東西棟としてまとまることが明らかとなった。柱間は梁間・桁行とも2.0m等間であるが、建物内のピット102のみわずかに北側にずれる。建物2とは振れを異にし、座標北から東に4°振る。柱掘方は隅丸方形、もしくは円形を呈する。

塚2 建物1・2の西側で検出した。建物20と一部重なるが、柱穴同士が切り合っていないため、両者の先後関係は不明である。柱間4間の南北塚で、座標北から西に10°振る。柱間は1.55m等間である。柱掘方に隅丸長方形を呈する。

ピット123・136 建物3の南西に位置する小ピット2基である。ピット123は直径25cmの円形で、深さは20cm、ピット136は直径20cmの円形で、深さは28cmを測る。埋土は共に地山ブロック土と炭を含む褐灰色シルトである。ピット123からは7世紀中葉の須恵器壊蓋が、ピット136からは7世紀後葉の須恵器壊が出土した。

落込1 調査区中央やや東寄りで検出した。南北約7.4m、東西1.8~4.8mの不整形な平面形で、深さは東側が若干深く、約12~16cmを測る。埋土は炭や地山ブロック土を含む灰褐色シルトで、7世紀中葉の土師器・須恵器を包含する。方形周溝墓の周溝のなごりであったとも考えられるが、詳細は不明。

溝26・28 寒込1と重複して検出した。溝26は幅25~60cm、深さ約10cmで、埋土は炭を多く含む灰褐色シルトである。7世紀中葉の土師器・須恵器が出土している。落込1の埋土上面で検出できる。溝28は幅約60~70cm、深さ約25cmで、さらに東の調査区外へと続く。埋土は炭を含む黄褐色砂質土で、こちらは落込1に切られる。両者とも座標東から北に約15°振る。



第15図 2区検出墓壙1・2平・断面図

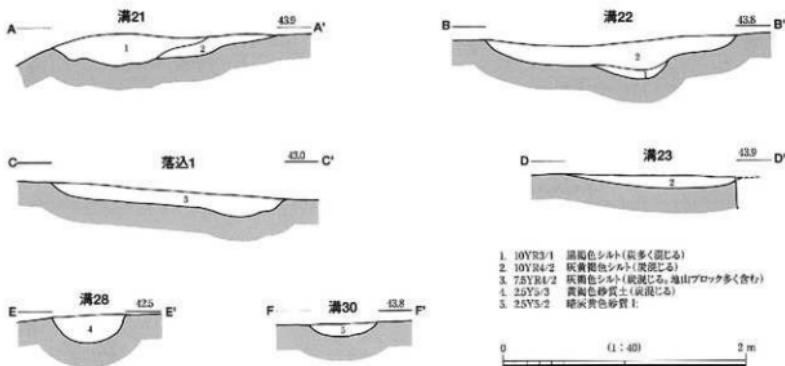
以上から、落込1と溝26・28の先後関係は、古い順に溝28→落込1→溝26であったことが判明する。

古墳時代の遺構（第15図）

墓壙1基（墓壙1）を検出した。

墓壙1 7世紀後葉から8世紀前葉の遺構（落込1・溝28）の下層で検出した。方形周溝墓の周溝（溝63）の東延長部にあたることから、周溝内埋葬の墓壙とも考えられるが、5区で報告する方形周溝墓の主体部とは構造的に明らかな違いが認められる。したがって古墳時代の墓壙と判断したが、検討の余地がある。

墓壙の平面形は全長3.0m、幅1.38mの長方形を呈し、主軸は座標西から北に約7°振る。深さは約43cmであるが、中軸線上に幅約55~60cm、長さ2.55m、深さ12cmの窪みを設ける。窪みの西端は先細りとなり、西壁にぶつかる。この窪みは木棺を据え付けるためのものであるが、木棺を据えるに先立ち、窪み内には青灰色粘土が敷かれる。粘土の東端は木棺の形状にあわせ四角くおさまるが、西端は窪みの形状と同じく先細りとなる（第15図墨綱部）。また木棺の側板及び東小口板に沿って15cm程度盛り上がる。この粘土の盛り上がり状況から、その内側に納められた木棺の底幅が約40cm強であった



第16図 2区検出溝21~23・28・30・落込1断面図

こと、側板は垂直には立たず、やや外側に開き気味であったこと、また平面形は船先状を呈していたことが判明する。これは木棺として舟の一部が転用された可能性を示唆するものである。ただし棺自体は検出できなかった。墓壙掘方の埋土は地山ブロック土を含む黄褐色シルト、棺内の埋土は炭と地山ブロック土を含む褐色シルトである。なお、南壁際の掘方底で、直径約15cm、深さ10cm弱の小ピットを4基検出した。約40cm間隔に並ぶものである。杭跡と思われるが、北壁際では確認できず、その性格は不明である。棺を支えたのであろうか。墓壙内からは全く遺物は出土していない。

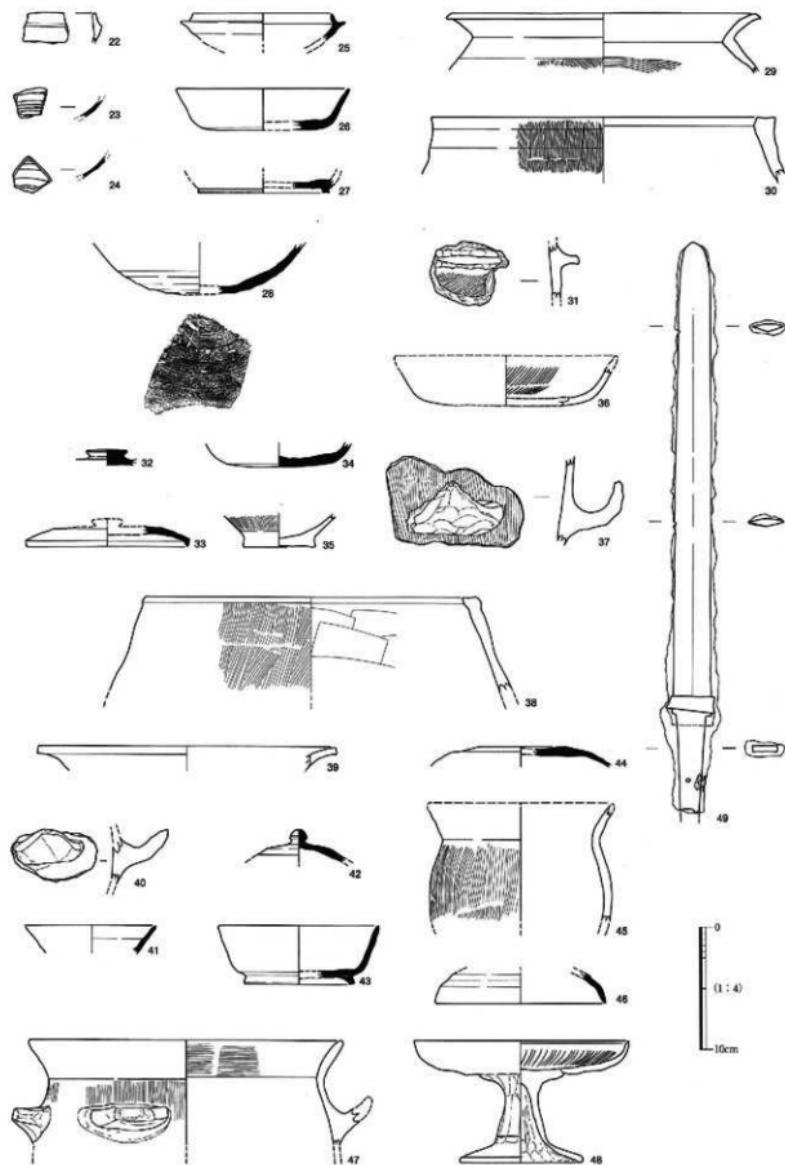
弥生時代中期後半の遺構（第15・16図）

方形周溝墓4基（周溝墓2～4・7）を検出した。

周溝墓2 調査区の北端で検出した。溝21を西辺、溝22を南辺、および東辺の周溝とする方形周溝墓である。溝22は南に接する周溝墓2と、溝21は3区検出の周溝墓6と共有する。墳丘は後世の削平を受けているために、マウンドは残っていない。周溝も非常に浅い。南辺周溝がもっとも残りがよく、幅約2m、深さ約30cmを測るが、東辺周溝は幅約0.8mの小規模なものとなる。埋土は下層が炭を多く含む黒褐色シルト、上層が炭を含む灰黄褐色シルトである。溝21は幅約70cm、深さ約5cmを測る。両溝からは弥生土器が出上している。墳丘の規模は東西5m強であるが、北辺周溝を検出していないため、南北長は不明。当遺跡内で検出した周溝墓の中ではもっとも小規模なものである。墳丘の主軸は座標西から北に約18°振る。墳丘中央やや南よりで主体部（墓壙2）を検出した。

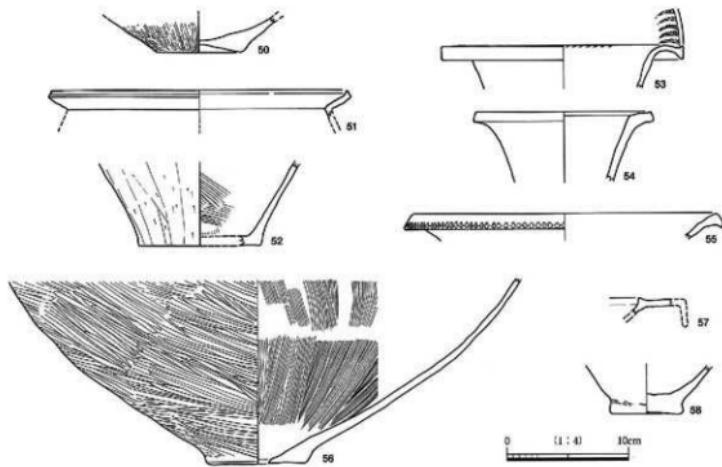
墓壙の規模は幅85cm、深さ約18cmを測る。東辺部が後世の攪乱により削られているため、全長は不明であるが、1.3m以上はある。平面長方形を呈し、主軸は墳丘の振れに合わせる。西端部底面には木棺の小口板を納める小規模なピット（以下、小口穴とする）を握る。長径50cm、短径32cmの平面楕円形を呈し、深さは20cmを測る。この規模から、木棺は小口板が底板よりも外側で、底板よりも下に延びる構造（第51図-III）であったと推定できるが、木棺自体の痕跡は確認できなかった。墓壙内の埋土は炭を含むべし黄褐色粘質土で、小口穴内は炭を含む灰黄褐色粘質土である。

周溝墓3 周溝墓2の南側に位置する。溝21を西辺、溝22を北辺、溝63を南辺の周溝とする方形周溝墓として復原した。溝22は周溝墓2と、溝63は周溝墓4と、溝21は3区検出の周溝墓6と共有する。溝21は周溝墓2側からづくが、周溝墓3側が幅が広い。幅約1.85m以上、深さ約26cmである。



第17図 2区出土遺物

(22~31. 2層、32~38. 3層、39~40. 建物2、41. 建物3、42. ピット123、43. ピット136、44~45. 漢26、46~48. 落込1、49. 地面直上)



第18図 2区出土遺物 (50~53. 溝21, 54. 溝22, 55~58. 溝63)

埋土は下層が炭を含む灰黄褐色シルト、上層が炭を多く含む黒褐色シルトである。墳丘の規模は、南北約8.5mで、主軸は座標北から東に約12°振る。後世の削平・攪乱が著しく、その他詳細を明らかにし難い。墳丘のマウンドも主体部も残っていない。

周溝墓4 周溝墓3の南側に位置する。溝23を西辺、溝63を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝23は3区検出の周溝墓7と、溝63は周溝墓3と共有する。溝23の規模から、墳丘の規模は南北約8mであったことが復原できるが、東西長は不明。主軸は座標北から東に約15°振る。溝23は幅約1.4m、深さ約11cmで、埋土は灰黄褐色シルトである。溝63は幅約1.4m、深さ約10cmを測る。溝63の延長部、ちょうど当周溝墓の北東隅にあたる位置から、供獻土器が1点出土した。周辺が現代の攪乱によって削られているため、溝の埋土は確認できないが、周溝底に据えられていたものであることは間違いない。上半を欠損する大型の壺で、底部には穿孔がある。なお、溝63は周溝墓3と共有するため、この供獻土器がどちらの周溝墓に伴うものかは判断できない。この他にも弥生土器が数点出土している。後世の削平・攪乱が著しく、墳丘のマウンドも主体部も残っていない。

周溝墓7 周溝墓3の西側に位置する。溝23を東辺の周溝とする方形周溝墓で、3区で西辺周溝、北辺周溝を検出している。これについては3区の項で報告する。

なお、4区で検出した方形周溝墓の配置から、本来は周溝墓4よりも南側にも方形周溝墓（周溝墓5）がつづいていたことが復原できるが、溜池などが位置するため、確認することはできなかった。

【遺物】（第17・18図）

2層からは7世紀初頭から8世紀前葉にわたる須恵器壺（25~27）、土師器壺（29）などのほか、新しいものとして13世紀代の瓦器碗片（23・24）や18世紀後半以降の炮烙片（22）が出土した。（22）は枚方市津田で生産されたものであるが、1区出土の炮烙よりも若干時期が下る。3層からは弥生土器のほか、7世紀後葉の土師器壺（36）、須恵器壺蓋（32・33）などが出土した。（32）は焼成不良のため

土師質である。建物跡に伴う柱穴や、建物跡としてはまとまらないピットからは、主に7世紀中葉から後葉に位置する遺物が出土している(39~43)。ただしその点数は少ない。ピット123出土の(42)は7世紀中葉の須恵器壺蓋、建物2のピット82・83出土の(39・40)は7世紀後葉の土師器壺、建物3のピット70や、ピット136出土の(41・43)も同じく7世紀後葉の須恵器壺である。溝26からは7世紀後葉の土師器壺(45)、須恵器壺蓋(44)、落込1からは7世紀中葉の土師器高壺(48)、須恵器壺蓋(46)のほか、土師器壺(47)などが出土している。溝21・22・63からは弥生時代中期後半の土器が出土した(50~58)。(51・52)は同一個体である。体部外面にはヘラケズリを施し、頸部内面はやや尖りぎみとなる。(56)は大型の壺である。供獻土器であり、底部に穿孔を施す。体部内面にはハケメ、外面にはヘラミガキを施す。

なお、特筆すべき遺物として、地山上面から出土した鉄剣(49)がある。表面全体が厚く鏽に被われているが、破断面の観察やX線写真から、各部の形態やすび法が判明する。全長は46.8cmで、間幅3.2cm、最大厚6mmを測る。剣身には丸みを帯びた鏃があり、断面は菱形を呈する。切先はほぼ左右対称である。剣身のみの長さは38.9cmである。茎は下端を欠くため、本末の長さは不明であるが、残存長は7.9cmを測る。茎の最大幅は2.4cmで、茎尻に向かって細くなる。断面は長方形で、中軸線上から若干下ずれた位置に目釘穴を1孔穿つ。関は左右で若干形が異なる両關となる。柄の木質が僅かに残る。鞘は遺存していないが、鞘口の金具がX線写真で確認できる。裾広がりの形状である。この鉄剣の時期については、弥生時代の中で収まると考えられるが、鞘口の金具が残っていることから、古墳時代前期まで下る可能性もある。

3区

【遺構】(第19~24図)

2区の西側に位置する。調査区の中央を横断する擁壁とライフラインによって、調査区が南北に2分される。北半部は近年まで耕作地として利用されていたため、遺構の残りが良好であったが、南半部は溜池や住宅解体に伴う搅乱が著しく、遺構の残りが悪い。地山上面で近世以降・7世紀後葉から8世紀前葉・弥生時代中期後半の3時期の遺構を検出した。

近世以降の遺構

溝1条(溝5)を検出した。

溝5 調査区北半のはば中央部で検出した。2区検出の溝30を東側溝とする耕作地の、西側の側溝にあたる。南北方向の溝で、2区検出の溝30・31と同じく、座標北から僅かに東に振る。幅約70cm、深さ約10cmで、埋土はにぶい黄橙色砂質土である。溝30からは約21m隔てる。

7世紀後葉から8世紀前葉の遺構(第20・21・23図)

掘立柱建物跡5棟(建物4~8)、掘立柱塙跡1条(塙3)、土坑1基(土坑8)のほか小ピット数基を検出した。

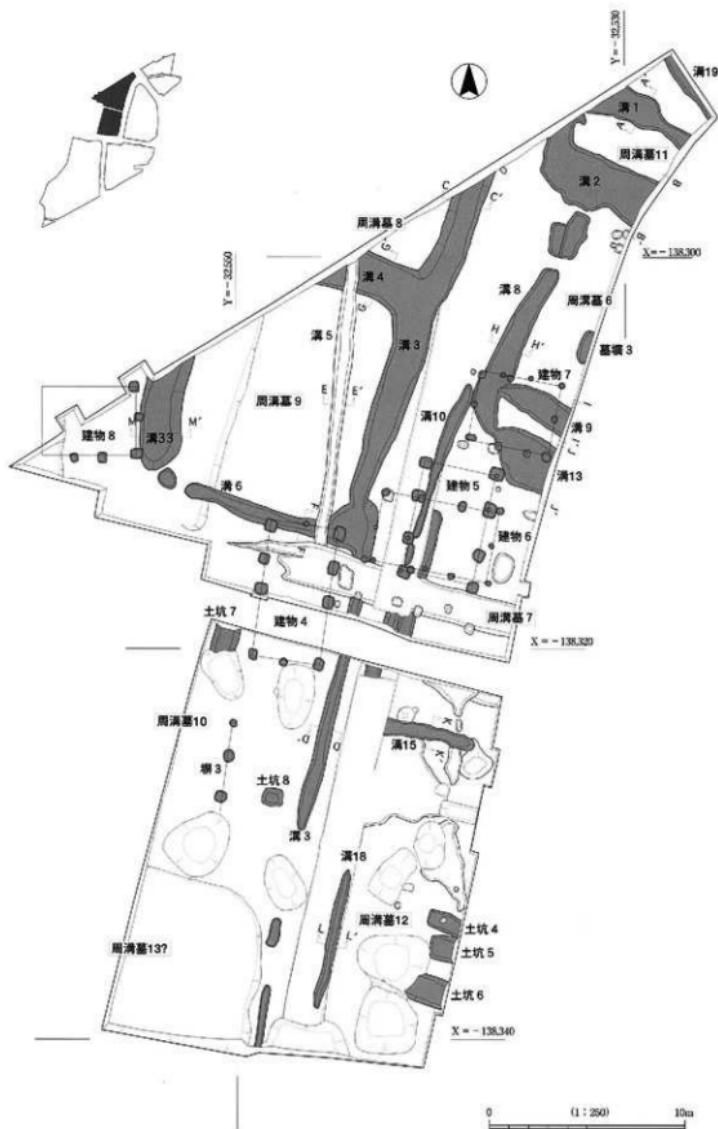
建物4 調査区を2分する擁壁を跨いで検出した。梁間2間、桁行4間の南北棟で、柱間は梁間・桁行とも1.75m等間である。主軸は座標北から東に8°振る。柱掘方は長辺約70cm、短辺約60cmの隅丸長方形であるが、南北の両妻柱のみ規模を小さくする。特に北側妻柱はそれが顯著であり、直径約30cmの円形となる。南から2間目の柱穴は調査区外のため検出していないが、おそらく擁壁工事によって破壊されているものと思われる。なお柱穴は溝6の埋土上面から明瞭に検出できた。ピット14からは7世紀中葉の須恵器が出土している。

建物5 建物4の東側で検出した。桁行3間の南北棟であるが、妻柱は南北の両側とも確認できなかった。建物4の妻柱のように他の柱穴よりも小規模であったために、後世の削平によって失われたものと思われる。おそらく本来は梁間3.7mを2等分するように妻柱を立てる、梁間2間の建物であったと推定できる。桁行の柱間は1.9m等間で、主軸は座標北から東に12°振る。建物4とは建物の振れを異にするが、柱掘方は建物4の柱穴と同規模の隅丸方形を呈しており、両者が同時期に存在していたことを示唆する。柱穴の中には黄色、あるいは浅黄色シルトが混入する柱抜き取り痕跡が明瞭に検出できるものがある。

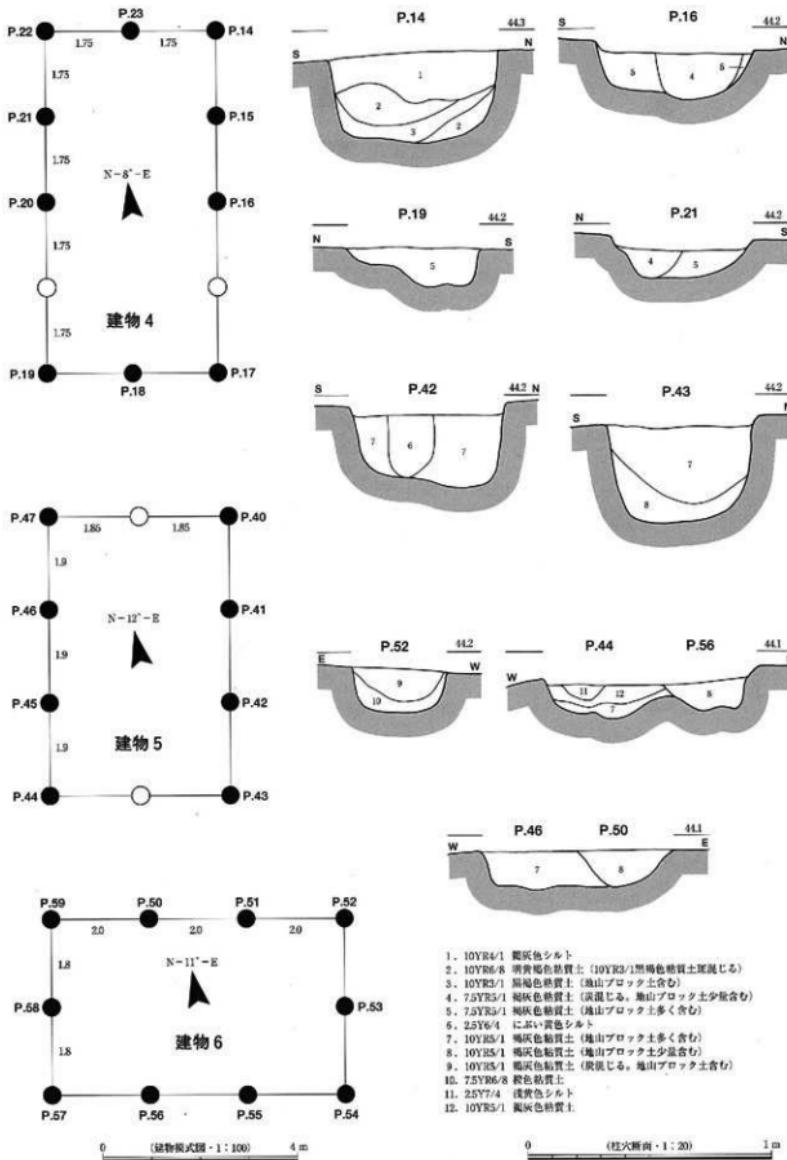
建物6 建物5と重複して検出した。柱穴が建物5の柱穴と切りあっており、平面的にも、断面観察でも、建物6の柱穴が建物5の柱穴を切っていることが明らかであった。これによって建物6が一時期新しい建物であったことが判明した。梁間2間、桁行3間の東西棟で、座標北から東に11°振る。柱間は梁間が1.8m等間、桁行が2.0m等間である。柱掘方は建物4・5とは異なり、直径40cm前後の円形を呈する。

建物7 建物6の北側で検出した。梁間2間、桁行3間の東西棟で、柱間は梁間が1.8m等間、桁行1.4m等間である。建物6と同じく座標北から東に11°振る。柱掘方も建物6と同規模の円形を呈しており、両者が同時期に存在していたことを示唆する。なお、ピット10には弥生土器が混入していた。

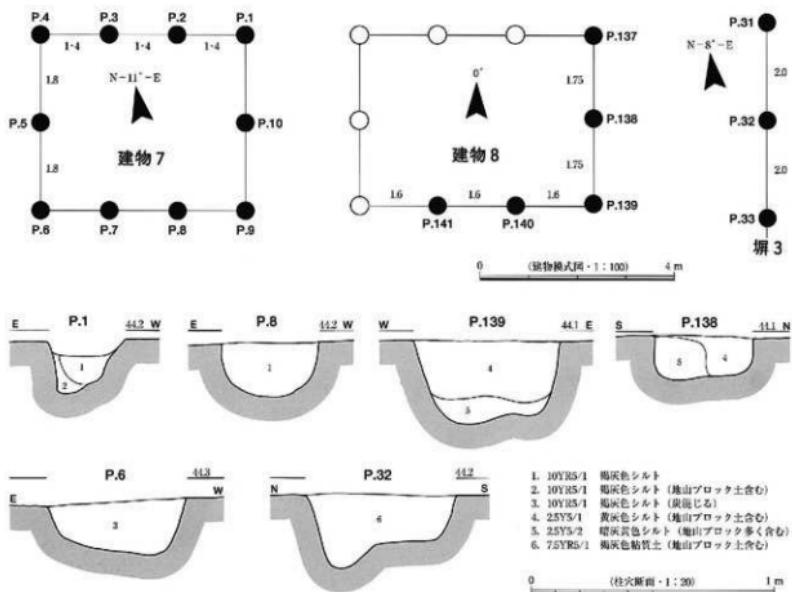
建物8 調査区の西端で検出した。調査区の一部を拡張し、柱穴の並びを確認した結果、東西棟であることが判明した。建物の南東隅のみの検出ではあったが、梁間2間、桁行は他の建物の規模から3間と



第19図 3区検出遺構全体図



第20図 3区検出建物4~6平・断面図



第21図 3区検出建物7・8・堀3平・断面図

推定される。柱間は梁間が1.75m等間、桁行が1.6m等間で、座標北を向く。柱掘方は建物4・5よりも一回り小さな隅丸長方形を呈する。

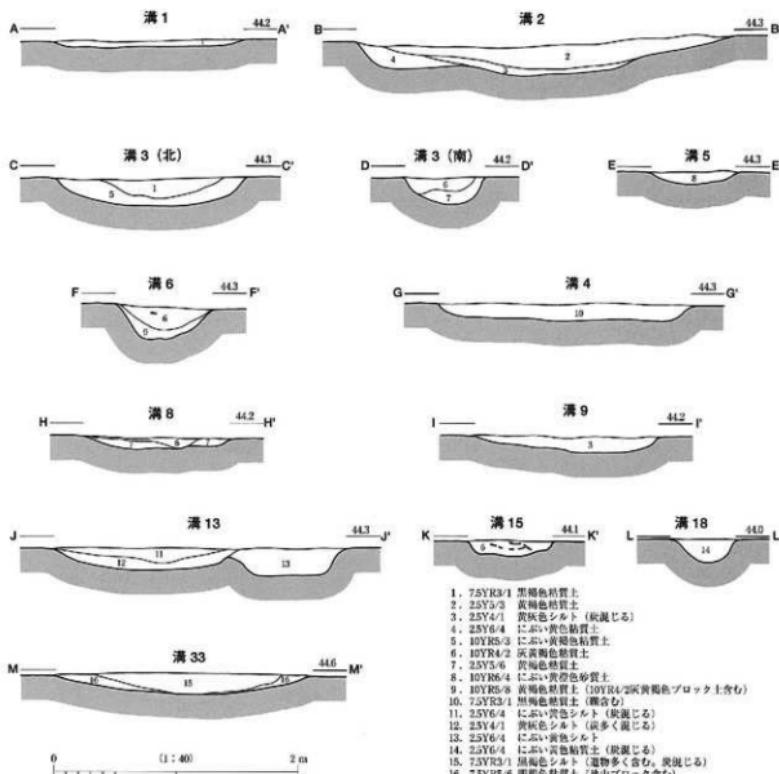
堀3 建物4の南側で検出した。柱間2間の南北堀であるが、さらに南の溜池側に向かって延びていた可能性が高い。柱間は2.0m等間で、建物4と同じく座標北から東に8°振る。柱掘方は隅丸長方形や楕円形を呈する。

土坑8 堀3の東側で検出した。平面形は長辺約1.1m、短辺約85cmの隅丸長方形を呈し、深さは78cmを測る。埋土は下層から灰白色粘土、灰白色粘質土、黄灰色シルト、黄灰色粘質土の4層である。

弥生時代中期後半の遺構（第22~24図）

方形周溝墓7基（周溝墓6・7・8・9・10・11・12）と墓道を検出した。

周溝墓6 調査区北半の東壁際に位置する。2区検出の溝21を東辺、溝13を南辺、溝8を西辺、溝2を北辺の周溝とする方形周溝墓である。南側に接する周溝墓7と一部重複する。溝21は周溝墓3と、溝2は周溝墓11と共有する。溝13は幅約2.4mを測るが、断面観察によって2条の溝が重複していることが判明した。すなわち南半に幅約1.1m、深さ約23cmの溝があり、それを切って北側に並行する幅約1.5m、深さ約18cmの溝が掘られるというものである。周溝の掘り直しを示すと考えられるが、これについては周溝墓7で報告する。溝8は幅約1~1.4m、深さ約10cmで、埋土は下層が黄褐色粘質土、上層が灰黃褐色粘質土である。溝2は幅2.5m強、深さ約24cmで、埋土は基本的には下層の炭を含む黄灰色シルトと、上層の黄褐色粘質土の2層で、弥生土器を包含する。墳丘の規模は東西約9m、南北約12mを測る。平面形は方形ではなく、やや南北に長い長方形となる。主軸は座標北から東に約25°振る。

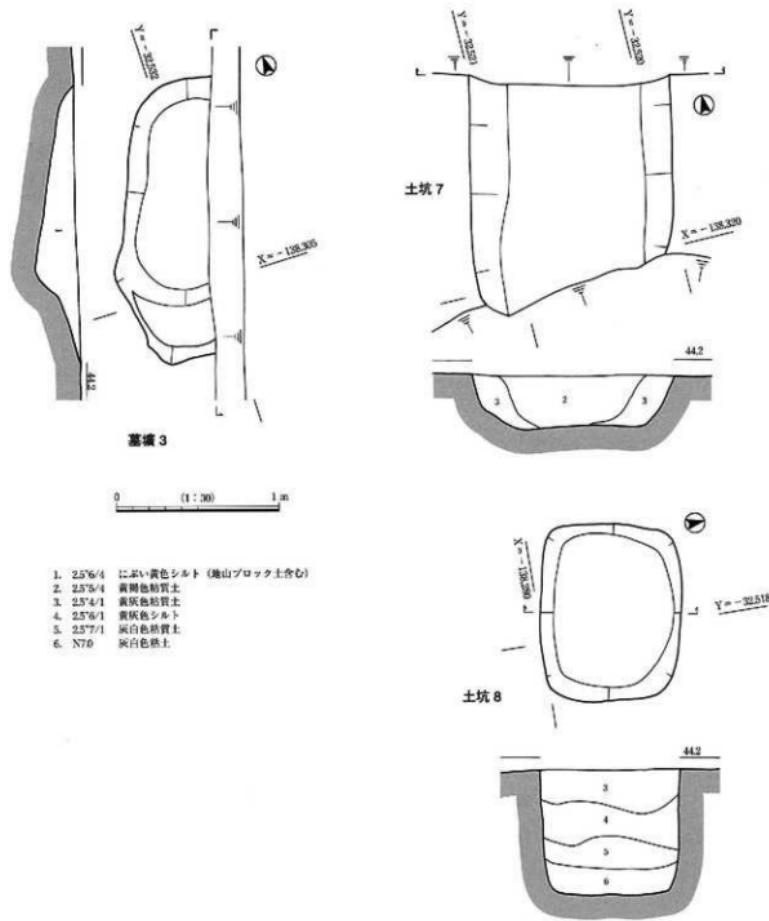


第22図 3区検出溝1~6・8・9・13・15・18・33断面図

マウンドは残っていないが、そのほぼ中央から、主体部の可能性がある墓塚3を検出した。

墓塚の規模は全長1.75m、深さ14cmを測る。東半が調査区外のため、幅は不明であるが、0.6m以上はある。平面椭円形を呈し、主軸は墳丘の振れに合わせる。壁面は緩やかな播鉢状で、埋土は地山ブロック上を含むにぶい黄色シルトである。木棺の痕跡は確認できなかった。

周溝墓7 周溝墓6の南側に位置する。2区検出の溝23を東辺、溝15を南辺、溝10(11)を西辺、溝9(13)を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝23は周溝墓4と、溝15は周溝墓12と共にある。溝15は幅75~85cm、深さ約12cmを測り、埋土は弥生土器が多く包含する灰黄褐色粘質土である。溝10は幅約35~70cm、深さ約15cm、溝9は幅約1.5m、深さ約15cmを測る。埋土は炭を含む黄灰色シルトである。以上から墳丘は東西約14m、南北約16mの南北にやや長い平面長方形であったことが復原できる。主軸は座標北から東に約16°振る。ただし、溝10の東側に接して溝11が掘削されていること、また周溝墓6で報告したとおり、溝13は2条の溝が重複していることなどから、周溝墓7は一度周溝の掘り直しが行われたことがうかがえる。周溝の切り合い関係から、まず溝23・15・11・13を周



第23図 3区検出墓壙3・土坑7・8平・断面図

溝とする東西・南北約13mの周溝墓7が築かれ、その後すぐに溝13を共有する周溝墓6が北側に接して築かれる。やや時を隔て、周溝墓7の周溝掘り直しが行われ、西辺周溝は溝10へ、北辺周溝は溝9へと切り替えられる。という変遷が辿れる。ただし、溝9は北接する周溝墓6の墳丘上への移設であり、現実としてこのような拡張が行われたかについては、若干の疑問も残る。なお、マウンドや主体部は検出できなかった。

周溝墓8 周溝墓6の西側、調査区北壁際に位置する。溝3を東辺、溝4を南辺の周溝とする方形周溝墓である。溝4は周溝墓9と共有する。溝3は幅約1.6m、深さ約22cmで、埋土は下層がにぶい黄褐色粘質土、上層が黒褐色粘質土、溝4は幅約2.1m、深さ約15cmで、埋土は縞を含む黒褐色粘質土で

ある。墳丘は南東隅部のみの検出であり、全体規模を把握できない。マウンドは残っておらず、主体部も確認できない。主軸は次に報告する周溝墓9とほぼ同じである。

なお、この周溝墓から南につづく周溝墓の列が、丘陵頂部に位置する一群となる。

周溝墓9 周溝墓8の南側に位置する。周溝墓8側からつづく溝3を東辺、溝6を南辺、溝33を西辺、溝4を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝4は周溝墓8と、溝16は周溝墓10と共有する。当調査区内では形状がもっともよく残る周溝墓であるが、丘陵の頂部に位置しているため、マウンド、および主体部は削平され残っていない。墳丘の規模は東西約9.5m、南北約12mを測る。平面形は方形ではなく、やや南北に長い長方形である。主軸は座標北から東に約15°振る。溝3は中央部が深く、墳丘両隅に向かって徐々に浅くなる。溝6と接する南東隅部は溜り状に広がり、さらに一段と深くなる。規模は幅約1.1~2mで、中央付近での深さは約20cmを測る。南東隅の溜り部分では深さ約25cmとなる。溝6は幅約80cm、深さ約26cmで、埋土は下層が黄褐色粘質土、上層が灰黄褐色粘質土で、弥生土器を多く包含する。溝33は幅約2.1m、深さ約18cmで、埋土は下層が地山ブロック土を含む明褐色粘質土、上層が炭を含む黒褐色シルトである。溝33の特に上層からは、四方の周溝の中でも、もっと多くの弥生土器が出土している。

周溝墓10 周溝墓9の南側に位置する。溝3を東辺、溝6を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝6は周溝墓9と共有する。溝3は周溝墓8・9側からつづく溝であるが、溝6を境に若干東にずれる。幅は約70~85cmで、深さはもっとも深い箇所で22cmを測る。埋土は下層が黄褐色粘質土、上層が灰黄褐色粘質土である。墳丘は南辺と西辺の周溝が検出できていないため、全体規模は明らかでないが、溝6の規模から、北側に接する周溝墓9と同規模であったと復原できる。主軸も周溝墓9と同じく座標北から東に約15°振る。マウンドは残っていないが、そのほか中央から、主体部の可能性がある土坑7を検出した。

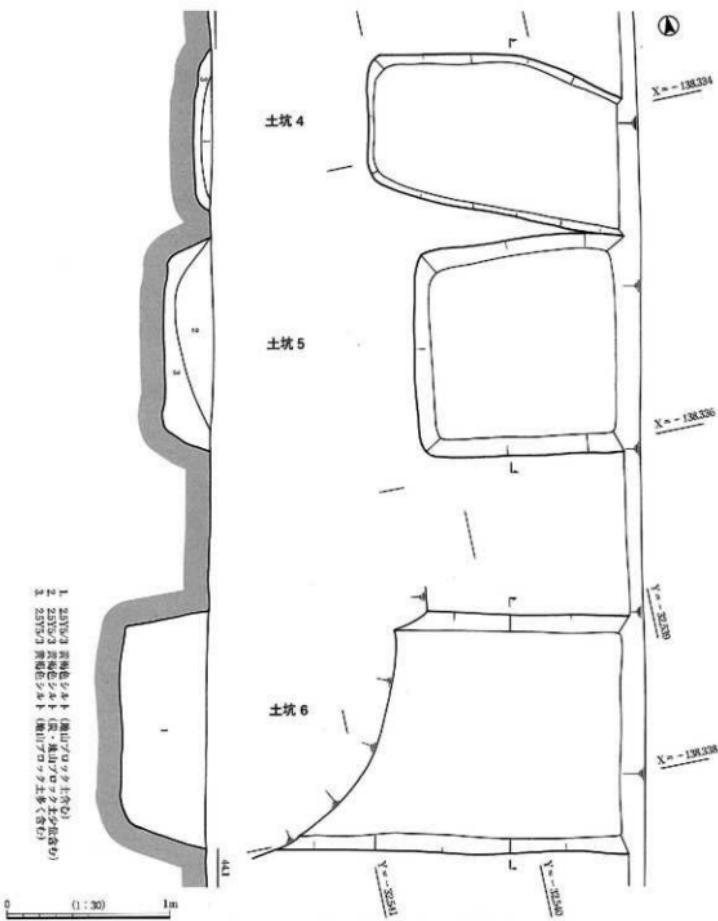
墓壙の規模は幅1.25m、深さ32cmを測る。両端が検出できないため、全長は不明であるが、1.5m以上はある。平面形はおそらく長方形になると考えられる。主軸は墳丘の振れに合わせて座標北から東に約15°振る。横断面の観察によって、中軸に黄褐色粘質土、その両側に黄褐色粘質土の堆積が確認できる。木棺の痕跡は確認できなかったが、この黄褐色粘質土が木棺内の堆積であった可能性が高い。

なお、溝3がさらに南につづくことから、方形周溝墓は周溝墓10の南にもつづいていたと推定できるが（周溝墓13）、後世の削平や溜池の影響で確認することはできなかった。

周溝墓11 調査区北端、周溝墓6の北側に位置する。周溝墓6の北辺周溝である溝2がL字状に屈曲していることから、この溝を南辺、および西辺の周溝とする方形周溝墓として復原したが、全体の規模は不明。主軸は座標北から東に約24°振る。墳丘のマウンドは削平され残っておらず、墳丘上には溝1や溝19が築かれている。主体部も確認できない。溝19が北辺周溝であったのかは明らかでない。

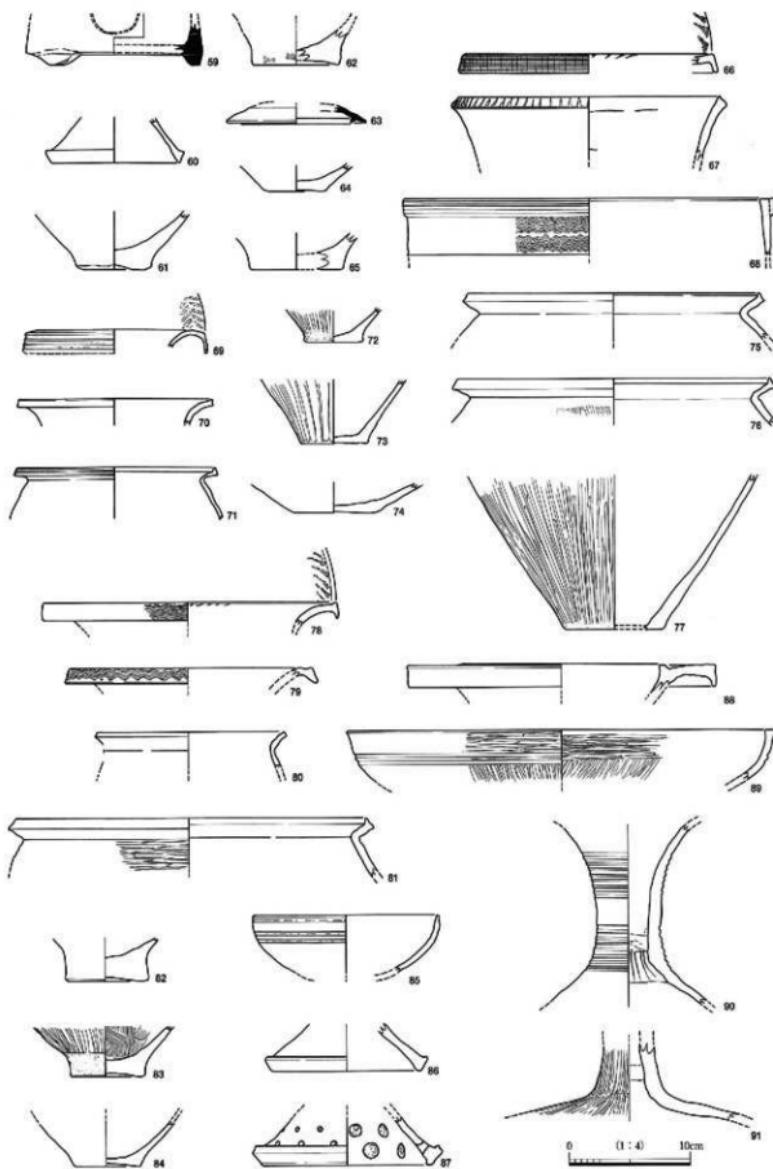
周溝墓12 調査区南半、周溝墓7の南側に位置する。周溝墓7の南辺周溝である溝15を北辺、溝18を西辺の周溝とする方形周溝墓として復原した。後世の削平・攪乱が著しく、墳丘の全体規模は明らかでないが、おそらく前記周溝墓7と同規模であったと思われる。主軸は座標北から東に約14°振る。溝18は幅約30cm、深さ約20cmを測る。埋土は炭を含むにいわゆる黄色粘質土である。マウンドは残っていないが、墳丘の南辺部にあたる位置から、主体部の可能性がある土坑を3基（土坑4・5・6）検出した。

3基は南北に並び、いずれも主軸を座標西から北に約10~21°振る。これは北辺の周溝である溝15の振れとほぼ共通する。北側の土坑4は幅約90cm、深さ12cmを測る。3基の中ではもっとも浅い。



第24図 3区検出土坑4~6平・断面図

調査区外へとづくため、全長は不明であるが、1.55mまでは確認できる。平面形は僅かに歪んだ長方形を呈し、埋土は下層が地山ブロック土を多く含む黄褐色シルト、上層が下層よりも地山ブロック土の混入が少ない黄褐色シルトである。主軸は座標西から北に約21° 振る。中央の土坑5は幅約1.3m、深さ34cmを測る。これも調査区外へとづくため、全長は不明であるが、1.24m以上はある。埋土は下層が地山ブロック土を多く含む黄褐色シルト、上層が下層よりも地山ブロック土の混入が少なく、炭を含む黄褐色シルトである。主軸は座標西から北に約10° 振る。南側の土坑6は幅約1.5m、深さ52cmを測る。3基の中ではもっとも深い。西端部は近年の攪乱により削られ、東端は調査区外へとづくため、全長は不明であるが、2.2m以上はある。平面形は長方形になると思われる。埋土は土坑4の上層と



第25図 3区出土遺物

(59. 1層、60~61. 3層、62. 地山直上、63. 建物4、64. 建物7、65~68. 構2、69~73. 構6、74~77. 構15、78~91. 構33)

同じである。主軸は座標西から北に約19° 振る。いずれからも、木棺の痕跡は確認できなかった。

以上の方形周溝墓は、全体に座標北から東に14°～25° の振れをもつ。これは遺跡が立地する丘陵の向きに合わせたものである。

なお、周溝墓6・7・11・12と周溝墓8・9・10との間には、この期の遺構を全くとどめない空白地が帯状に延びる。その幅は調査区北半の溝8と溝3との間では約3.5m、南半の溝3と溝18との間では約2.3mを測る。おそらく各周溝墓へと通じるメインの墓道であったと考えられる。

【遺物】（第25図）

1層からは主に陶磁器類が出土したが、その中に混じって15世紀以降のものと思われる瓦質の火鉢（59）が出土した。2層は非常に薄いこともあり、全く遺物は出土していない。3層は古代の遺物包含層であるが、その時期の遺物は出土しておらず、弥生時代中期後半の土器のみが出土した（60・61）。(60)は高壺脚部、(61)は壺底部である。建物4のピット14からは7世紀中葉の須恵器壺蓋（63）が出土したが、建物7のピット10からは弥生時代中期後半の壺底部片が出土している。方形周溝墓の周溝である溝2・6・15・33からは弥生時代中期後半の土器が多数出土した（65～91）。破碎しており、完形に復原できるものはない。（65～67・69・74・78・79・83・84）は壺、（70～73・75～77・80～82）は甕、（68）は鉢、（85）は鉢もしくは高壺、（86～91）は高壺である。生駒西麓産胎土のものは含まれていない。（73）は外面のヘラミガキ1単位の幅が約6mmと他の土器に比べやや太い。

4区

【遺構】(第26~32図)

2・3区の南側に位置する。宅地造成によって、調査区は西側の上段と東側の下段とに2分される。この造成に伴う削平や溜池・住宅解体に伴う擾乱が著しく、遺構の残りが悪い。地山上面で近世以降・16世紀後半・7世紀後葉から8世紀前葉・6世紀末から7世紀初頭・弥生時代中期後半の5時期の遺構を検出した。

近世以降の遺構

段と溝(溝46)をそれぞれ1条ずつ検出した。

段・溝46 調査区東端で検出した。耕作地の雑壟造成に伴う遺構であり、2区で検出した段と溝34の延長部にあたる。2区同様に溝は段の裾に設けられる。段の高低差は約35cmで、溝46の幅は段の肩から約50~80cm、深さは約10cmを測る。

16世紀後半の遺構(第27図)

火葬墓と考えられる土壙4基(墓壙5~8)を検出した。

墓壙5 調査区東端で検出した。調査区内ではもっとも標高が低い場所にあたる。平面形は長径90cm、短径52cmの楕円形を呈し、深さは34cmを測る。底面の北寄りには、16世紀後半の瓦質擂鉢が伏せた状態で埋設される。おそらく火葬骨の上に伏せられていたものと思われるが、炭や骨片は確認できなかった。

墓壙6 墓壙5の西側に並んで検出した。平面形は直径約60cmの円形を呈し、深さは47cmを測る。底面には墓壙5と同じく16世紀後半の瓦質擂鉢を伏せた状態で埋設する。炭や骨片は確認できなかった。

墓壙7 墓壙6の南側に並んで検出した。平面形は長径92cm、短径53cmの楕円形を呈する。深さは約50cmで、壁はやや抉りぎみである。擂鉢はない。炭や骨片も確認できなかった。

墓壙8 墓壙7の南西側に並んで検出した。平面形は直径約60cmの円形を呈し、深さは27cmを測る。擂鉢はない。炭や骨片も確認できなかった。

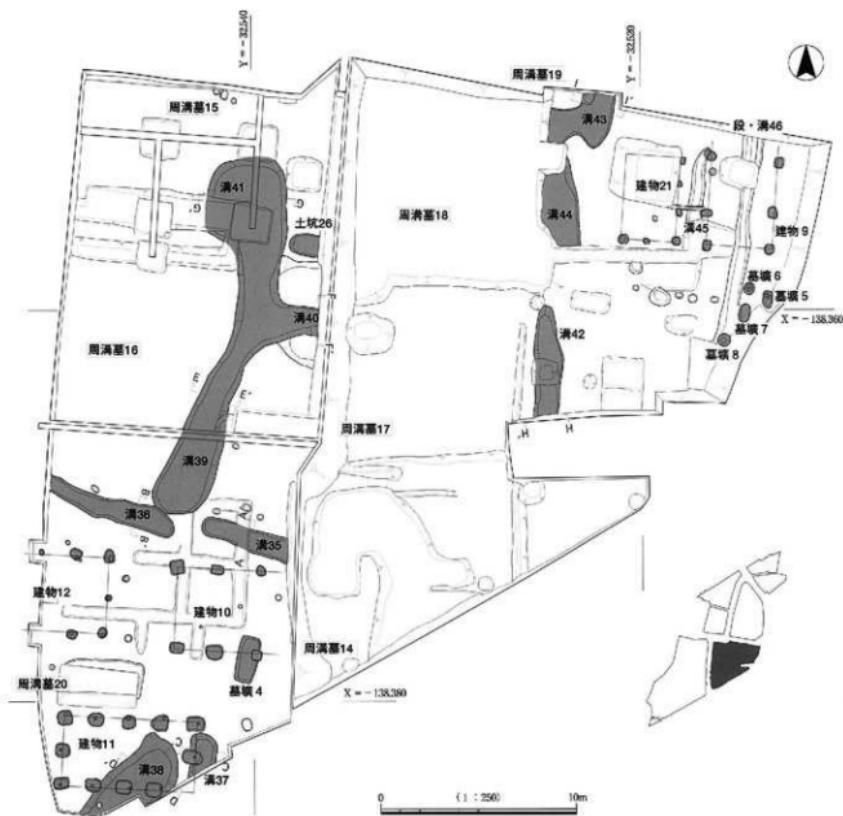
これら4基とともに、埋土は地山のブロック土を多く含むにぶい黄橙色粘質土で、一見現代の擾乱と見間違えるほど水分を含み、締まりがない。

7世紀後葉から8世紀前葉の遺構(第28~29図)

掘立柱建物跡5棟(建物9~12・21)のほか小ピットを多数検出した。

建物9 調査区の北東隅で検出した。建物の中央を上記の段と溝46が南北に通るため、妻柱は削られ検出できなかつたが、おそらく梁間3.4mを2等分するよう妻柱を立てる、梁間2間の南北棟と推定される。桁行は2間目の柱穴までを確認したが、さらに北側に延びると思われる。桁行の柱間は南から1間目は1.7mで、2間目は2.8mと広くなる。主軸は座標北から東に4°振る。柱掘方は隅丸長方形を呈する。ピット167からは7世紀中葉の須恵器が出土している。

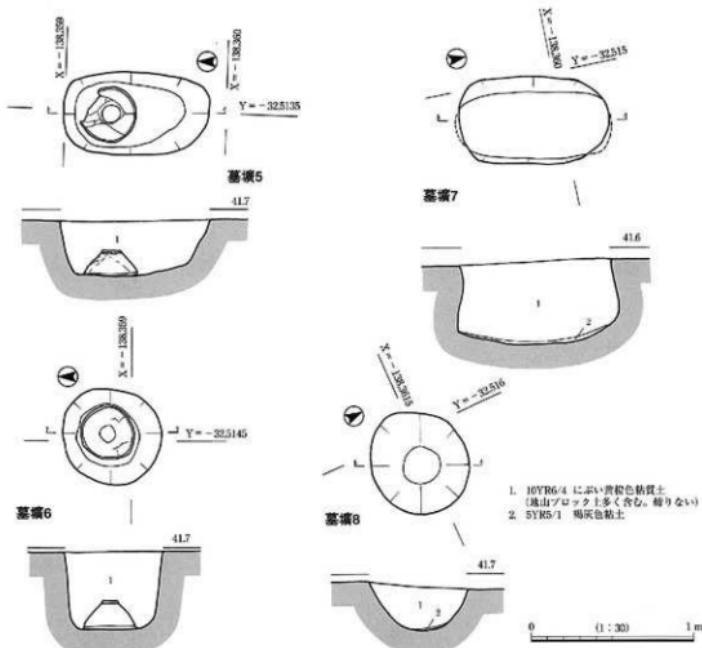
建物21 建物9の西側に1.6m隔てて検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟で、南側妻柱筋を建物9と揃える。主軸の振れも建物9と同じく座標北から東に4°振る。両者が同時期に存在していた可能性が高いが、軒の出を考えると、建物同士が接近しすぎかとも思われる。柱間は梁間が1.4m等間、桁行が1.45m等間である。柱掘方は隅丸方形や円形を呈する。



第26図 4区検出遺構全体図

なお建物 9 と 22との間で、幅約70cm、深さ約15cmの溝45を検出した。平面的にも断面観察でも建物 9 の柱穴を切っていることが明らかであった。両建物の雨落ち溝であろうか。

建物10 調査区上段の南半で検出した。梁間 2 間の東西棟と推定されるが、妻柱は住宅の基礎によって削られており検出できなかった。おそらく梁間4.2mを2等分するように妻柱が立てられていたものと思われる。桁行は 2 間目の柱穴までを確認したが、それより東側は宅地の段造成によって、完全に失われており、建物規模を推定することが難しい。以下に報告する近接の建物11が桁行 4 間、建物12は桁行 5 間であることから、当建物も桁行 4 間以上であったと思われる。柱間は推定される梁間の柱間と同じ2.1m等間である。座標北から東に 3° 振る。柱擇方は一辺70cm前後の隅丸の方形、あるいは長方



第27図 4区検出墓塚5~8平・断面図

形を呈する。ピット178からは7世紀後葉の須恵器が出土している。

建物11 建物10の南西、調査区の南端で検出した。建物10の南側柱筋からは3.7m隔てる。梁間2間、桁行4間の東西棟で、建物9と同じく座標北から東に3°振る。柱間は梁間が1.8m等間、桁行が1.7m等間である。柱掘方は長辺約80~90cm、短辺約70cmの大型の隅丸長方形を呈し、中央から外れた位置に明黄褐色シルトが混入する柱抜き取り痕跡が明瞭に検出できる。ピット150・152からは7世紀後葉と思われる上彫器や弥生土器が出土している。

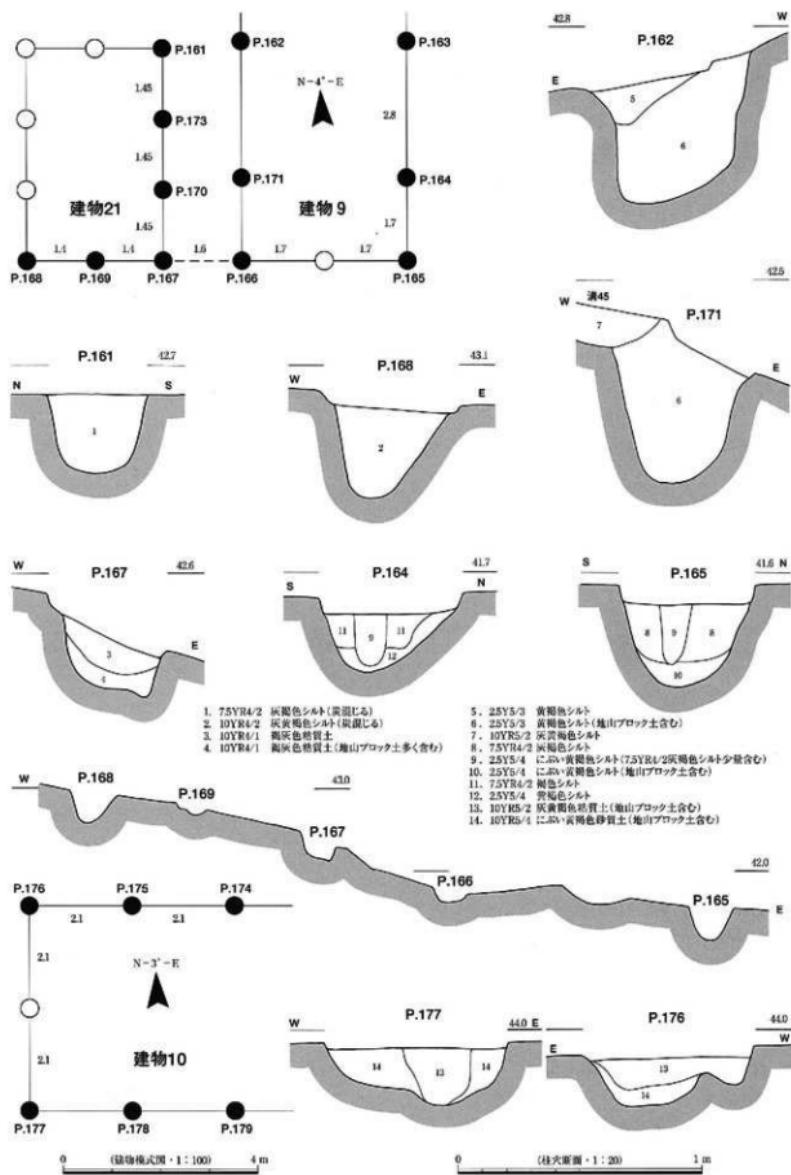
建物12 建物10の西侧で検出した。建物10の妻柱筋からは西に3.5m、建物11の北側柱筋からは北に4.2m隔てる。当調査区内では東半のみの検出であったが、5区の調査で西端を確認できた。これにより梁間2間、桁行5間の東西棟であることが判明した。ただし東から3間目の柱穴は両調査区外のため確認できていない。柱間は梁間が1.95m等間、桁行が1.8m等間で、建物10・11と同じく座標北から東に3°振る。柱掘方は隅丸長方形に近い梢円形や円形を呈する。

建物10~12は建物の振れを同じくし、整然と配置されている。おそらく3者は同時期に存在していたものと思われる。

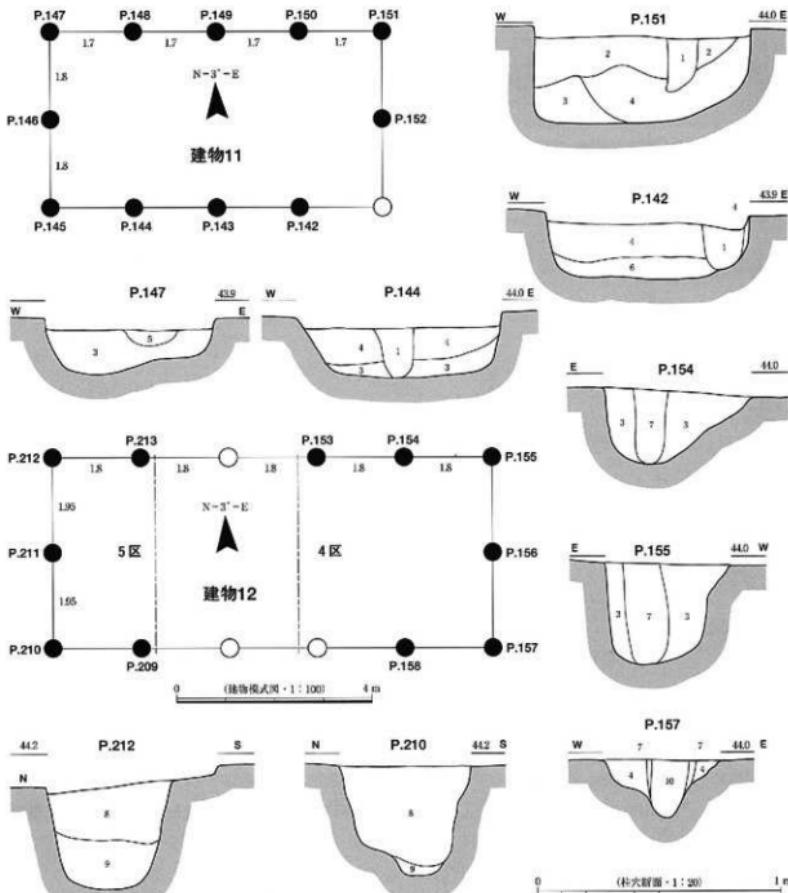
6世紀末から7世紀初頭の遺構（第30図）

墓塚1基（墓塚4）を検出した。

墓塚4 調査区上段の南半で検出した。建物10の柱穴（ピット179）と重複し、柱穴が墓塚4を切る。



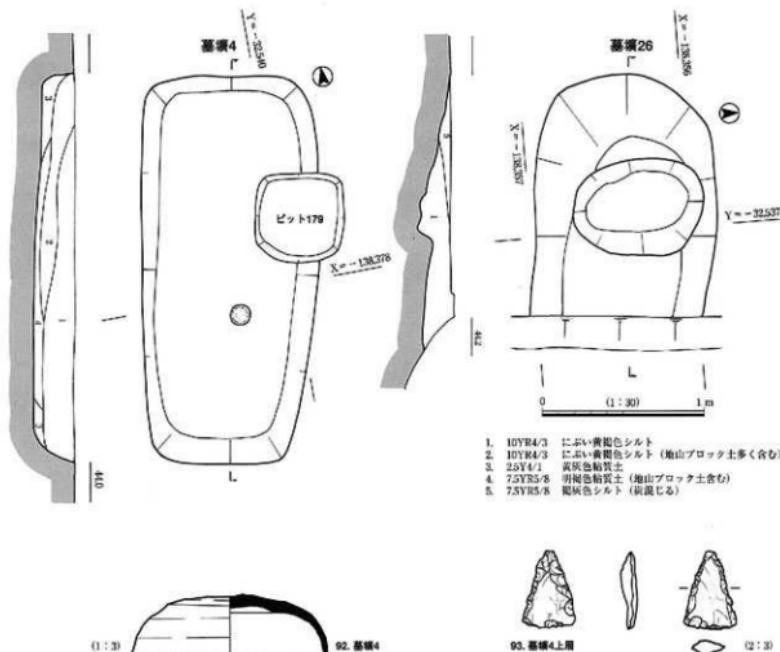
第28図 4区検出建物9・10・21平・断面図



1. 25Y5/6 明褐色色シルト
 2. 10YR5/1 海底色粘質土（地山プロック少含む）
 3. 10YR5/2 灰褐色粘質土（地山プロック土多く含む）
 4. 10YR5/4 にない黄褐色砂質土（地山プロック土多く含む）
 5. 10YR5/1 海底色粘質土（地山プロック土多く含む）
6. 5PB3/1 雜質灰褐色質土（地山プロック土少含む）
 7. 5PB4/1 雜質灰褐色質土（地山プロック土少含む）
 8. 25Y6/3 にない黄色色シルト
 9. 10YR5/1 雜質灰褐色質土
 10. 25Y8/4 にない橙色色シルト

第29図 4区検出建物11・12平・断面図

平面的に僅かずつ下げ、木棺痕跡を検出するよう努めたが、明確な木棺痕跡は確認できなかった。したがって土壙墓であったと考えているが、断面では最下層に約3 cmの厚さで明褐色粘質土の堆積が確認でき、これが木棺の痕跡であった可能性も捨てきれない。平面形は全長2.38m、幅1.08mの長方形を呈し、深さは約25cmを測る。主軸は座標北から東に約13°振る。底面から約3 cm—ちょうど上記明褐色粘質土層の厚み分—浮いた状態で、6世紀末から7世紀初頭に位置する完形の須恵器壺蓋が逆位で出土した。なお、上層の埋土には弥生時代中期の石鏃が混入していた。



第30図 4区検出基壙4・土坑26平・断面図及び出土遺物

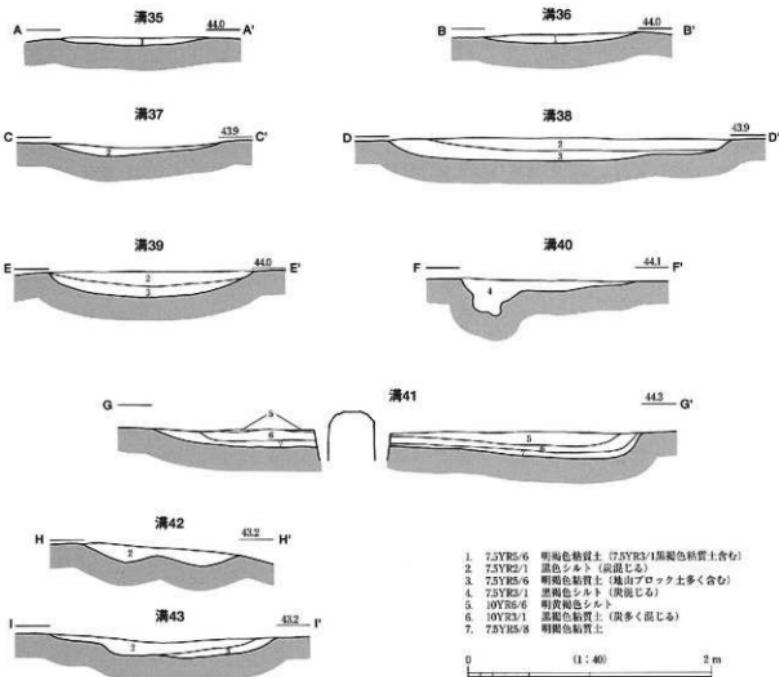
弥生時代中期後半の遺構（第30・31図）

方形周溝墓7基（周溝墓14～20）を検出した。

周溝墓14 調査区の南端、周溝墓17の南に位置する。溝35を北辺、溝37を西辺の周溝とする方形周溝墓である。溝35は北側に接する周溝墓17と共有する。幅約1.2m、深さ約7cmを測る。溝37は幅約1.4m、深さ約8cmで、埋土は炭を含む黒色シルトである。墳丘は後世の造成によって大部分が削られしており、規模は不明。主軸は座標北から東に約17°振る。マウンドや主体部は残っていない。

周溝墓15 調査区上段北端、周溝墓16の北側に位置する。溝41の北端部が僅かに西に屈曲していること、また3区で復原した周溝墓12との関係から、ここに1基の方形周溝墓を復原したが、周囲の周溝は検出できず、詳細は不明である。溝41は屈曲部付近では深さ32cmを測る。埋土は下層から明褐色粘質土、炭を多く含む黒褐色粘質土、明黃褐色シルトで、弥生土器を包含する。

周溝墓16 調査区の西壁際、周溝墓15の南側に位置する。溝39および溝41を東辺、溝36、および5区で検出した溝58を南辺、同じく5区検出の溝50を西辺の周溝とする方形周溝墓である。周溝墓15で報告したとおり、溝41の北端部が僅かに西に屈曲していることから、北辺についてもほぼ確定することができる。溝39は周溝墓17と、溝41は周溝墓18と、溝36は周溝墓20と、5区で検出した溝58は周溝墓23と、同じく溝50は周溝墓27と共有する。溝39は幅約1.2～2.3m、深さは南方が深く約23cmを測る。埋土は下層が地山ブロック土を多く含む明褐色粘質土、上層が炭を含む黒色シルトで、多くの



第31図 4区検出溝35～43断面図

弥生土器を包含する。溝36は幅約0.8～1.3m、深さ約8cmで、埋土は黒褐色粘質土を含む明褐色粘質土である。四方の周溝から、墳丘は東西・南北とも約14.5mの、当遺跡内では最大規模のものであったことが判明する。主軸は座標北から東に約26°振る。マウンドは削平されており、主体部は残っていない。

周溝墓17 周溝墓16の東側、調査区のほぼ中央に位置する。溝42を東辺、溝35を南辺、溝39を西辺、溝40を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝35は周溝墓14と、溝39は周溝墓16と、溝40は周溝墓18と共有する。溝42は幅約1.3m、深さ約14cmで、埋土は炭を含む黒色シルト、溝40は幅約1.4m、深さ約30cmで、埋土は炭を含む黒褐色シルトである。弥生土器を包含する。墳丘の東半分は宅地造成によって削られるが、四方の周溝から、墳丘は東西約15m、南北約10mの平面長方形を呈していたことが判明する。主軸は座標北から東に約13°振る。マウンドや主体部は残っていない。

周溝墓18 周溝墓17の北側に位置する。溝44を東辺、溝40を南辺、溝41を西辺、溝43を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝40は周溝墓17と、溝41は周溝墓16と、溝43は周溝墓19と共有する。溝44は深さ約5cmを測るが、東肩のみの検出であるため、幅は不明。宅地の雑壟造成や溜池によって、中心部が完全に削平されているが、これらの周溝から、墳丘は東西約12.5m、南北約9.5mであったことが判明する。主軸は座標北から東に約3°振る。なお、墳丘の西辺で土坑26を検出したが、これが

主体部の1つであったかは判断できない。

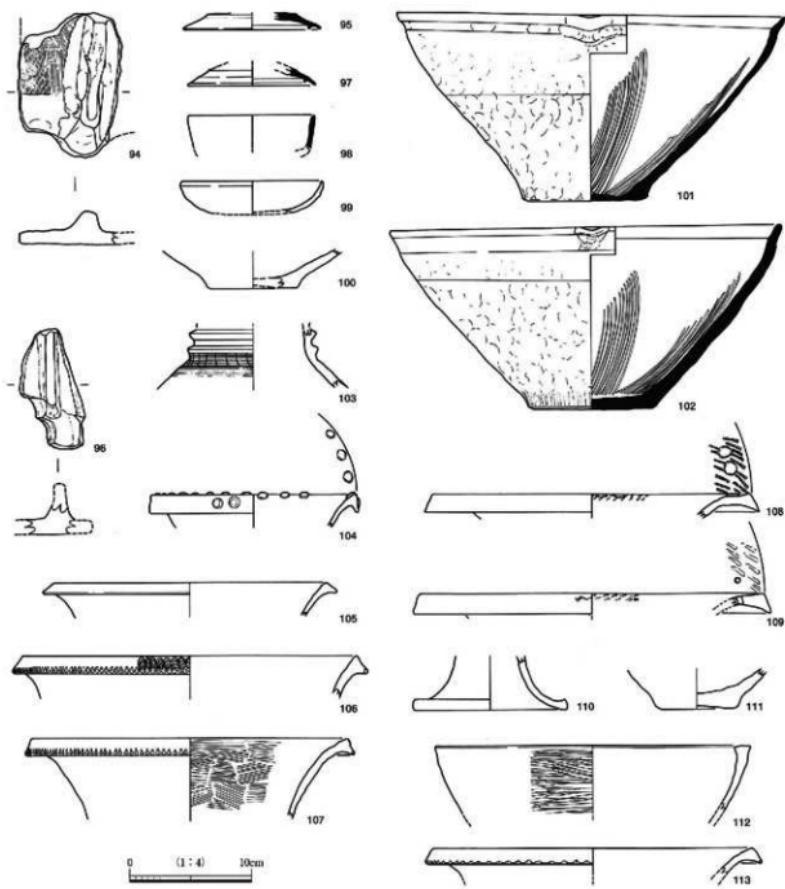
土坑の規模は幅約1.1m、深さ約20cmを測る。東端部を欠くため、全長は不明であるが、1.5m以上はある。平面形は楕円形に復原できる。壁面は緩やかな播鉢状で、西端には小口穴状の浅い窪みがある。埋土はにぶい黄褐色シルトで、上層に僅かに炭を含む褐灰色シルトがる。主軸は座標西から北に約8°振る。

周溝墓19 調査区下段北端、周溝墓18の北側に位置する。周溝墓18の北辺周溝である溝43の東端が北に向かってL字状に屈曲していることから、この溝を南辺、および東辺の周溝とする方形周溝墓として復原したが、溜池などにより周囲の周溝が検出できず、詳細は不明。溝43は屈曲部付近では幅約1.85m、深さ約14cmを測る。埋土は下層が地山ブロック土を多く含む明褐色粘質土、上層が炭を含む黒色シルトである。

周溝墓20 周溝墓16の南側に位置する。溝38を東辺、溝36を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝36は周溝墓16と共有する。溝38は幅約2.8m、深さ約20cmを測る。埋土は下層が地山ブロック土を多く含む明褐色粘質土、上層が炭を含む黒色シルトである。南辺の周溝は当調査区内では確認できなかつたが、5区でこれに相当すると考えられる溝52を検出していることから、墳丘の規模は南北約12.5mであつことが復原できる。西辺の周溝については、調査当初は5区検出の溝50と考えていたが、この場合、溝38との間は約20mとなり、南北幅の倍近い長さとなってしまう。おそらく4区と5区との間を通る道路下に、西辺の周溝が位置していたものと考えられる。すなわち墳丘の東西幅は9m前後であったと推定される。主軸は座標北から東に約25°振る。マウンドおよび主体部は削平されており、残っていない。

【遺物】（第30・32図）

2層からは時期を特定できる遺物は出土しなかつた。3層からは7世紀代のものと思われる土師器壺片（94）や7世紀中葉の須恵器壺蓋（95）が出土した。近世以降の遺構である溝46からも、7世紀代の土師器壺片（96）が出土している。建物9のピット167からは7世紀中葉の須恵器壺蓋（97）、建物10のピット178からは7世紀後葉のものと思われる須恵器壺片（98）、建物11のピット152、150からはそれぞれ7世紀後葉のものと思われる土師器椀（99）、弥生時代中期後半の壺（100）が出土した。墓壙5・6からは16世紀後半の瓦質の播鉢が出土した（102・101）。大和で生産されたものか。内溝ぎみに斜め上方に広がる体部で、口縁部は強いヨコナデによりさらに外側へと開く。体部は基本的に指オサエによって成形された後、上半のみ粗いヨコナデを施すが、（102）は下端部にタキの痕跡が僅かに認められる。それぞれ内面には11条を1単位とする播目を放射状に7単位施す。したがって内面見込みは七角形となる。（101）は口径31.4cm、器高15.2cmで、器壁は薄い部分で4mm程度である。口縁部内外面にはヨコナデによる稜線が明瞭に残る。やや焼成不良で、黄白色を呈する。（102）は口径31.8cm、器高14.8cmで、器壁は6～7mm程度である。口縁部内面にはヨコナデによる稜線が明瞭に残るが、外面はやや不明瞭となる。焼成は良好で、瓦器特有の色調を呈する。方形周溝墓の周溝である溝39・40・41からは弥生時代中期後半の土器片が出土した（103～113）。破碎しており、完形に復原できるものはない。（103～109・111・113）は壺、（110）は高壺、（112）は鉢である。（103）は頸部に断面三角形の凸帯を付し、そのすぐ下に横描腹状紋を施す。ただしそれ以下は磨滅しているため、簾状紋であったのか、直線紋であったのかは判断できない。（104）は口縁部内外面に円形浮紋を付す。（106・107）はほぼ同法量で、口



第32図 4区出土遺物

(94・95、3層、建物9、98。建物10、99・10、建物11、101。墓壙6、102。墓壙5、96。漆46、103~110。漆39、111~112。漆40、113。漆41)

縁部下端にキザミを施す点も共通するが、(106)は口縁部外面に波状紋も施す。(109)は口縁部のやや内側に直径4mmの孔を穿つが、ちょうどこの孔の箇所で割れており、孔が2孔一対であったのかは不明。なお(100・110)は生駒西麓產胎土である。墓壙4の底からは6世紀末から7世紀初頭に位置する完形の須恵器壺蓋(92)が、上層の埋土からは弥生時代中期の石錐(93)が出土した。(92)は口径11.8cm、器高3.8cmを測る。外面の後はほとんど退化しているが、指の感触では微かに確認できる。(93)は墓壙埋没過程で混入したものである。サヌカイト製の平基式石錐で、長さ2.4cm、基端幅1.6cmを測るが、先端を僅かに欠く。重さは1.3gである。側辺および基辺にのみ細部加工を施す。

5 区

【遺構】(第33~45図)

4区の西側に位置する。丘陵の頂部先端にあたり、調査区の南側と西側は急勾配な斜面となる。耕作地として利用されていたために、遺構の残りは比較的良好であった。地山上面で7世紀後葉から8世紀・弥生時代中期後半の2時期の遺構を検出した。

7世紀後葉から8世紀の遺構 (第34~37図)

獨立柱建物跡8棟 (建物12~19)、掘立柱跡1条 (塙4)、火葬に伴う焼土坑3基 (墓塙34~36) のほか小ピット (ピット264ほか) を多数検出した。

建物12 調査区の東端で検出した。4区からつづく梁間2間、桁行5間の東西棟で、当調査区内では西側妻柱筋から桁行1間目までを検出した。(詳細は4区にて報告)

建物13 建物12の西側に3.9m隔てて検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟で、主軸は建物10~12と同じく座標北から東に3°振る。これら4棟が同時期に存在していた可能性が高い。柱間は梁間、桁行共に1.7m等間であるが、西側柱筋の北から1間目の柱穴 (ピット202) のみ若干南東にずれる。柱掘方は長辺約70cmの隅丸長方形を呈する。ピット205からは7世紀中葉の須恵器が出土している。なお、一部の柱穴は方形周溝墓の周溝 (溝50) と切り合うが、確実に溝の埋土上面で検出できた。

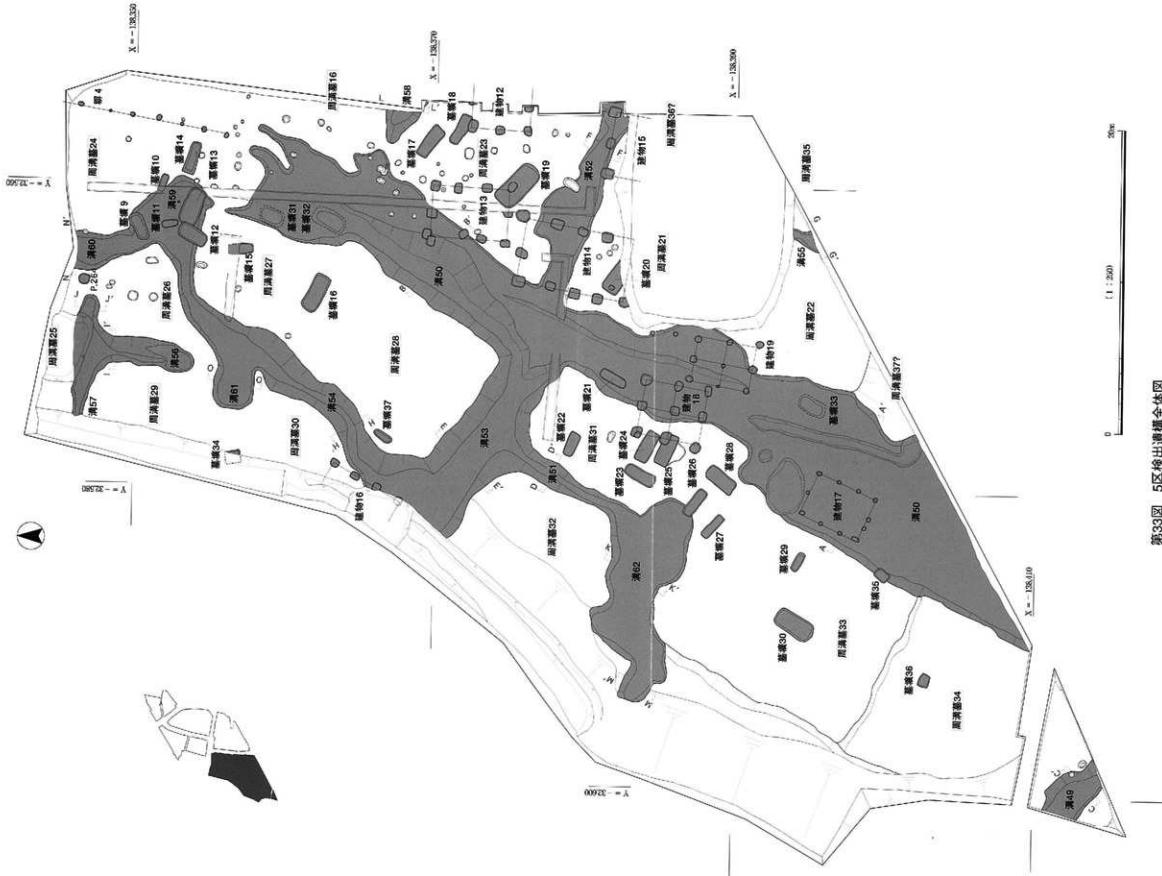
建物14 建物12の南側で検出した。梁間2間の南北棟で、桁行は北から4間分を検出した。南側の妻柱が溜池によって失われており、桁行の規模は不明であるが、おそらく検出した4間でおさまるものと思われる。柱間は梁間が2.1m等間、桁行が1.8m等間で、主軸は座標北から東に10°振る。柱掘方は建物13の柱掘方よりも一回り大きい長辺約80~90cmの隅丸長方形を呈する。一部の柱穴は方形周溝墓の周溝 (溝50・52) と切り合い、溝の埋土を切る。

建物15 建物14の東側で検出した。東西に一列に並ぶ柱穴3基のみの検出であり、全体規模は不明であるが、柱掘方が建物14と同規模の隅丸長方形であり、柱間も建物14の梁間と同じ2.1m等間であることから、おそらく3基の柱穴を北側の妻柱筋とする梁間2間の南北棟であったと推定される。建物の振れも建物14と同じく座標北から東に10°振る。3基とも方形周溝墓の周溝 (溝52) 墓土上面で検出できた。

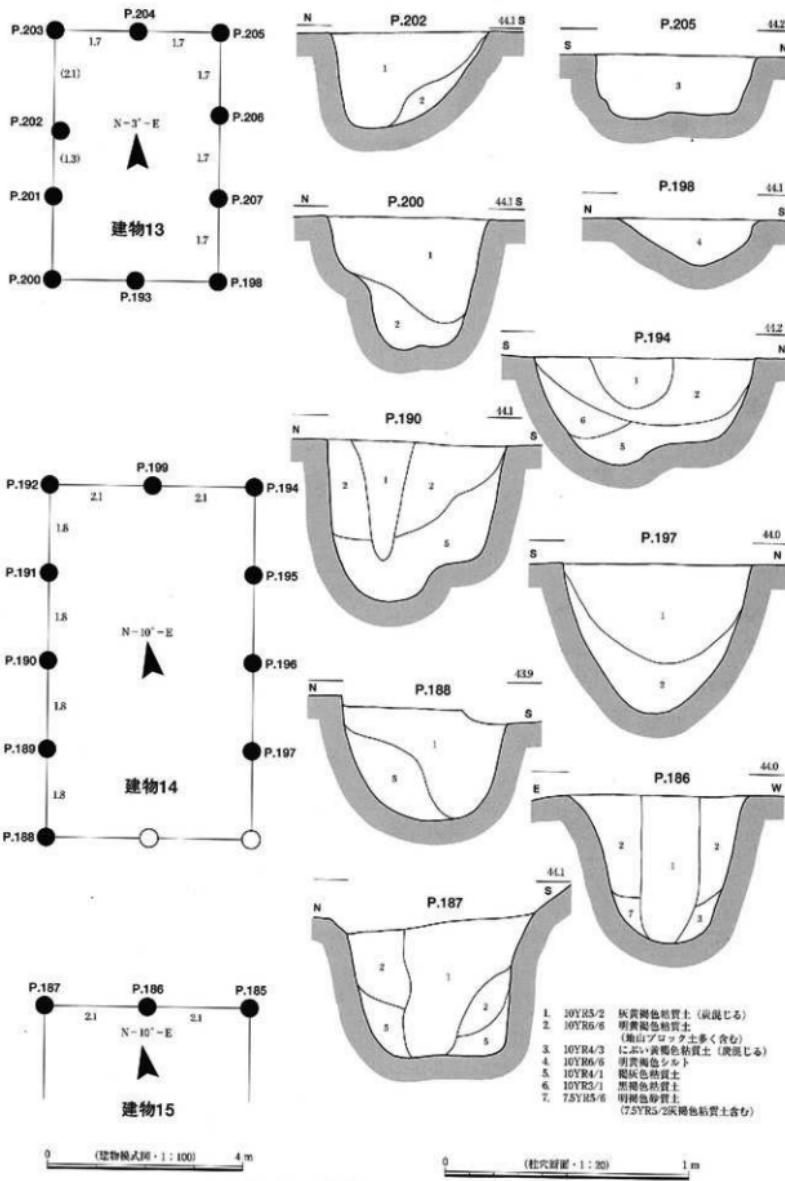
建物16 調査区の西端で検出した。桁行3間の南北棟と推定されるが、建物の西半は丘陵斜面に築かれた里道によって削られており、確認できない。桁行の柱間は1.7m等間で、主軸は座標北から東に30°振る。柱掘方は隅丸長方形を呈する。

建物17 調査区南半の溝50上面で検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟で、主軸は座標北から東に25°振る。柱間は梁間が1.5m等間、桁行が1.4m等間と、他の建物に比べやや小規模である。柱掘方は直徑30cm程度の円形、ないしは楕円形を呈する。なお南側の妻柱から西に60cm隔てた地点で、柱穴の埋土と同じ埋土のピット239を検出した。建物の構造上、不要なピットであるが、妻柱筋上に位置していること、また周辺で建物17に関わるピット以外を検出していないことなどから、建物17に伴うピットとして特記しておく。

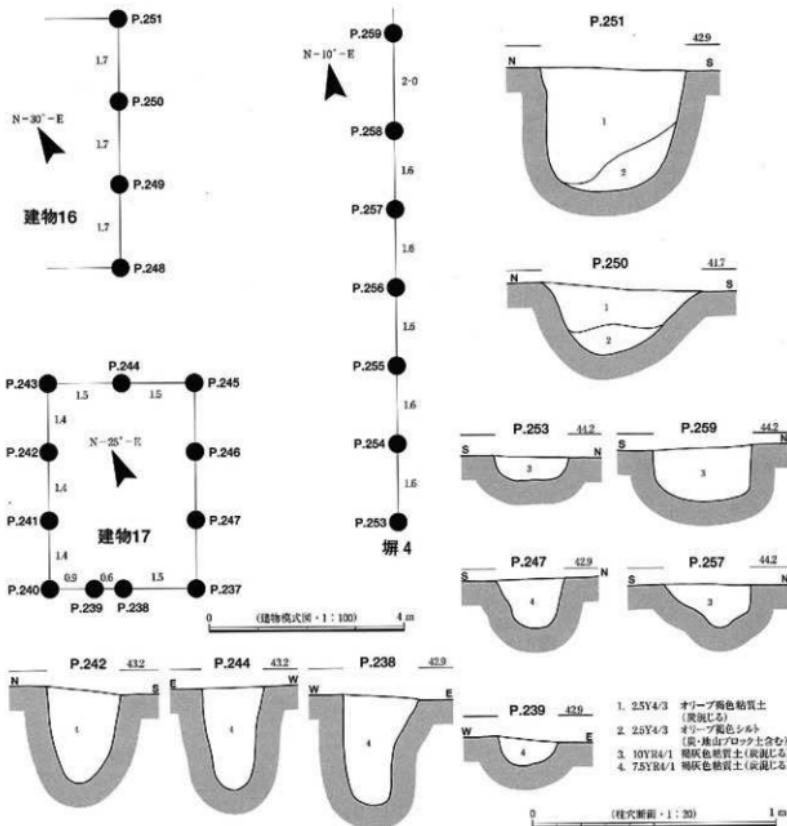
建物18 建物17の北側で検出した。2間×2間の純柱建物跡で、主軸は建物14と同じく座標北から東に10°振る。柱間は東西1.8m等間、南北2.1m等間で、柱掘方は隅丸の方形、あるいは長方形を呈する。北西隅のピット236は深さ1.06mと非常に深く、柱抜き取り穴も明瞭であった。ピット234からは7世



第33図 5区污水处理厂全体図



第34図 5区検出建物13~15平・断面図

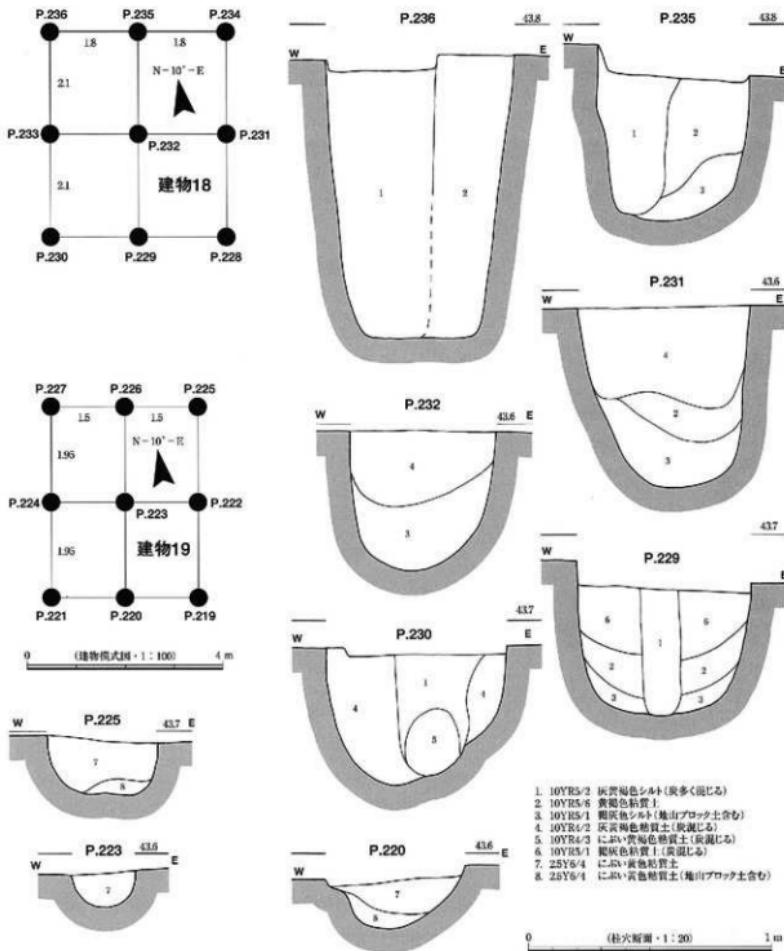


第35図 5区検出建物16・17・塚4平・断面図

紀中葉から後葉にかけての土師器・須恵器と共に円面鏡が出土している。建物の東半は方形周溝墓の周溝（溝50）と切り合うが、柱穴は確実に溝の埋土上面で検出できた。

建物19 建物18東側の溝50上面で検出した。建物18と同じく2間×2間の総柱建物跡であるが、柱間は東西1.5m等間、南北1.95m等間とやや小規模となる。建物14と同じく座標北から東に10°振るが、建物18の東側柱筋と建物19の西側柱筋との間隔が60cmと非常に狭く、軒の出を考えると、両者が同時期に存在していたとは考え難い。柱掘方も建物18とは異なり、直径20~50cmの円形を呈する。

なお、建物13~15・17~19は、後述する方形周溝墓の周溝である溝50・52と切り合うが、柱穴はどれも溝の埋土上面から検出できた。溝50の断面観察の結果、溝の最上層には7世紀中葉から後葉を主に、僅かに8世紀前半の遺物を含む明黄褐色粘質土が堆積しており、溝はこの時期の整地によって埋められていたことが明らかとなっている。したがってその溝を切る状態で検出した6棟の建物跡は、7世紀前

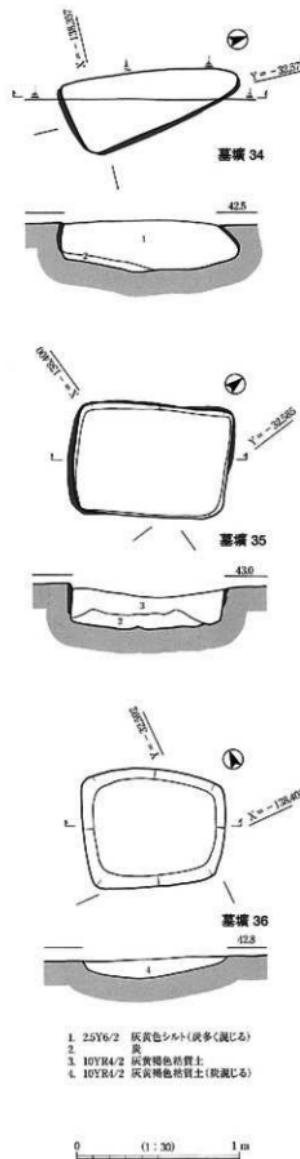


第36図 5区検出建物18・19平・断面図

葉には透らない造構であることが確実といえる。これについては第4章で詳述する。

図4 調査区の北東隅で検出した。柱間6間の南北屏であるが、さらに調査区の北側に延びることが予想される。柱間はもっとも北側の1間のみが2.0mであるが、その他は1.6m等間である。建物14・15・18・19と同じく座標北から東に10° 振る。柱掘方は直径20~40cm程度の小規模な円形を呈し、非常に浅い。この造構周辺が5区の中ではもっとも標高が高く、後世に造構面がかなり削平されたことがうかがえる。

ピット264 調査区の北端で検出した。平面形は一辺約70cmの隅丸方形を呈し、深さは45cmを測る。



第37図 5区検出墓塚34~36平・断面図

7世紀中葉の須恵器壙蓋片が出土した。

墓塚34 調査区の北半西端で検出した。遺構の大半が調査区西側の里道によって削られるため、全体の規模は不明であるが、僅かに残る壁面によって、一辺が1.02mであったことが確認できる。後述する墓塚35・36の規模から、平面形はこの一辺を長軸とする隅丸長方形になると推定できる。深さは30cmで、最下層には炭が約5cm堆積する。蓋面は被熱によって赤褐色に変質するが、底面は焼けていない。最上層から弥生時代中期後半の壙片が出土したが、明らかに混入品である。

墓塚35 調査区南半の建物17の南西で検出した。平面形は長辺96cm、短辺69cmの均整のとれた隅丸長方形を呈し、深さは27cmを測る。埋上の最下層には炭が約10cm堆積する。四方の壁面は被熱によって赤褐色に変質するが、底面は焼けていない。

墓塚36 墓塚35の西側、周溝墓34上で検出した。遺構の上部は削平され遺存しない。平面形は長辺87cm、短辺72cmの隅丸長方形を呈し、深さは11cmを測る。ほぼ底面のみの検出であったため、蓋面の被熱の状況は確認できない。底面は被熱による変質は認められない。埋土は炭を含む灰黄褐色粘質土である。

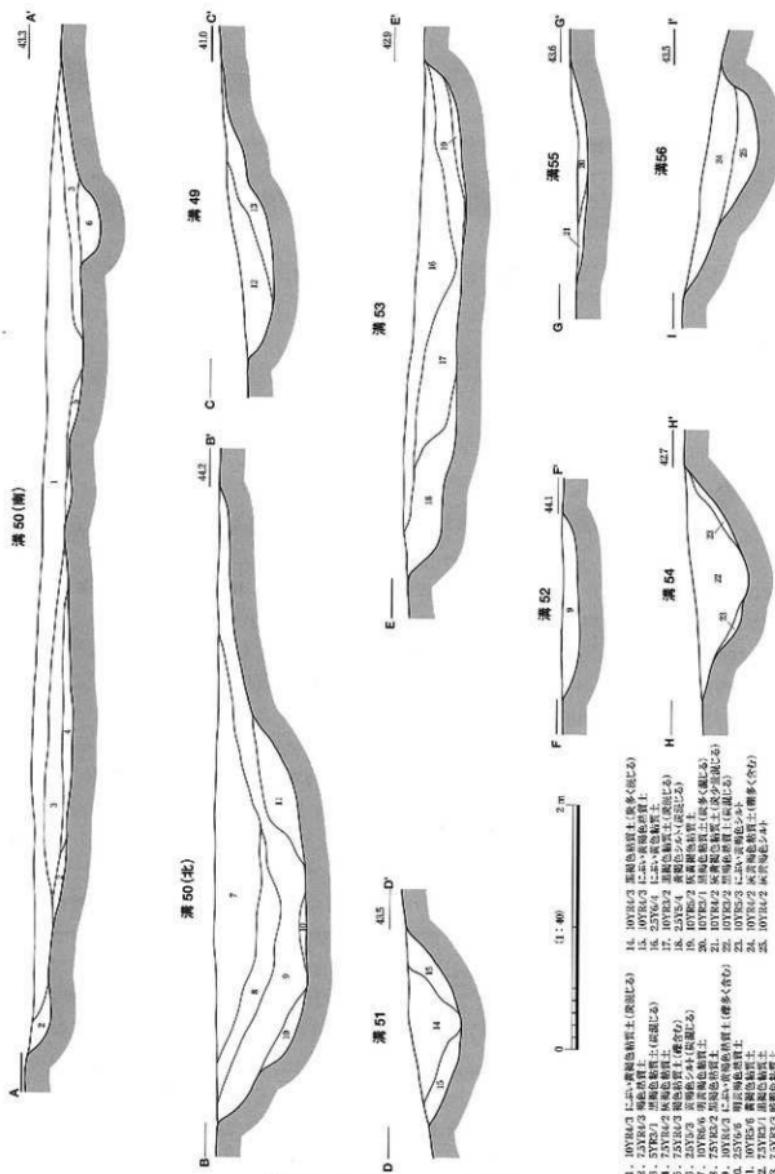
これら3基の焼土坑は、遺体を荼毘に付した火葬施設と考えられるが、これについては第4章に記す。

弥生時代中期後半の遺構（第38~45図）

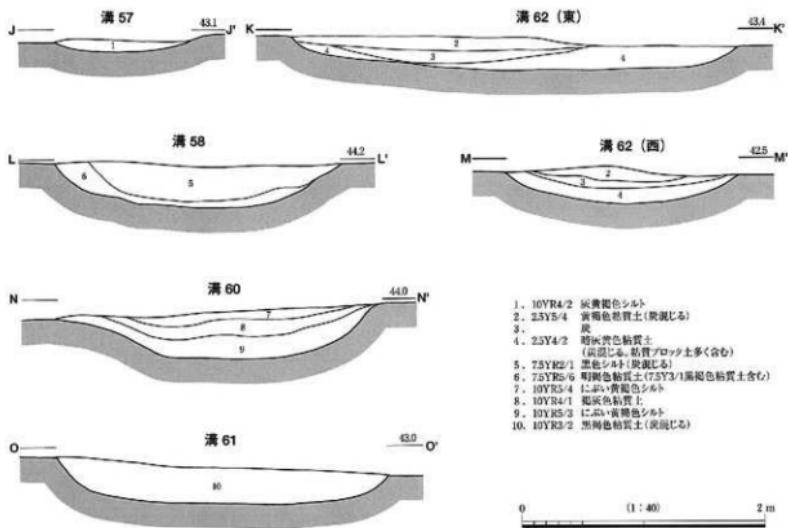
方形周溝墓16基（周溝墓16・21~35）と、それらに伴う主体部を多数検出した。

周溝墓16 調査区北半の東壁際に位置する。4区に跨る方形周溝墓で、詳細は4区の項で報告したとおりである。当調査区内では南辺周溝の一部である溝58（4区側は溝36）と、西辺周溝である溝50を検出している。墳丘の北西隅付近は丘陵の頂部にあたるため、後世の削平が著しく、周溝の痕跡は全く残っていない。なお南辺周溝の一部である溝58は、4区側の溝36よりも残りがよく、幅約2.35m、深さ約35cmの規模となる。埋土は下層が黒褐色粘質土を含む明褐色粘質土、上層が炭を含む黒色シルトである。溝50は幅約6mを測るが、大部分が削平され、残りが悪い。

周溝墓23 周溝墓16の南側に位置する。溝52を南辺、周溝墓16個からつづく溝50を西辺、溝58を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝52は周溝墓21と、溝50は周溝墓28と、



第38図 5区検出溝49～56断面図



第39図 5区検出溝57・58・60~62断面図

溝58は周溝墓16と共有する。溝52は幅約1.5mを測り、深さは約15cmと、比較的の残りが悪い。埋土は礫を多く含むにぶい黄褐色粘質土である。溝50は当周溝墓の西側付近がもっとも残りがよく、幅約5m、深さ約75cmを測る。埋土は最下層に黄褐色粘質土や明黄褐色粘質土があり、礫を多く含むにぶい黄褐色粘質土、黒褐色粘質土とつづく。最上層には7世紀中葉から後葉を主に、僅かに8世紀前葉の遺物を含む明黄褐色粘質土が堆積する。これは周溝がこの時期の整地によって埋められていたことを示すものである。なお、東辺の周溝は検出できていないが、4区の周溝墓20で報告したとおり、その位置は、調査区東側の道路下にあったと推定でき、これによって墳丘規模は、東西約9m、南北約10.5mであったことが復原できる。これは溝50を挟んで西側に接する周溝墓28と同規模である。主軸は座標北から東に約32°振る。マウンドは残っていないが、主体部を3基（墓壙17~19）検出した。

墓壙17 墳丘の北西隅で検出した。平面形は全長2.35m、幅約80~95cmの長方形を呈し、深さは15cmを測る。主軸は溝52・58に並行するように、座標西から北に約37°振る。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内の埋土は明黄褐色粘質土、あるいは暗青灰色粘質土で、木棺内には黄褐色粘質土が堆積する。木棺痕跡は暗青灰色粘質土である。木棺の規模は、長さ1.95m、幅55cmで、側板は底から約7cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約14cm、底板の厚みは約9cmであるが、側板に関しては周りの土が変質しており、その変質部分まで含めた計測値である。本来は7cm程度の厚みであったと思われる。平面および横断面の観察を行ったが、側板や小口板が底板の上に載るのかなど、木棺の構造は明らかにできなかった。

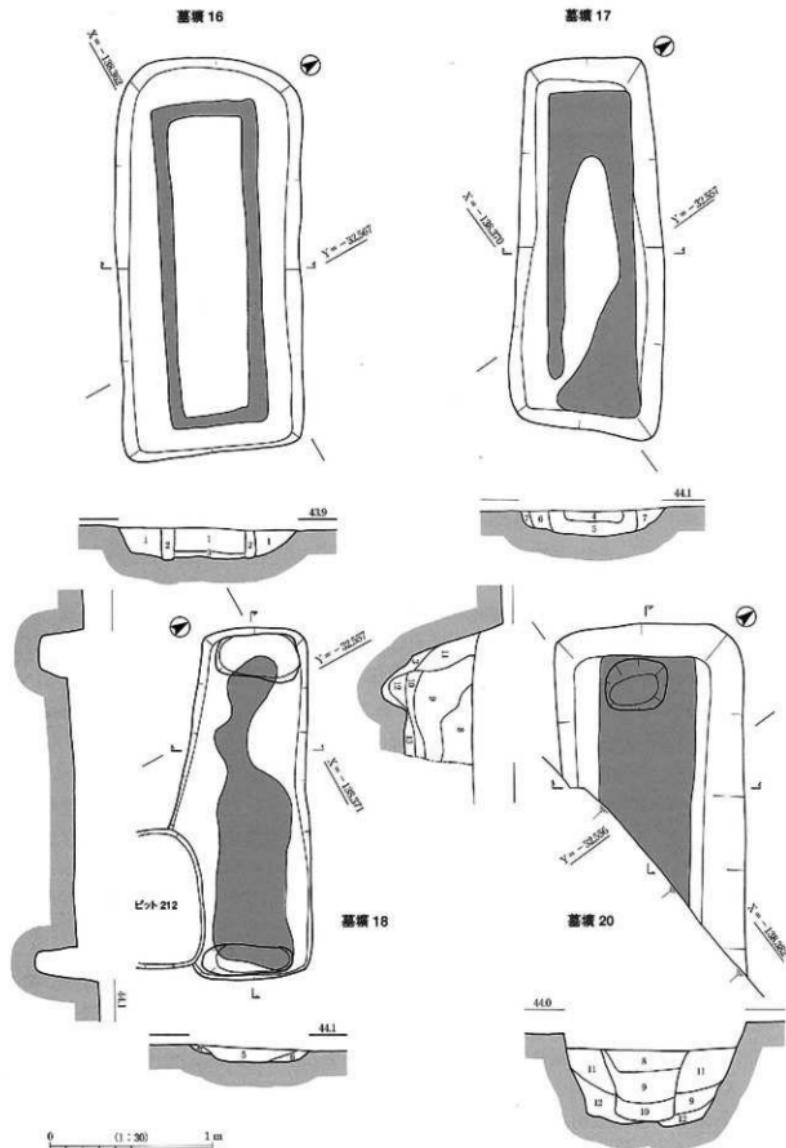
墓壙18 墓壙17のすぐ南側で検出した。南辺の一部が建物12のピット212に切られる。平面形は全長2.15m、幅約70cmの長方形を呈する。南辺はやや台形状に広がるが、これはピット212の影響と思われる。深さは8cmを測り、主軸は座標西から北に約30°振る。墓壙検出段階から、木棺底板の痕跡が

確認できた。残りは悪いが、底板は、長さ1.95m、幅50cmに復原できる。墓壙の埋土は明黄褐色粘質土で、底板の痕跡は暗青灰色粘質土である。この痕跡を除去した段階で、墓壙の両端で小口穴を検出した。埋土は底板痕跡と同じ暗青灰色粘質土である。東端の小口穴は長さ56cm、幅18cm、深さ25cm、西端の小口穴は長さ50cm、幅約25~30cm、深さ約17cmを測る。両者の長さは上面で検出した底板の幅とはほぼ同じであることから、木棺は小口板が底板よりも外側で、底板よりも下に延びる構造（第51図一三）であったことが判明する。

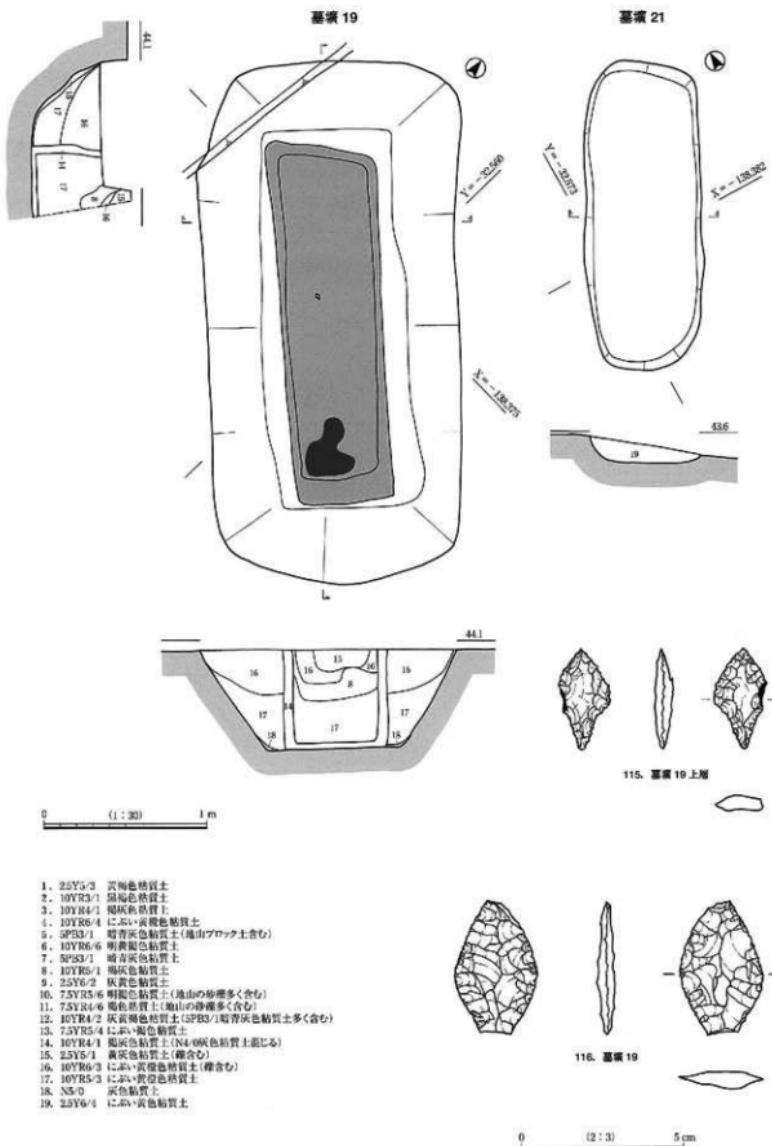
墓壙19 墳丘の南寄りで検出した。平面形は全長3.23m、幅1.53mの隅丸長方形を呈する。深さは約60cmを測る。壁面は垂直でなく、斜めに掘られているため、墓壙の下端は長さ2.3m、幅0.9mとなる。当遺跡で検出した墓壙の中では最大規模で、また残りも良好である。主軸は墓壙17・18とほぼ同じく、座標西から北に約43°振る。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内の埋土は、最下層に灰色粘質土、その上にぶい黄橙色粘質土、礫を含むにぶい黄橙色粘質土で、木棺内には下層から、にぶい黄橙色粘質土、褐灰色粘質土、礫を含むにぶい黄橙色粘質土、礫を含む灰黄色粘質土の4層が堆積する。木棺痕跡は灰色粘質土が混じる褐灰色粘質土である。木棺の規模は、長さ約2.2m、幅約60cmで、側板は底から約57cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約5cm、底板の厚みは約3cmである。平面および横・縦断面の観察を行ったが、側板や小口板が底板の上に載るのかなど、木棺の構造は明らかにできなかった。木棺痕跡を平均的に徐々に下げていくと、底板も明瞭に検出できた。その上面で弥生時代中期の石鐵が1点出土している。木棺中央部やや南寄りに位置し、先端を中軸側に向ける。原位置を保っているが、副葬品であったのか、遺体に刺されたものであるのかは判断できない。底板痕跡に張り付いた状態であったことから、前者の可能性が高い。また底板上面の東端で朱を検出した。水銀朱である。33×31cmという狭い範囲内にだけ塗られていたようである。おそらくこちら側に頭部を向け埋葬していたと考えられる。なお、上層の掘削段階でも弥生時代中期の石鐵が1点出土しているが、これは木棺の埋没過程で混入したものであり、副葬されたものではない。

周溝墓21 調査区の南東部、周溝墓23の南側に位置する。周溝墓16・23側からつづく溝50を西辺、溝52を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝52は周溝墓23と、溝50は周溝墓31と共有する。溝50は深さ約35cmと、周溝墓23付近よりも浅くなる。東辺と南辺の周溝は溜池によって削られており、確認できないが、溝50が溝52から南に約8m付近で東に広がっていることから、このあたりに南辺周溝があったであろうことがうかがえる。また、上記周溝墓23の東辺周溝が、調査区東側の道路下に推定され、その溝とつながると考えられる溝55が溜池の南側に存在することから、東辺の周溝もほぼその位置を推定することができる。すなわち、墳丘の規模は東西約9m、南北約8mであったと復原できる。なおこの場合、周溝墓23と20の関係のように、当周溝墓の東側にもさらに1基、溝38を東辺の周溝とする方形周溝墓（周溝墓36）が存在していたことになる。周溝墓21のマウンドは削平され残っていないが、復原される墳丘のほぼ中央から主体部（墓壙20）を1基検出した。

墓壙の規模は幅約1.5m、深さ約60cmを測る。南半が溜池によって削られているため、全長は不明であるが、2.2m以上はある。平面形は長方形で、主軸は溝52の振れにほぼ合わせ、座標西から北に約34°振る。木棺自体の痕跡は確認できなかったが、木棺内の埋土と墓壙掘方の埋土との境は、平面および断面で明瞭に検出できた。掘方には下層から、暗青灰色粘質土を多く含む灰黃褐色粘質土、灰黃色粘質土、地山の砂礫を多く含む褐色粘質土が、木棺内には下層から、地山の砂礫を多く含む明褐色粘質土、灰黃色粘質土、褐灰色粘質土が堆積する。なお、墓壙西壁際で小口穴を検出している。長辺38cm、短辺



第40図 5区検出墓壙16~18・20平・断面図



第41図 5区検出墓標19~21平・断面図及び出土遺物

32cmの隅丸長方形を呈し、深さは14cmを測る。これにより、木棺は小口板が逆凸形で、底板よりも下に延びる構造（第51図-II）であったことが推定できる。

周溝墓22 周溝墓21の南側に位置する。周溝墓21と同じく、周溝墓16・20側からつづく溝50を西辺、溝55を東辺の周溝とする方形周溝墓である。溝55は幅約0.7~1.8m、深さ約8cmを測る。埋土には下層から、炭を少量含む灰黄褐色粘質土、炭を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。北辺周溝は溜池によって削られているが、上記のとおり、溝52から南に約8mの地点に溝の北肩があったと推定できる。南辺の周溝も確認できなかったが、こちらは調査区南壁際で南に向かう斜面を検出していることから、ほぼこの位置が墳丘の南辺であったと特定できる。これによって墳丘は、東西約8m、南北約10.5mの規模であったと復原できる。主軸は周溝墓21と共に座標北から東に約16°振る。ただし後世の削平により、マウンドも主体部も残っていない。

なお、周辺の周溝墓の配置から、当周溝墓の南側にもさらに方形周溝墓（周溝墓37）がつづいていたことが容易に推測できる。

周溝墓35 調査区南東隅、周溝墓22の東側に位置する。周溝墓22の東辺周溝である溝55を西辺の周溝とする方形周溝墓として復原したが、一部分の検出であり、詳細は明らかでない。

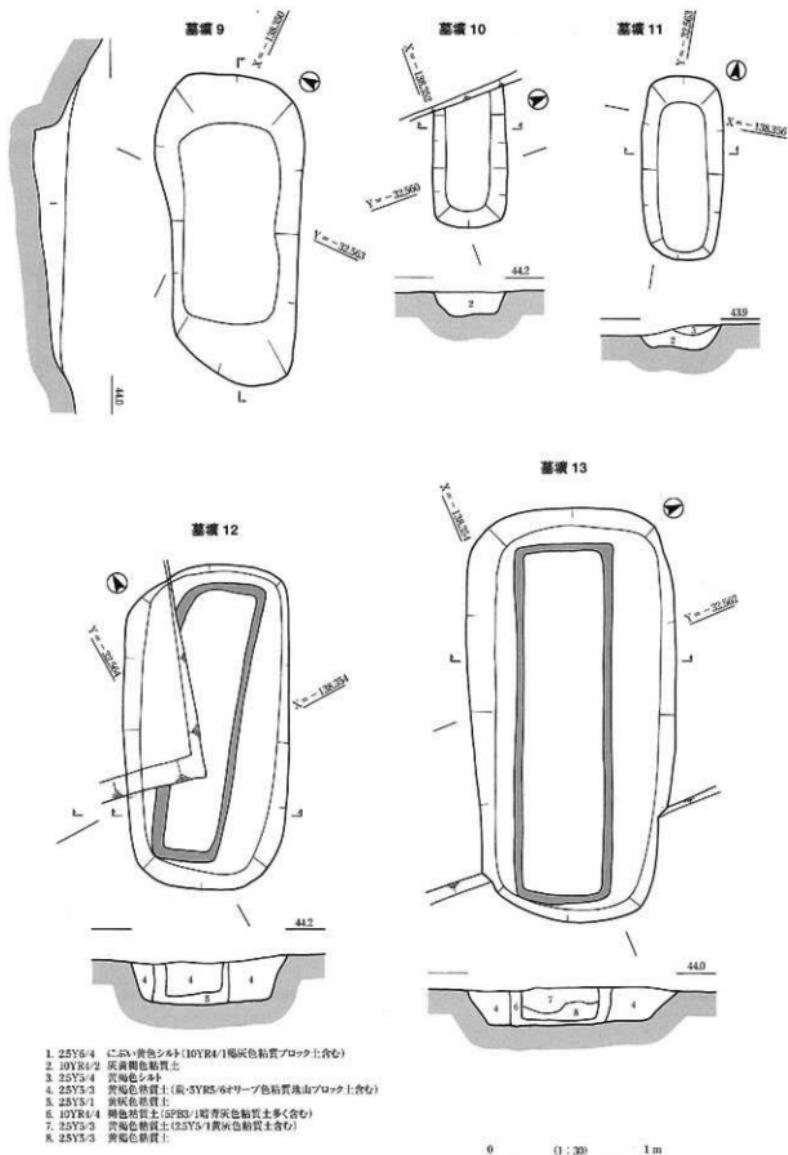
周溝墓24 調査区の北東隅に位置する。丘陵の頂部にあたるため、後世の削平が著しく、周溝の残りが非常に悪いが、溝59を南辺、溝60を西辺の周溝とする方形周溝墓であったと復原できる。溝59の幅はもっとも広い箇所で約5m、深さは約30cmを測るが、東への延長部が削平されている。このため、墳丘の規模は明らかにできない。埋土は後述する溝60と基本的に同じで、弥生土器を包含する。溝60は周溝墓25・26と共有する周溝で、幅約1.7~2.5m、深さはもっとも深い箇所で38cmを測る。埋土は下層と上層がにぶい黄褐色シルト、中層が褐灰色粘質土で、弥生土器を包含する。これらの周溝の向きから、墳丘の主軸は座標北から東に約19°程度振っていたことが復原できる。マウンドは完全に失われ、墳丘内の主体部も残っていないが、溝59内やその延長部から周溝内埋葬を示す墓壙を6基（墓壙9~14）検出した。全てが当周溝墓に伴うものではないが、以下にまとめて報告する。

墓壙9 周溝59と60との合流箇所で検出した。溝に並行する向きではなく、直交する向きに築かれている。平面形は全長1.9m、最大幅約90cmのやや歪んだ梢円形を呈する。ただし本来は長方形であったと思われる。深さは約20cmで、埋土は褐灰色粘質ブロック土を含むにぶい黄色シルトである。壁面は緩やかな擂鉢状である。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は座標北から東に約61°振っており、周溝墓24の墳丘の振れとは異なるものである。後述する周溝墓26に伴うものか。

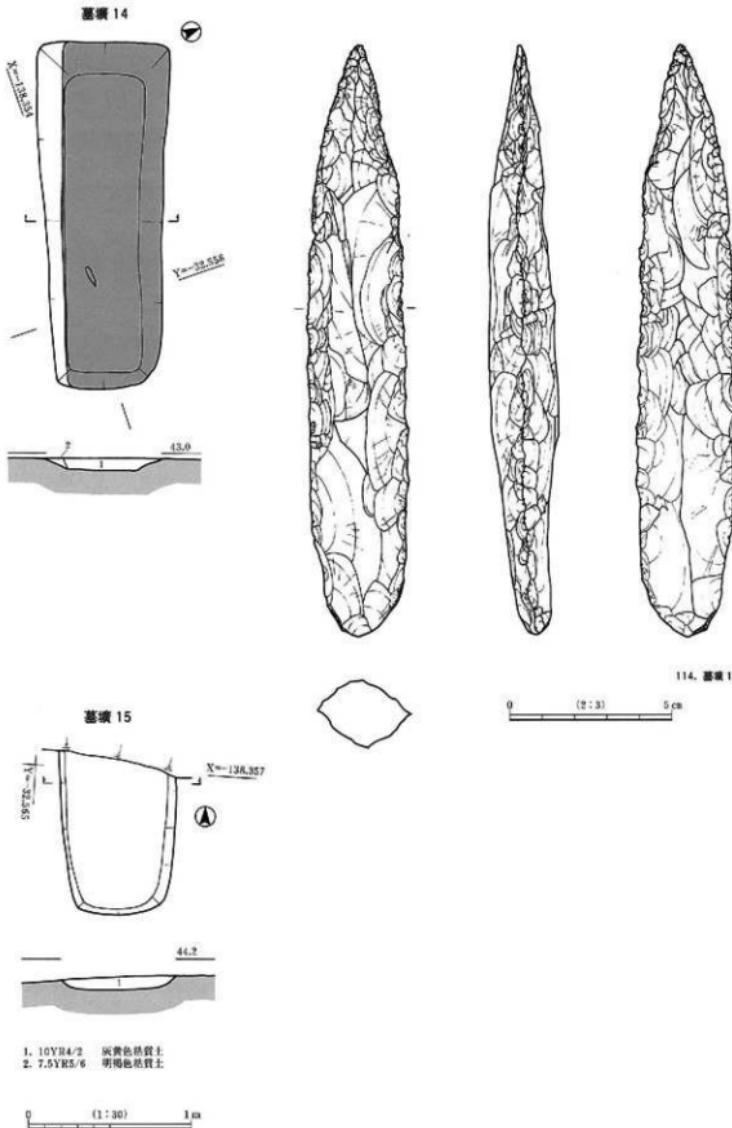
墓壙10 墓壙9の東側、周溝墓24の墳丘肩に近い箇所で検出した。規模は幅46cm、深さ15cmを測る。西端部が削られており、全長は不明であるが、86cm以上はある。比較的小規模な墓壙である。平面形は長方形に復原でき、埋土は灰黄褐色粘質土である。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は周溝墓24の墳丘の振れとはほぼ同じで、座標西から北に約21°振る。周溝墓24に伴うものと考えられる。

墓壙11 墓壙9のすぐ南側、溝59のはば中心で検出した。平面形は全長1.12m、幅51cmの梢円形に近い隅丸長方形を呈する。深さは15cmで、埋土は下層から灰黄褐色粘質土、黄褐色シルトである。墓壙10と同じく小規模な墓壙である。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は周溝墓26の墳丘の振れとはほぼ同じで、座標北から西に約9°振る。墓壙9と同じく、周溝墓26に伴うものと考えられる。

墓壙12 墓壙11の南側、周溝墓27の墳丘肩部で検出した。平面形は全長2.0m、幅1.0mの、梢円形に近い隅丸の長方形を呈する。深さは25cmを測る。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。



第42図 5区検出墓塚9~13平・断面図



第43図 5区検出墓塚14・15平・断面図及び出土遺物

墓壙掘方内、および木棺内の埋土は地山ブロック土や炭を含む黄褐色粘質土で、木棺痕跡は黄灰色粘質土である。木棺の規模は、長さ1.72m、幅46cmで、側板は底から約20cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約8cm、底板の厚みは約7cmである。平面および横断面の観察を行ったが、側板や小口板が底板の上に載るのかなど、木棺の構造は明らかにできなかった。墓壙の主軸は、南側の周溝墓27の振れとほぼ同じく、座標北から東に約30°振る。周溝墓27に伴う墓壙であろうか。

墓壙13 墓壙12の東側で検出した。西端の一部が墓壙12と重複し、墓壙12に切られる。平面形は全長2.55m、幅1.3mの隅丸長方形を呈する。深さは約23cmを測る。主軸は溝59に並行するように、座標西から北に約25°振る。墓壙12とは直交する向きである。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内の埋土は、地山ブロック土や炭を含む黄褐色粘質土で、木棺内には下層から黄褐色粘質土、黄灰色粘質土を含む黄褐色粘質土の2層が堆積する。木棺痕跡は暗青灰色粘質土を多く含む褐色粘質土である。木棺の規模は、長さ2.22m、幅60cmで、側板は底から約20cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約8cm、底板の厚みは約3cmである。平面形は整った長方形である。平面および横断面の観察を行ったが、側板や小口板が底板の上に載るのかなど、木棺の構造は明らかにできなかった。周溝墓27に伴う墓壙であろうか。

墓壙14 溝59延長部の、ちょうど溝50と合流していたと考えられる箇所で検出した。溝59は削平されているため、溝内からの検出ではないが、本来は溝内にあったことは間違いない。周溝墓24に伴う墓壙であろうか。平面形は全長2.1m、幅70~83cmの長方形を呈し、深さは7cmと非常に浅い。主軸は溝59に並行するように、座標西から北に約19°振る。墓壙10・13とほぼ向きである。埋土は南辺寄りに明褐色粘質土があるが、大部分は灰黄褐色粘質土である。後者は木棺底板の痕跡であった可能性が高い。中央やや東寄り、中軸の南に偏った位置から打製石槍が出土した。原位置を保った副葬品である。先端を東、やや中軸側に向け、基部は掘方の底から約3cm、先端はそれよりさらに2cm程浮く。

周溝墓25 調査区の北端壁際、周溝墓24の西側に位置する。溝60を東辺周溝、溝57を南辺周溝とする方形周溝墓である。溝60は周溝墓24と、溝57は周溝墓26・29と共有する。溝57は幅約1.1m、深さ約10cmで、埋土は灰黄褐色シルトである。墳丘の大部分は調査区外であり、また、その墳丘上には溜池が築かれているため、詳細は明らかでないが、溝57の西側が北に向かって折れ曲がっていないことから、墳丘の規模は東西9.5m以上であったこと、また主軸は座標北から東に約8°振ることが推定できる。マウンドや主体部は確認できない。

周溝墓26 周溝墓24の西側、周溝墓25の南側に位置する。溝60を東辺、溝59を南辺、溝56を西辺、溝57を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝60は周溝墓24と、溝59は周溝墓27と、溝56は周溝墓29と、溝57は周溝墓25と共有する。溝59は当周溝墓付近では規模を減じ、幅1m程度となる。途中から南に向かって折れ、溝54となるが、本来はさらに西側へと延び、溝56に取り付いていたものと思われる。溝56は幅約1.8mで、深さは南から北に向かって徐々に深くなり、溝57との合流箇所では約42cmとなる。埋土は下層が灰黄褐色シルト、上層が礫を多く含む灰黄褐色粘質土で、下層からは弥生土器が出土している。墳丘の規模は東西・南北とも約5mで、主軸は座標北から西に約8°振る。マウンドや主体部は確認できない。

周溝墓27 周溝墓16の西側、周溝墓26の南側に位置する。溝50を東辺、溝57を西辺、溝59を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝50は周溝墓16と、溝59は周溝墓24・26と共有する。溝54は周溝墓26の南辺中央付近から南に折れ曲がる溝であるが、本来は溝56などともつながっていたと考えられ

ことから、基本的には周溝墓29と一部共有していたことになる。南辺の周溝は検出できなかつたが、南側には周溝墓28が接することから、両者の間に周溝が築かれていたことは、容易に推測できる。墳丘の規模は東西・南北とも約6.5mに復原できる。主軸は座標北から東に約25°振る。マウンドは残っていないが、中央東寄りで主体部と思われる墓壙15を検出した。

墓壙の規模は幅72cm、深さ7cmを測る。北半を削られているため、全長は不明であるが、1.0m以上はある。平面形は長方形に復原でき、主軸は墳丘の振れには合わせず、座標北から西に約4°振る。比較的小規模な墓壙である。埋土は灰黄色粘質土で、木棺の痕跡は確認できなかつた。

周溝墓28 周溝墓26の南側に位置する。溝50を東辺、溝53を南辺、溝54を西辺の周溝とする方形周溝墓である。溝50は周溝墓23と、溝53は周溝墓31・32と、溝54は周溝墓30と共有する。溝53は幅約3.5~4.2m、深さ約35~50cmで、埋土は下層から灰黄褐色粘質土、炭を含む黄褐色シルト、炭を含む黒褐色粘質土、にぶい黄色粘質土である。最上層のにぶい黄色粘質土は溝50最上層の明記褐色粘質土に対応し、古代の土器を包含する。下層からは弥生土器が出土している。溝54は幅約1.9m、深さ約45cmで、埋土は基本的には炭を含む黒褐色粘質土であるが、部分的に上層に黄褐色粘質土が堆積する。この上層からは古代の土器が出土しており、下層からは弥生土器のほか石器も出土している。墳丘の規模は東西約8.5mで、主軸は座標北から東に約35°振る。上記のとおり、周溝墓27との境には周溝がないが、両者は墳丘の主軸を若干異にしていることから、その屈曲部に本来周溝が築かれていたであろうことが推定でき、墳丘の南北幅も約10mであったことが復原できる。マウンドは完全に削平され残っていないが、西辺の溝54の際で主体部の1つと考えられる墓壙37を検出した。また周溝墓27との境の北辺周溝が推定されるちょうどその位置から、当周溝墓に伴うと考えられる墓壙16を検出している。

墓壙37 墳丘の西辺肩部、やや南寄りで検出した。平面形は全長1.35m、幅50~55cmのやや歪んだ梢円形を呈する。深さは14cmで、埋土は炭を含む灰黄褐色粘質土である。墓壙10・11同様の小規模な墓壙である。木棺痕跡は確認できなかつた。主軸は墳丘の振れに合わせ、座標北から東に約33°振る。弥生時代中期後半の高杯脚部が出土したが、埋納品ではなく、埋没過程で混入したものと思われる。

墓壙16 周溝墓27との境で検出した。おそらく本来は北辺周溝内の埋葬施設であったと思われる。平面形は全長2.5m、幅1.12mの長方形を呈するが、西辺はやや丸くなる。深さは20cmで、主軸は復原される北辺周溝の向きと並行するように、座標西から北に約30°振る。墓壙37とは直交する向きである。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内、および木棺内の埋土は黄褐色粘質土で、木棺痕跡は褐灰色から黒褐色の粘質土である。木棺の規模は、長さ2.0m、幅60cmで、側板は底から約20cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約8cm、底板の厚みは約4cmである。横断面および平面の観察によって、木棺の側板は底板の上には載らず、底板および小口板の外側に組み合う構造であったことが判明する。側板と小口板との関係は、側板の北西隅が小口板よりも僅かに外側に突出しており、側板が小口板を挟む構造であったことがうかがえる。小口板と底板との関係は確認できなかつた。

周溝墓29 周溝墓26西側の丘陵斜面に位置する。溝56を東辺、溝61を南辺、溝57を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝56は周溝墓26と、溝61は周溝墓30と、溝57は周溝墓25と共有する。溝61は溝54から西に向かって分岐する溝で、幅約2.7m、深さ約28cmを測る。埋土は炭を含む黒褐色粘質土で、弥生土器を包含する。墳丘の規模は南北約8mであるが、西半部を里道によって削られているため、東西幅は不明。主軸は座標北から東に約13°振る。マウンドおよび主体部は残っていない。

周溝墓30 周溝墓28西側、周溝墓29の南側の丘陵斜面に位置する。溝54を東辺、溝61を北辺の周溝

とする方形周溝墓である。南辺周溝は里道によって削られており、確認できないが、おそらく溝53の延長部がそれにあたるものと思われる。したがって墳丘の規模は南北約9mであったと復原できる。東西幅は不明。主軸の振れは座標北から東に約35°程度振っていたものと推定される。墳丘にはにぶい黄色粘質土のマウンドが、厚さ45cm程度残るが、上部は削平されており、主体部は残っていない。

周溝墓31 周溝墓28の南側、周溝墓21の西側に位置する。周溝墓27・28側からつづく溝50を東辺、溝62を南辺、溝51を西辺、溝53を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝50は周溝墓21と、溝62は周溝墓33と、溝51は周溝墓32と、溝53は周溝墓28と共有する。ただし、溝62は大部分を削平されており、溝50までは達していない。溝51は幅約0.95~1.6mで、深さは溝53側が深く、約40cmを測る。埋土は下層がにぶい黄褐色粘質土、上層が炭を多く含む黒褐色粘質土である。周溝の検出状況からは、墳丘は東西約6m、南北約10mに復原できるが、削平が著しい溝62については、西接する周溝墓32と比較しても、本来はさらに北側まで広がっていたことがうかがえる。おそらく墳丘の本來の南北規模は7m程度であったと推定される。主軸の振れは座標北から東に約31°振る。墳丘のマウンドは削平され、残っていないが、墳丘上のやや西寄りから主体部を1基（墓壙22）、南辺の周溝である溝62が復原される場所から墓壙を6基（墓壙23~28）、さらに東辺周溝である溝50内から墓壙を1基（墓壙21）検出している。周溝内で検出した7基すべてが当周溝墓に伴うものではないが、以下にまとめて報告する。

墓壙22 墳丘の西寄りで検出した。平面形は全長1.65m、幅約70~80cmの長方形を呈する。深さは約15cmで、埋土はにぶい黄色シルトである。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は北辺周溝である溝53と並行するように、座標西から北に約24°振る。

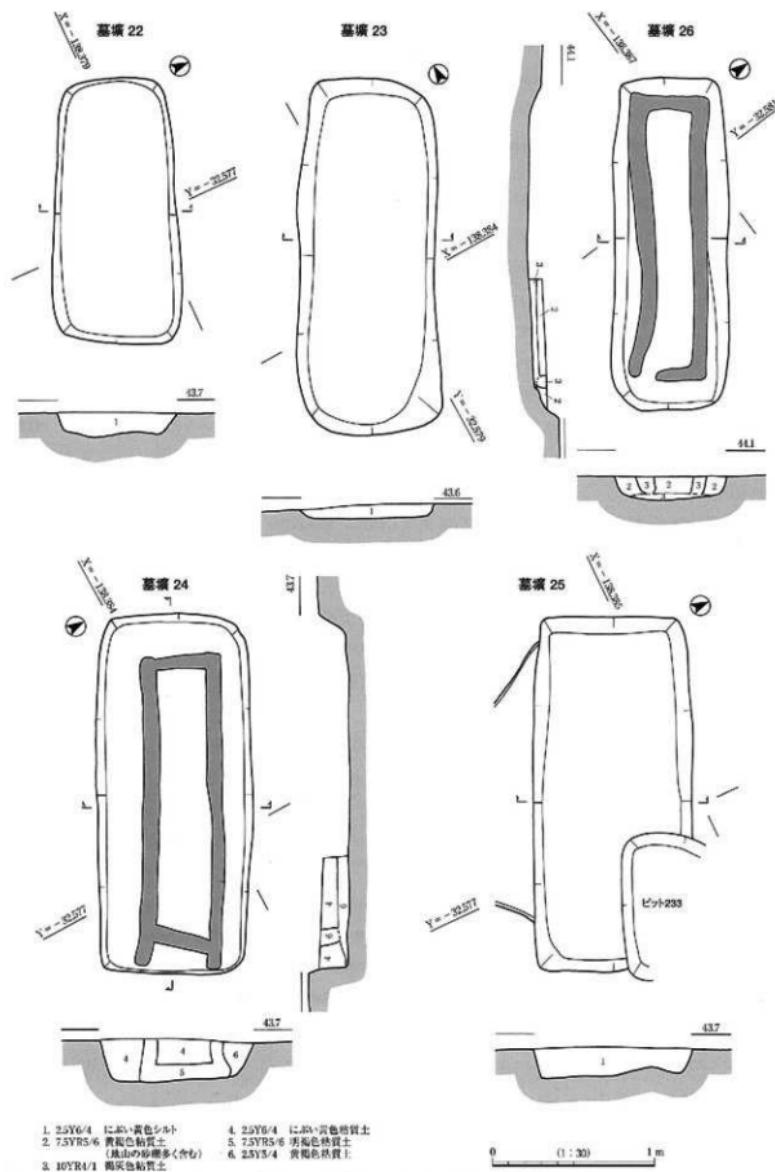
墓壙23 溝62が復原される場所のうち、もっとも西寄りで検出した。おそらく本來は周溝内の埋葬施設であったと思われる。平面形は全長2.2m、幅約85cmの長方形を呈する。深さは約9cmで、埋土はにぶい黄色シルトである。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は墳丘の振れに合わせ、座標北から東に約28°振る。つまり溝62には直交する向きとなる。

墓壙24 墓壙23の東側で検出した。これも周溝内の埋葬施設であったと思われる。平面形は全長2.2m、幅約95cmの長方形を呈し、深さは27cmを測る。主軸は復原される溝62の向きと並行するように、座標西から北に約29°振る。墓壙23とは直交する向きである。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内、および木棺内の埋土はにぶい黄色粘質土、あるいは明褐色粘質土で、木棺痕跡は黄褐色粘質土である。木棺の規模は、長さ1.94m、幅50cmで、側板は底から約16cmの高さまで確認できた。側板や小口板の厚みは約9cmで、底板の厚みは約11cmある。縦断面および平面の観察によって、木棺の小口板は底板の上に載ること、また、側板が小口板を挟む構造であったことがうかがえるが、側板が底板の上に載るのかについては、横断面の観察を行ったが確認できなかった。

墓壙25 墓壙24の南側で検出した。周溝内の埋葬施設であったと思われる。平面形は全長2.18m、幅1.0mの、均整のとれた長方形を呈する。深さは18cmで、埋土はにぶい黄色シルトである。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は墓壙22・24とほぼ並行し、座標西から北に約26°振る。建物18のピット233に一部を切られる。

溝62が復原される場所から検出した上記墓壙23~25は、当周溝墓側に偏っており、当周溝墓に伴う墓壙と考えられる。

墓壙26 溝62の東延長部、墓壙23の南側で検出した。西端は一部溝62に入る。溝内の埋葬施設であ



第44図 5区検出墓塚22~26平・断面図

ったことは確実である。平面形は全長2.05m、幅70cmの長方形を呈し、深さは15cmを測る。主軸は墓壙24・25とほぼ同じく、座標西から北に約37°振る。墓壙23とは直交する向きである。墓壙検出段階から、木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内、および木棺内の埋土は地山の砂礫を多く含む黄褐色粘質土で、木棺痕跡は褐色灰色粘質土である。木棺の規模は、長さ1.75m、幅50cmで、側板は底から12cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約11cm、底板の厚みは約5cmである。横・縱断面の観察によって、木棺は側板および小口板が底板の上に載る構造であったことが判明する。側板と小口板との関係は明瞭に検出できなかったが、おそらく墓壙24同様に側板が小口板を挟む構造であったと思われる。

墓壙27 墓壙26の南側で検出した。周溝内の埋葬施設であったと思われるが、その位置は周溝墓33の墳丘北肩部にある。平面形は全長1.83m、幅約60cmの長方形で、深さは約10cmを測る。埋土は下層が褐色粘質土、上層がにぶい黄色シルトで、前者は木棺底板の痕跡であった可能性がある。主軸は墓壙26とほぼ並行するように、座標西から北に約41°振る。東端には墓壙18と同様の小口穴がある。長さは墓壙の幅まで達し、幅は約10cmを測る。ちょうど木棺の小口板が納まる規模である。深さは3cmである。西端では検出できなかったが、これにより、木棺は小口板が底板よりも外側で、底板よりも下に延びる構造（第51図-III）であったことがわかる。

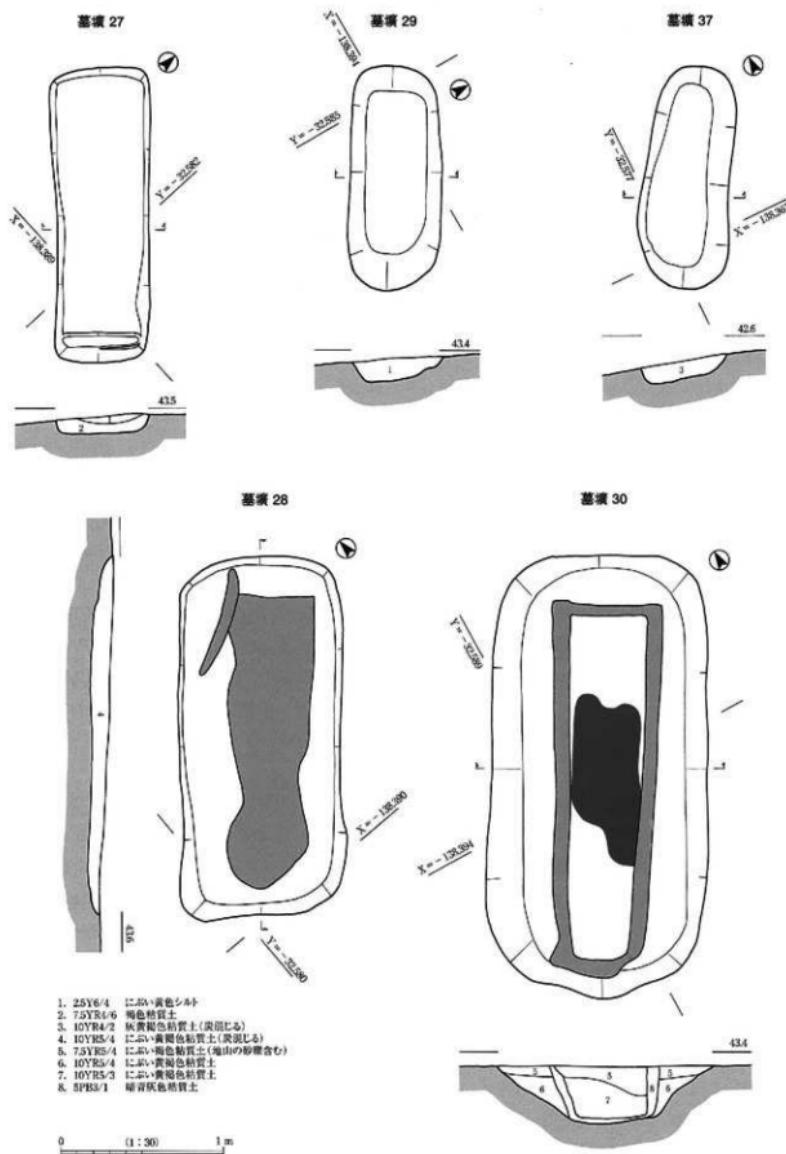
墓壙28 墓壙26・27の東側で検出した。本来は周溝内の埋葬施設であったと思われる。平面形は全長2.25m、幅1.0mの長方形を呈し、深さは約10cmを測る。主軸は復原される溝62の向きと直交するよう、座標北から東に約38°振る。つまり墓壙26・27とは直交する向きである。埋土は炭を含むにぶい黄褐色粘質土で、この層を平均的に下げるとき、墓壙の中軸上に、木棺底板を思わせる浅い窪みが検出された。この窪みは長さ1.8m、幅約50cmを測る。

溝62が復原される場所から検出した上記墓壙26～28は、墓壙23～25とは僅かに隔て、周溝墓33側に偏っていることから、おそらく周溝墓33に伴う墓壙であったと考えられる。

墓壙21 溝50の墳丘寄りで検出した。平面形は全長1.9m、幅70cmの、梢円形に近い隅丸長方形を呈する。深さは13cmで、埋土はにぶい黄色粘質土である。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は墳丘の振れ、つまり溝50の振れと並行するように、座標北から東に約30°振る。当周溝墓に伴う墓壙と思われる。

周溝墓32 周溝墓31西側の丘陵斜面に位置する。溝51を東辺、溝62を南辺、溝53を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝51は周溝墓31と、溝62は周溝墓33と、溝53は周溝墓28と共有する。溝62は幅約3.6m、深さ約27cmで、埋土は下層から、炭や褐色灰色粘質ブロック十を含む暗黃色粘質土、炭、炭を含む黄褐色粘質土の3層である。西端部は西に向かう溝と、北に向かう溝の2条に分岐する。埋土からは須恵器や弥生土器が出土しているが、これは上層と下層とに分けて遺物を取り上げなかつたためであり、本来は他の周溝と同じく、須恵器が出土する上層と、弥生土器のみの下層とに分かれるものである。墳丘の規模は南北約10mであるが、東西長は不明。主軸は座標北から東に約28°振る。マウンドおよび主体部は残っていない。

周溝墓33 調査区南半、周溝墓31・32の南側に位置する。周溝墓27・28・31側からつづく溝50を東辺、溝62を北辺の周溝とする方形周溝墓である。溝50は周溝墓22と、溝62は周溝墓31・32と共有する。南辺と西辺には周溝を塗いていない。南辺には段を設け、西辺は急勾配な丘陵斜面を利用してそれぞれの辺を区画する。南辺の段は高低差約40cmを測る。溝50は当周溝墓付近では幅約8～9mと広がるが、深さは30cm程度まで浅くなる。この付近でも古代の遺物を包含するにぶい黄褐色粘質土が上層



第45図 5区検出墓塚27~30・37平・断面図

に堆積する。墳丘の規模は東西約11m、南北約14.5mで、南北にやや長い平面長方形を呈する。主軸は座標北から東に約30°振る。墳丘のマウンドは完全に削平されているが、墳丘のほぼ中央から主体部である墓壙30と、その東側で墓壙29を検出した。

墓壙30 平面形は全長2.75m、幅1.35mの梢円形に近い隅丸長方形を呈する。南辺中央部が若干膨らむが、これは木棺を埋納する際に削れたものと考えられる。深さは35cmで、壁面は垂直でなく、斜めに掘られている。主軸は墳丘の振れに合わせ、座標北から東に約30°振る。墓壙検出段階から、南壁に接する木棺の痕跡が明瞭に確認できた。墓壙掘方内の埋土は、下層からにぶい黄褐色粘質土、地山の砂礫を含むにぶい褐色粘質土で、木棺内にも下層からにぶい黄褐色粘質土と地山の砂礫を含むにぶい褐色粘質土の2層が堆積する。木棺痕跡は暗青灰色粘質土である。木棺の規模は、長さ2.3m、幅約50cmで、側板は底から約30cmの高さまで確認できた。側板の厚みは約7cmで、やや外側に倒れぎみとなる。底板の厚みは約4cmである。断面の観察を行ったが、側板や小口板が底板の上に載るのかなど、木棺の構造は明らかにできなかった。ただし、平面的には側板が小口板を挟んでいる状態が読み取れる。なお、木棺痕跡の内面で朱を検出している（巻頭カラー）。木棺中央部の1.05×0.5mの範囲に塗られたもので、底板上面から側板内側上端にまで及ぶ。水銀朱である。

墓壙29 墓壙30の東側で検出した。平面形は全長1.37m、幅56cmの梢円形を呈するが、本来は長方形であったことがうかがえる。深さは14cmで、埋土はにぶい黄色シルトである。墓壙10・11・37同様の小規模な墓壙である。木棺痕跡は確認できなかった。主軸は墳丘の振れと直交するように、座標西から北に約29°振る。

周溝墓34 調査区南端、周溝墓33の南側に位置する。周溝墓27・28・31・33側からつづく溝50を東辺、溝49を南辺の周溝とする方形周溝墓である。上記のとおり、北辺にあたる周溝墓33との境には周溝を設げず、段で区画する。西辺も周溝墓30と同じく、急勾配な丘陵斜面を利用しておらず、周溝は設けない。溝49は幅約3.7m、深さ約25~30cmで、埋土は下層が暗褐色粘質土、上層が黒褐色粘質土である。調査区の東側で溝50に取り付くものと思われる。弥生時代中期後半の土器や石庖丁が出土している。墳丘は北接する周溝墓33と同規模の、東西約11.5m、南北約13.5mで、主軸の振れも同じく座標北から東に約30°振る。マウンドおよび主体部は残っていない。

なお、溝50完掘後に、溝底に主体部であったことを思わせる窪みを3箇所で確認している（墓壙31~33）。これらについては所謂周溝内埋葬を想定して調査を行わなかつたために、断面観察等の詳細な検証ができていない。周溝内埋葬を示す遺構であったのか否かは不明であるが、以下に規模などについて報告しておく。

墓壙31・32 周溝墓27の東側に位置する。墓壙31が北側、墓壙32がその南側にある。墓壙31は全長1.7m、幅1.1mの梢円形に近い隅丸長方形を呈し、深さは約20cmを測る。墓壙32も全長2.24m、幅1.24mの梢円形に近い隅丸長方形で、深さ約50cmを測る。両者とも主軸は溝50の振れに合わせ、座標北から東に約25°振る。周溝内の埋葬施設であったとすれば、周溝墓27に伴うものと思われる。木棺痕跡は確認できなかった。

墓壙33 周溝墓22の西側に位置する。同じく主軸は溝50の振れに合わせ、座標北から東に約30°振る。全長1.96m、幅1.05mの梢円形に近い隅丸長方形を呈する。深さ16cmを測る。周溝内の埋葬施設であったとすれば、周溝墓22に伴うものと思われる。木棺痕跡は確認できなかった。

【遺物】(第41・43・46~50図)

2層からは7世紀末から8世紀前半のものと思われる土師器輪(117)のほか、同時期の須恵器壺(118)、弥生時代中期後半の壺(119~121)が出土した。3層および地山直上からは主に7世紀前葉から中葉の土器が出土したが(122~127、130~138)、7世紀後葉の須恵器蓋・壺(128・129・142)や、弥生時代中期後半の壺(139・141)、高壺(140)なども僅かに含まれている。(137・138)は移動式壺である。(139)は生駒西麓産胎土である。

建物18のピット234からは7世紀中葉から後葉の土器(143~148)がまとまって出土した。(146)は圜足円面鏡である。海と台脚部のみの小片であるが、最大径17.6cm以上に復原できる。台脚部には長方形の透かし穴を穿つ。(148)は須恵器の蓋としたが、壺底部であるかもしれない。外面に×の線刻がある。建物13のピット205からは7世紀中葉の須恵器壺(149)が、建物跡には伴わないピット264からは同時期の須恵器壺蓋(150)が出土している。

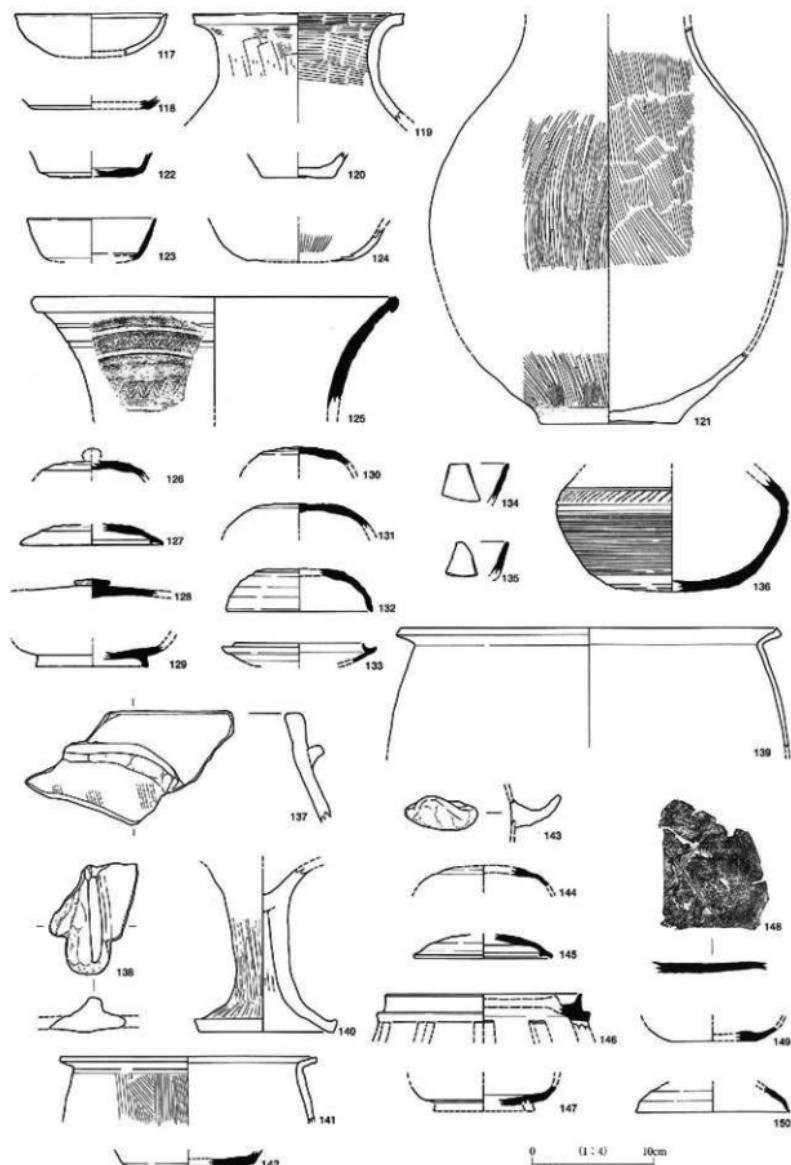
方形周溝墓の各周溝からは、上層から8世紀前半までの土師器・須恵器、下層から弥生時代中期後半の土器が出土している。上層出土の土器は集落形成段階での整地や生活途中での流れ込みによって混入したものである。溝49からは弥生時代中期後半の壺(151・152)に混じって、同時期の石庵壷(153)が出土した。大部分を欠損するが、円孔の一部が残る。粘板岩系の石材を用いている。溝50の上層からは弥生時代中期後半の壺(168~171)に混じって、古代の土師器・須恵器(154~165)が多く出土した。その多くは7世紀中葉から後葉のものであるが、土師器壺(155)、須恵器壺(161)のように、確実に8世紀前葉のものも含まれている。(170)は生駒西麓産胎土である。溝50下層には古代の遺物は含まれず、弥生時代中期後半の土器(172~176)に限られる。(172~176)は全て壺で、(175)はハケメ上に櫛描箋状紋とやや角張った波状紋を施す。溝53下層から出土した破片(189)と同一個体と思われる。溝51の下層からは弥生時代中期後半の無頸壺(117)、蓋(178)、高壺(179)が出土した。(117)は口縁端部にキザミ目を、体部上半には隙間なく櫛描直線紋を施す。(178)の外面は基本的に縱方向のヘラミガキであるが、端部寄りにのみ横方向のヘラミガキが認められる。墓壙34からは弥生時代中期後半の壺片(180)が1点出土したが、造構に伴うものではなく、明らかに混入品である。生駒西麓産胎土である。墓壙181からも同時期の高壺脚部(181)が出土している。溝53の上層からは須恵器壺片(182)が出土しているが、下層からは弥生時代中期後半の土器(183~191)のみが出土している。(183~191)は全て壺である。口縁部外側には波状紋、箋状紋、円形浮紋など様々な文様が施される。(189)は前記(175)と同一個体と思われる壺片である。(191)は写真図版35~191のように細かく破砕しており、口縁部、頭部、体部、底部に分かれているが、明らかに一個体を成すものであり、第48図のように復原できる。体部下半はヘラミガキで、下端部はナデ消される。上半には櫛描波状紋と直線紋とを交互に施す。頭部には断面三角形の凸帯を3条付し、上方外面には竹管紋を押す。口縁部外側には円形浮紋を付け、内面にはキザミ目を施した断面三角形の凸帯を2条付す。体部内面下半にはハケメが認められる。溝54の上層からは7世紀中葉の須恵器蓋(192~196)、弥生時代中期後半の壺(197)などが出土した。(196)は口径20.1cmの蓋と思われるが、つまみ部は欠損しており不明。(197)は生駒西麓産胎土である。溝54下層からは弥生時代中期後半の土器と石器が出土した(198~211)。(198~202・204・208・209)は壺、(203・205・206・210)は壺、(206)は高壺である。(201・202)は前記(191)と同じ形態であるが、(202)は頭部の凸帯が1条のみとなる。(208)は体部全体のハケメの後、下方にヘラミガキ、上半に7条の櫛描直線紋と1条の波状紋を施す。直線紋の各条は水平ではなく、上下に振れる雑なものである。

(209・210) は外面ハケメで、ヘラミガキは施されていない。なお、(198・205) は生駒西麓墓胎土である。(211) はサスカイトの横長剥片である。長さ3.9cm、幅6.8cm、厚さ1.2cmを測る。溝56の下層、溝59、溝60、溝61からは弥生時代中期後半の土器(212~227)が出土した。(212・213・216~222・224・226・227) は壺、(214・225) は鉢、(215・223) は高壺である。(213) は頸部から体部にかけて、ハケメの上に6条の櫛描直線紋を施す。各条は水平ではなく、上下に振れる雑なものである。(215) は外面にヘラミガキを施すが、これも各単位が左右に揺れ、雑である。細頸壺(220) は口縁部直下から3条の櫛描波状紋と、それ以下に櫛描直線紋を施す。直線紋は間隔を開けずに付されている。(225) は台付鉢で把手も付く。溝62からは須恵器(228~233)や弥生土器(234~239)が出土した。これは上層と下層とに分層せずに遺物取り上げを行ったためであり、本来は他の周溝と同様に、須恵器が出土する上層と、弥生土器のみの下層とに分かれるものである。須恵器は概ね7世紀中葉から後葉に属するもので、壺(228・229)、壺(230~232)、壺(233)などがある。弥生土器は全て中期後半のもので、壺(234~237)、壺(238)、鉢(239)などがある。(235) は体部上半の破片で、櫛描廉状紋と波状紋を施す。波状紋は施紋具原体を半回転させながら描いている。(238) は外側面にハケメを施す。外面はその後ヘラミガキと思われる調整が行われるが、ミガキの痕跡は明瞭には残っていない。あるいは縱方向のナデ調整であるかもしれない。(239) は溝62のもっとも南西の浅い箇所から出土した。当遺跡から出土した弥生土器の中で唯一の完形品である。体部下半には斜め上方に向て6分割のヘラミガキ、上半には横方向のヘラミガキを施す。内面はナデである。(234) は生駒西麓墓胎土である。

墓塚14から出土した(114) は、サスカイト製の打製石槍である。長さ18.1cm、幅3.1cm、厚さ2.1cmを測る。重さは110.8gである。中央やや下方が最大幅となり、尖頭部および基部に向かって徐々に幅を減じる。基端部は丸くおさめる。刃部には籠の稜線が通り、断面は肉厚の菱形を呈する。基部は扁平で、厚さ1.3cm程度となる。基端から約8.5cmまでの範囲には、両側面に刃潰し加工が施される。

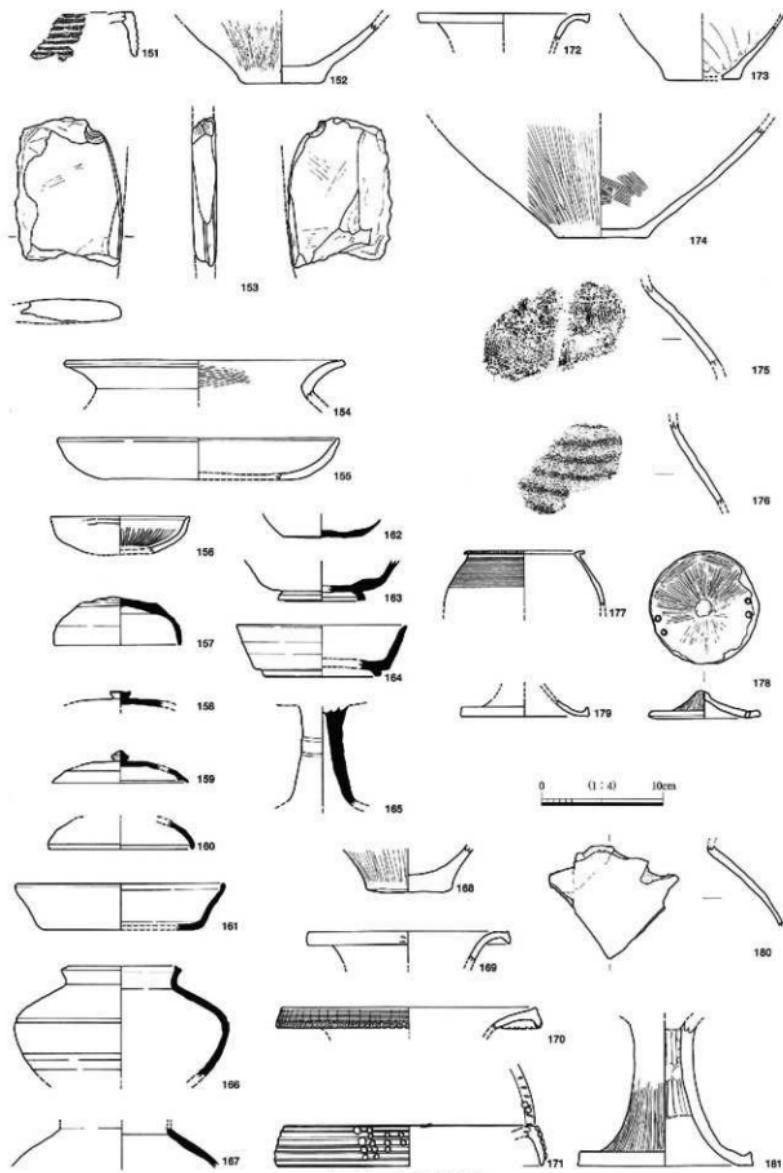
墓塚19上層から出土した(115) は、サスカイト製の凸基有茎式石鎌である。長さ3.1cm、厚さ0.5cmを測る。幅は基端部を欠くため不明であるが、約1.8cmに復原できる。重さは2.0gである。墓塚埋没過程で混入したものと思われる。

墓塚19の木棺底板上面から出土した(116) も、サスカイト製の凸基有茎式石鎌である。やや大型で、幅2.5cm、厚さ0.5cmを測る。長さは先端と茎部を欠くため不明であるが、復原すると5.5cm前後になる(残存長は4.1cm)。重さは4.9gである。



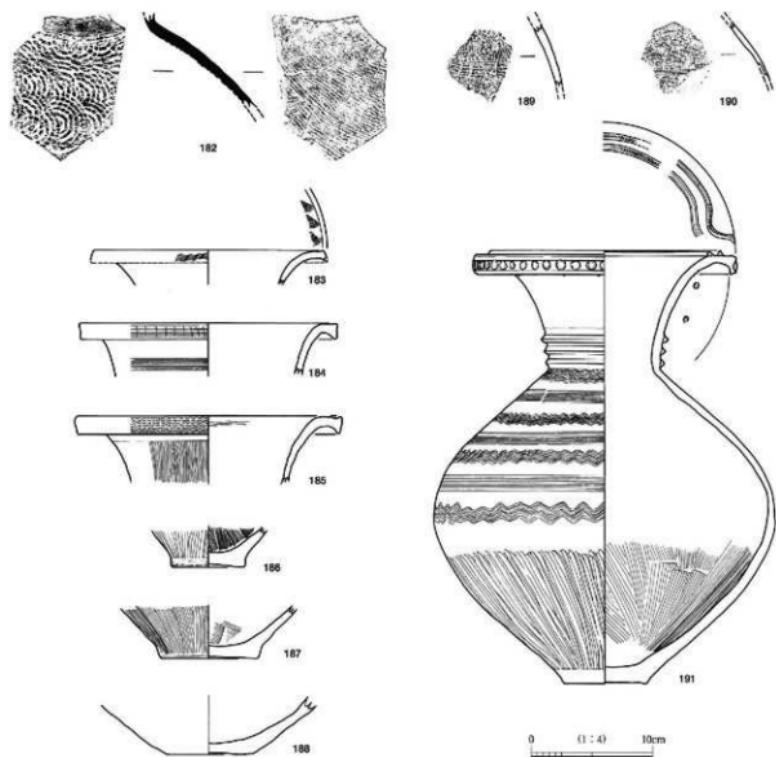
第46図 5区出土遺物

(117~121. 2層、122~140. 3層、141・142. 地山直上、143~148. 墓物18、149. 墓物13、150. ピット264)

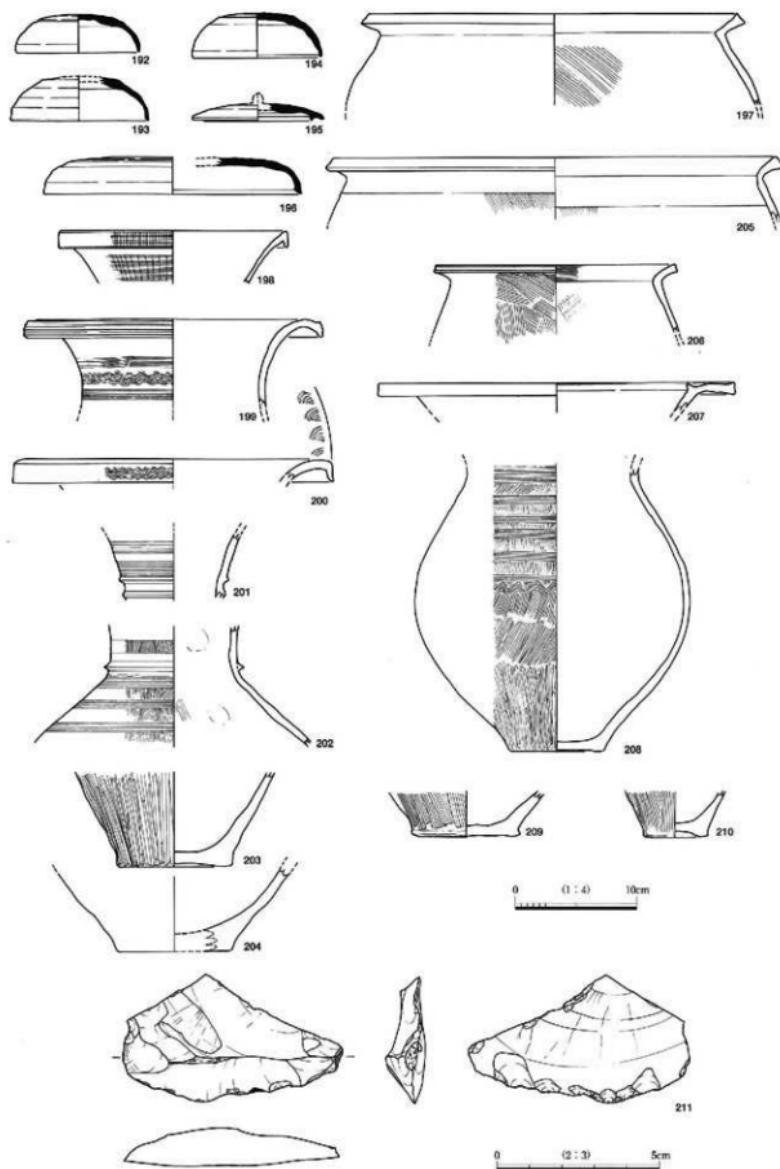


第47図 5区出土遺物

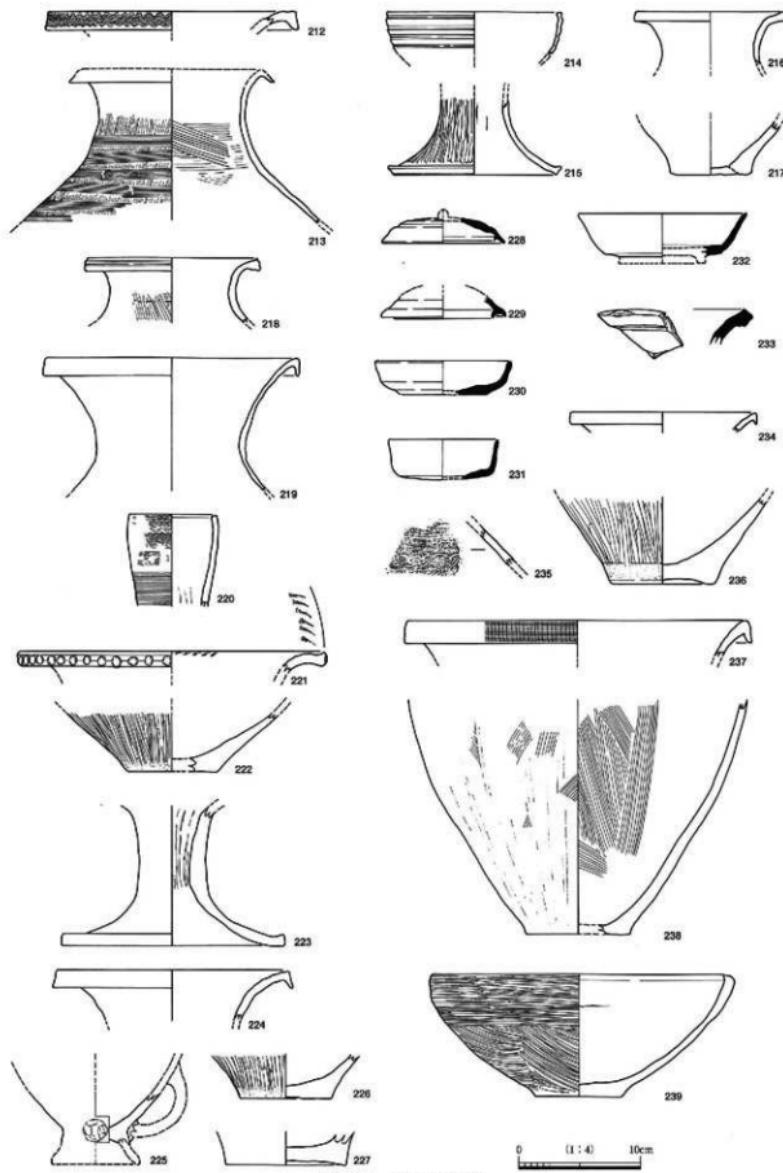
(151~153. 溝49、154~171. 溝50上層、172~176. 溝50下層、177~179. 溝51下層、180. 焼成34、181. 墓壙37)



第48図 5区出土遺物 (182. 溝53上層、183~191. 溝53下層)



第49図 5区出土遺物 (192~197、洪54上層、198~211、洪54下層)



第50図 5区出土遺物

(212~217. 湖56下層、218~219. 湖59、220~223. 湖60、224~227. 湖61、228~239. 湖62)

第4章 調査成果の検討とまとめ

以上のように、大尾遺跡は弥生時代中期後半から近世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。本章では遺構を各時代に分けて検討し、まとめとする。

弥生時代中期後半

丘陵頂部という立地を生かし、大規模な墓が形成される時代である。後世の開発によって、墳丘は悉く削平されてしまっているが、周囲の溝から、調査区内には少なくとも30基、周辺の状況から復原できるものも含めると35基以上の方形周溝墓が築かれていたことが判明する。これらは隣り合う周溝墓と周溝を共有しながら南北に列状に配置されており、そのほぼ中央には墓道も設けられている。その主軸は丘陵の向きに合わせ、基本的に座標北から東（もしくは座標西から北）に約15°～35°振れる。丘陵頂部にこれだけ大規模、且つ整然と配された方形周溝墓が築かれた遺跡は、周辺地域を見渡してもこれまでに発見例はなく、極めて稀である。また周溝墓に伴う主体部も多数確認されており、墓壙14・19のように副葬品が伴うもの、墓壙19・30のように木棺内に水銀朱が塗られたものなどがあった。

各遺構については第3章で報告したとおりであり、割愛するが、以下、若干の問題点や明らかとなつた点などについてのみ触れる。

まずは1区検出の周溝墓1についてである。1区では横断面がV字状を呈する大規模な溝（溝20）を検出しており、周溝墓1はこの溝20を西辺の周溝とする方形周溝墓として復原した。しかし、30基を超える方形周溝墓は、全てこの溝20よりも西側での検出であり、東側には周溝墓1以外は確認されていない。溝20の規模や形状、また方形周溝墓の広がりから、溝20は墓域を画する溝であった可能性が高く、この溝よりも東側に方形周溝墓が存在したとは考え難い。確かに周溝墓1の南辺周溝と考えた溝14からは多くの弥生土器が出土し、また方形周溝墓の一角であるかのように溝20に直角に取り付いてはいるが、溝20の性格を考えた場合、これを1基の方形周溝墓とするには無理があろう。方形周溝墓は溝20を境に、それよりも西側にのみ広がっていたと考えるべきであり、溝14は単に溝20に取り付く溝と解釈した方がよかろう。

次に、主に5区で検出した主体部が、本当に弥生時代中期後半のものか、つまり方形周溝墓に伴うものかどうかという問題である。4区では6世紀末から7世紀初頭の時期の上塙墓（墓壙4）を検出しているが、これは墓壙の底から須恵器壺蓋が出土したことから、これだけ時期が特定できにすぎない。5区で検出した多くの墓壙と比較しても、その規模が著しく異なっているわけでもなく、出土遺物がなければ、実際のところその所属時期の特定は難しい。つまり、5区で検出した墓壙の中には、墓壙4と同時期のものが含まれている可能性も考えておかなければならないのである。個々の墓壙についてみてみると、石槍が出土した墓壙14と、石鎌が出土した墓壙19に関しては方形周溝墓に伴う墓壙であることは確実といえる。この2つの墓壙は、共に主軸を座標西から北に約19～43°振っている。これは周囲の周溝、すなわち墳丘の振れに合わせたものであり、周辺には同様の振れ、あるいはこれらと直交する向きの墓壙が多数分布する。遺物は出土していないとも、墳丘の振れを意識したそれらの墓壙は、方形周溝墓に伴う墓壙と考えて差し支えないであろう。

墓壙19の周辺には周溝墓23上の墓壙17・18、周溝墓21上の墓壙20があるが、いずれも墓壙19

第1表 方形周溝墓および墓擴一覧表

※規模の単位はm

調査区	方形周溝墓		墓擴No	伴う墓擴		特徴・遺物
	周溝墓No	規模(東西×南北)		規模(長×幅×深)	振れ	
1区	周溝墓1	9.5×?	N-32°-W	-	-	-
	周溝墓2	5強×?	W-18°-N	墓擴2	1.3以上×0.85×0.18	W-18°-N 小口穴あり
2区	周溝墓3	?×8.5	N-12°-E	-	-	-
	周溝墓4	?×8	N-15°-E	-	-	-
	周溝墓5	-	周溝墓4と同	-	-	-
	周溝墓6	9×12	N-25°-E	墓擴3	1.75×0.6以上×0.14	N-25°-E
2・3区	周溝墓7	13×13→14×16	N-16°-E	-	-	-
	周溝墓11	-	N-24°-E	-	-	-
3区	周溝墓8	-	周溝墓9と同	-	-	-
	周溝墓9	9.5×12	N-15°-E	-	-	-
	周溝墓10	周溝墓9と同規模か	N-15°-E	土坑7	1.5以上×1.25×0.32	N-15°-E 木棺内への堆積層あり
	周溝墓12	周溝墓7と同規模か	N-14°-E	土坑4	1.55以上×0.9×0.12	W-21°-N
	周溝墓13	-	-	土坑5	1.24以上×1.3×0.34	W-10°-N
	周溝墓14	-	N-17°-E	土坑6	2.2以上×1.5×0.52	W-19°-N
4区	周溝墓15	-	-	-	-	-
	周溝墓17	15×10	N-13°-E	-	-	-
	周溝墓18	12.5×9.5	N-3°-E	土坑26?	1.5以上×1.1×0.2	W-8°-N 小口穴?
	周溝墓20	9前後×12.5	N-25°-E	-	-	-
2・4区	周溝墓19	-	-	-	-	-
4・5区	周溝墓16	14.5×14.5	N-26°-E	-	-	-
	周溝墓21	9×8	N-16°-E	墓擴20	2.2以上×1.5×0.6	W-34°-N 木棺内堆積層が明瞭。小口穴あり
	周溝墓22	8×10.5	N-16°-E	墓擴33	1.96×1.05×0.16	N-30°-E 周溝内
	周溝墓23	9×10.5	N-32°-E	墓擴17	2.35×0.8~0.95×0.15	W-37°-N 木棺痕跡あり
				墓擴18	2.15×0.7×0.08	W-30°-N 木棺痕跡(底板)。小口穴あり
	周溝墓24	-	N-19°-E	墓擴19	3.23×1.53×0.6	W-43°-N 木棺痕跡。底板上面に木銀朱。石廉
	周溝墓25	9.5以上×?	N-8°-E	墓擴10	0.86以上×0.46×0.15	W-21°-N
	周溝墓26	5×5	N-8°-W	墓擴14	2.1×0.7~0.83×0.07	W-19°-N 木棺痕跡(底板)か。石棺出土
5区	周溝墓27	6.5×6.5	N-25°-E	墓擴9	1.9×最大0.9×0.2	N-61°-E
				墓擴11	1.12×0.51×0.15	N-9°-W
				墓擴12	2.0×1.0×0.25	N-30°-E 木棺痕跡あり
				墓擴13	2.55×1.3×0.23	W-25°-N 木棺痕跡あり
	周溝墓28	8.5×10	N-35°-E	墓擴15	1.0以上×0.72×0.07	N-4°-W
				墓擴31	1.7×1.1×0.2	N-25°-E 周溝内
				墓擴32	2.24×1.24×0.5	N-25°-E 周溝内
				墓擴16	2.5×1.12×0.2	W-30°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓擴37	1.35×0.5~0.55×0.14	N-33°-E
	周溝墓29	?×8	N-13°-E	-	-	-
	周溝墓30	?×9	N-35°-E	-	-	-
	周溝墓31	6×7	N-31°-E	墓擴21	1.9×0.7×0.13	N-30°-E 周溝内
				墓擴22	1.65×0.7~0.8×0.15	W-24°-N
				墓擴23	2.2×0.85×0.09	N-28°-E 周溝内か
				墓擴24	2.2×0.95×0.27	W-29°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓擴25	2.18×1.0×0.18	W-26°-N 周溝内か
	周溝墓32	?×10	N-28°-E	-	-	-
				墓擴26	2.05×0.7×0.15	W-37°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓擴27	1.83×0.6×0.1	W-41°-N 周溝内か。木棺痕跡(底板)か。小口穴
	周溝墓33	11×14.5	N-30°-E	墓擴28	2.25×1.0×0.1	N-38°-E 周溝内か。木棺痕跡(底板)か
				墓擴29	1.37×0.56×0.14	W-29°-N
				墓擴30	2.75×1.35×0.35	N-30°-E 木棺痕跡あり。内面に水銀朱。
	周溝墓34	11.5×13.5	N-30°-E	-	-	-
	周溝墓35	-	周溝墓22と同	-	-	-
	周溝墓36	-	周溝墓21と同	-	-	-
	周溝墓37	-	周溝墓22と同	-	-	-

第4章 調査成果の検討とまとめ

以上のように、大尾遺跡は弥生時代中期後半から近世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。本章では遺構を各時代に分けて検討し、まとめとする。

弥生時代中期後半

丘陵頂部という立地を生かし、大規模な墓が形成される時代である。後世の開発によって、墳丘は悉く削平されてしまっているが、周囲の溝から、調査区内には少なくとも30基、周辺の状況から復原できるものも含めると35基以上の方形周溝墓が築かれていたことが判明する。これらは隣り合う周溝墓と周溝を共有しながら南北に列状に配置されており、そのほぼ中央には墓道も設けられている。その主軸は丘陵の向きに合わせ、基本的に座標北から東（もしくは座標西から北）に約15°～35°振れる。丘陵頂部にこれだけ大規模、且つ整然と配された方形周溝墓が築かれた遺跡は、周辺地域を見渡してもこれまでに発見例はなく、極めて稀である。また周溝墓に伴う主体部も多数確認されており、墓壙14・19のように副葬品が伴うもの、墓壙19・30のように木棺内に水銀朱が塗られたものなどがあった。

各遺構については第3章で報告したとおりであり、割愛するが、以下、若干の問題点や明らかとなつた点などについてのみ触れる。

まずは1区検出の周溝墓1についてである。1区では横断面がV字状を呈する大規模な溝（溝20）を検出しておらず、周溝墓1はこの溝20を西辺の周溝とする方形周溝墓として復原した。しかし、30基を超える方形周溝墓は、全てこの溝20よりも西側での検出であり、東側には周溝墓1以外は確認されていない。溝20の規模や形状、また方形周溝墓の広がりから、溝20は墓域を画する溝であった可能性が高く、この溝よりも東側に方形周溝墓が存在したとは考え難い。確かに周溝墓1の南辺周溝と考えた溝14からは多くの弥生土器が出土し、また方形周溝墓の一角であるかのように溝20に直角に取り付いてはいるが、溝20の性格を考えた場合、これを1基の方形周溝墓とするには無理があろう。方形周溝墓は溝20を境に、それよりも西側にのみ広がっていたと考えるべきであり、溝14は単に溝20に取り付く溝と解釈した方がよかろう。

次に、主に5区で検出した主体部が、本当に弥生時代中期後半のものか、つまり方形周溝墓に伴うものかどうかという問題である。4区では6世紀末から7世紀初頭の時期の土壙墓（墓壙4）を検出しているが、これは墓壙の底から須恵器壺蓋が出土したことから、これだけ時期が特定できただにすぎない。5区で検出した多くの墓壙と比較しても、その規模が著しく異なるわけでもなく、出土遺物がなければ、実際のところその所属時期の特定は難しい。つまり、5区で検出した墓壙の中には、墓壙4と同時期のものが含まれている可能性も考えておかなければならないのである。個々の墓壙についてみてみると、石棺が出土した墓壙14と、石鏡が出土した墓壙19に関しては方形周溝墓に伴う墓壙であることは確実といえる。この2つの墓壙は、共に主軸を座標西から北に約19°～43°振っている。これは周囲の周溝、すなわち墳丘の振れに合わせたものであり、周辺には同様の振れ、あるいはこれらと直交する向きの墓壙が多数分布する。遺物は出土していないとも、墳丘の振れを意識したそれらの墓壙は、方形周溝墓に伴う墓壙と考えて差し支えないであろう。

墓壙19の周辺には周溝墓23上の墓壙17・18、周溝墓21上の墓壙20があるが、いずれも墓壙19

第1表 方形周溝墓および墓壙一覧表

※規模の単位はm

調査区	方形周溝墓		墓壙No.	伴う墓壙		
	周溝墓No.	規模(東西×南北)		規模(長×幅×深)	振れ	特徴・遺物
1区	周溝墓1	9.5×?	N-32°-W	-	-	-
	周溝墓2	5強×?	W-18°-N	墓壙2	1.3以上×0.85×0.18	W-18°-N 小口穴あり
2区	周溝墓3	?×8.5	N-12°-E	-	-	-
	周溝墓4	?×8	N-15°-E	-	-	-
	周溝墓5	-	周溝墓4と同	-	-	-
2・3区	周溝墓6	9×12	N-25°-E	墓壙3	1.75×0.6以上×0.14	N-25°-E
	周溝墓7	13×13→14×16	N-16°-E	-	-	-
	周溝墓11	-	N-24°-E	-	-	-
	周溝墓8	-	周溝墓9と同	-	-	-
	周溝墓9	9.5×12	N-15°-E	-	-	-
3区	周溝墓10	周溝墓9と同規模か	N-15°-E	土坑7	1.5以上×1.25×0.32	N-15°-E 木棺内への堆積層あり
	周溝墓11	周溝墓7と同規模か	N-14°-E	土坑4	1.55以上×0.9×0.12	W-21°-N
	周溝墓12	周溝墓7と同規模か	N-14°-E	土坑5	1.24以上×1.3×0.34	W-10°-N
	周溝墓13	-	周溝墓10と同	土坑6	2.2以上×1.5×0.52	W-19°-N
4区	周溝墓14	-	N-17°-E	-	-	-
	周溝墓15	-	-	-	-	-
	周溝墓17	15×10	N-13°-E	-	-	-
	周溝墓18	12.5×9.5	N-3°-E	土坑26?	1.5以上×1.1×0.2	W-8°-N 小口穴?
2・4区	周溝墓20	9前後×12.5	N-25°-E	-	-	-
4・5区	周溝墓19	-	-	-	-	-
	周溝墓16	14.5×14.5	N-26°-E	-	-	-
	周溝墓21	9×8	N-16°-E	墓壙20	2.2以上×1.5×0.6	W-34°-N 木棺内への堆積層が明瞭。小口穴あり
	周溝墓22	8×10.5	N-16°-E	墓壙33	1.96×1.05×0.16	N-30°-E 周溝内
5区	周溝墓23	9×10.5	N-32°-E	墓壙17	2.35×0.8×0.95×0.15	W-37°-N 木棺痕跡あり
				墓壙18	2.15×0.7×0.08	W-30°-N 木棺痕跡(底板)。小口穴あり
				墓壙19	3.23×1.53×0.6	W-43°-N 木棺痕跡。底板上面に水銀朱。石鏡
	周溝墓24	-	N-19°-E	墓壙10	0.86以上×0.46×0.15	W-21°-N
				墓壙14	2.1×0.7~0.83×0.07	W-19°-N 木棺痕跡(底板)か。石槍出土
	周溝墓25	9.5以上×?	N-8°-E	-	-	-
	周溝墓26	5×5	N-8°-W	墓壙9	1.9×最大0.9×0.2	N-61°-E
				墓壙11	1.12×0.51×0.15	N-9°-W
				墓壙12	2.0×1.0×0.25	N-30°-E 木棺痕跡あり
				墓壙13	2.55×1.3×0.23	W-25°-N 木棺痕跡あり
	周溝墓27	6.5×6.5	N-25°-E	墓壙15	1.0以上×0.72×0.07	N-4°-W
				墓壙31	1.7×1.1×0.2	N-25°-E 周溝内
				墓壙32	2.24×1.24×0.5	N-25°-E 周溝内
	周溝墓28	8.5×10	N-35°-E	墓壙16	2.5×1.12×0.2	W-30°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓壙37	1.35×0.5~0.55×0.14	N-33°-E
	周溝墓29	?×8	N-13°-E	-	-	-
	周溝墓30	?×9	N-35°-E	-	-	-
				墓壙21	1.9×0.7×0.13	N-30°-E 周溝内
				墓壙22	1.65×0.7~0.8×0.15	W-24°-N
	周溝墓31	6×7	N-31°-E	墓壙23	2.2×0.85×0.09	N-28°-E 周溝内か。
				墓壙24	2.2×0.95×0.27	W-29°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓壙25	2.18×1.0×0.18	W-26°-N 周溝内か
	周溝墓32	?×10	N-28°-E	-	-	-
				墓壙26	2.05×0.7×0.15	W-37°-N 周溝内か。木棺痕跡あり
				墓壙27	1.83×0.6×0.1	W-41°-N 周溝内か。木棺痕跡(底板)か。小口穴
	周溝墓33	11×14.5	N-30°-E	墓壙28	2.25×1.0×0.1	N-38°-E 周溝内か。木棺痕跡(底板)か
				墓壙29	1.37×0.56×0.14	W-29°-N
				墓壙30	2.75×1.35×0.35	N-30°-E 木棺痕跡あり。内面に水銀朱。
	周溝墓34	11.5×13.5	N-30°-E	-	-	-
	周溝墓35	-	周溝墓22と同	-	-	-
	周溝墓36	-	周溝墓21と同	-	-	-
	周溝墓37	-	周溝墓22と同	-	-	-

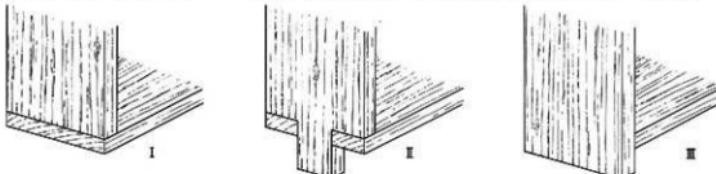
とほぼ向きを揃え、墳丘の振れと同じ向きに築かれている。墓壙14の周辺には周溝内埋葬を示す墓壙9～13と、周溝墓27上の墓壙15の6基がまとまっており、墓壙10・13は墓壙14に並行、墓壙12は直交する向きに築かれている。墓壙12と13とは一部重複するが、いずれも方形周溝墓に伴う墓壙と考えてよいであろう。墓壙9・11・15は墓壙14の向きとは異なるが、墓壙11は、他の周溝墓と主軸の振れを異にする周溝墓26の向きにほぼ合っており、墓壙9についてはその墓壙11に直交する向きとなっている。墓壙15が問題となるが、周溝墓27の墳丘上で確認できる唯一の墓壙であり、埋土も墓壙14や9と同じであることから、周溝墓27に伴う墓壙と考えて差し支えないと思われる。

なお、周溝墓33の中央で検出した墓壙30は、木棺内面から多量の水銀朱が検出されているが、同様の朱は、前記墓壙19にも見られるものであり、決して特異なものではない。墳丘に対する位置や、振れからも、方形周溝墓に伴う墓壙であることは間違いない。周溝墓31から33にかけては、本来周溝内にあったと推測されるものも含め、墓壙22～29の8基がまとまって検出されている。全て墳丘や溝の振れに並行、あるいは直交する向きに築かれており、これらも方形周溝墓に伴う墓壙とみて問題ないであろう。

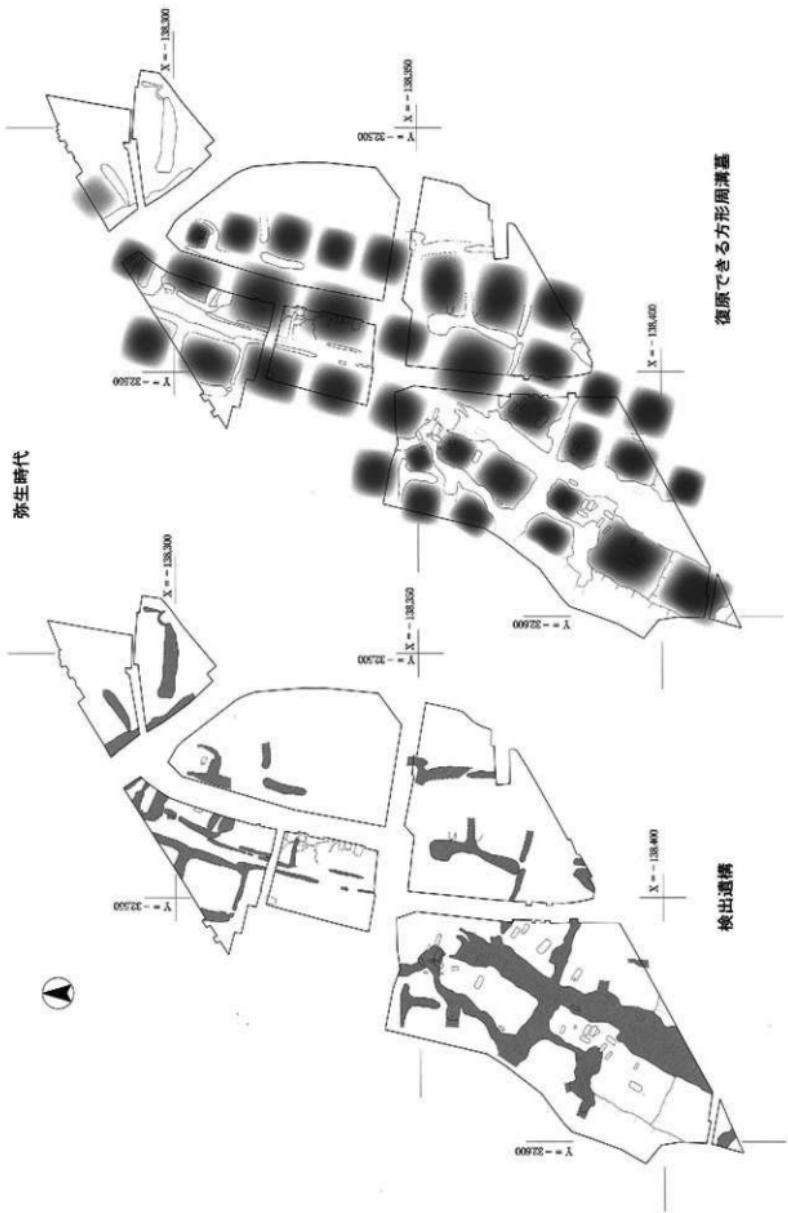
このように、墓壙15以外の墓壙は、全て墳丘の振れに合わせた軸をもっており、方形周溝墓に伴う墓壙とみて差し支えないものである。墓壙15についても、周囲の墓壙と埋土を同じくしている点などから、方形周溝墓に伴う墓壙と考えている。

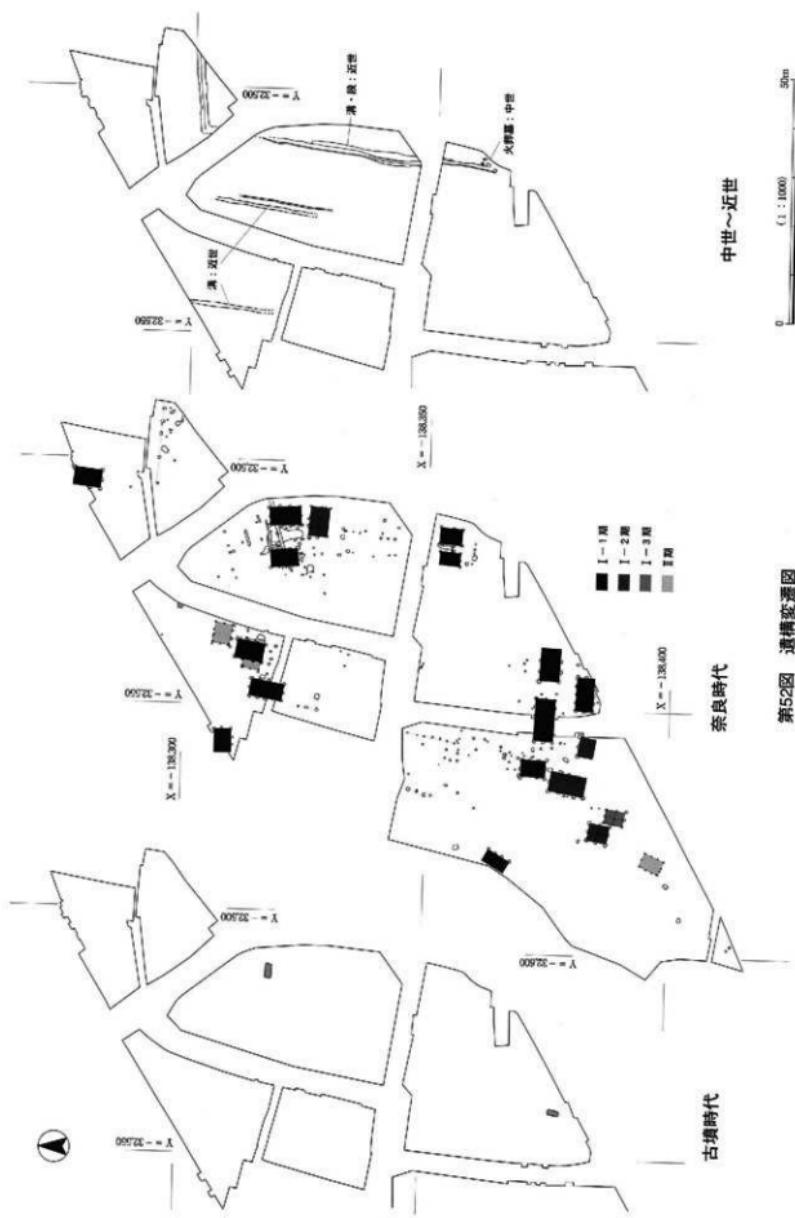
これら方形周溝墓に伴う墓壙は、その可能性のあるものも含めると、各調査区を合わせ合計33基にのぼる。このうち木棺痕跡、あるいはそれと思われる痕跡が確認できた墓壙は、墓壙12、13、14、16、17、18、19、24、26、27、28、30の12基である。またこのほかに、木棺痕跡は確認できなかったが、埋土や掘方の状況から、木棺が埋納されていたとわかるものに、墓壙2、20、土坑7の3基（土坑26は除く）がある。つまり、33基中少なくとも15基は木棺墓ということになる。残りの18基の中には、墓壙23、25のように、木棺墓であった可能性が非常に高いものもあるが、墓壙10、11、29、37などは、規模や埋土の状況から、土壙墓であったことがほぼ確実といえる。おそらく当遺跡では、方形周溝墓に築かれた墓壙の約3分の2が木棺墓、残りの約3分の1が土壙墓であったと考えられる。

確実に木棺墓とわかる上記15基の墓壙のうち、木棺の形態を明らかにできる墓壙は、墓壙2、16、18、20、24、26、27の7基である。墓壙14、28は木棺底板のみの検出であり、土坑7には木棺痕跡はない。墓壙12、13、17、19、30は、平面・断面の観察でも木棺の形態を確認できなかった。小口板や側板が底板より下にはみ出していないことから、小口板と側板が底板上に載る構造（第51図-I）であったかと考えられる。木棺の形態を明らかにできる7基のうち、墓壙2、18、20、27の4基には小口穴が掘られている。これは小口板が底板よりも下に延びていたことを示すものである。小口穴の規模から、墓壙2、18、27については、小口板が底板よりも外側で、底板を挟む構造（第51図-II）、



第51図 木棺底板と小口板との組合せ模式図





墓壙2については、小口穴の幅が38cmしかないことから、小口板が逆凸形で、凹形の底板上に組み合う構造（第51図-II）であったことが推定できる。ただし、側板と小口板、側板と底板との関係は明らかでない。墓壙16については、横断面の観察によって、側板が底板の上には載らず、底板の外側に組み合う構造であったことがわかる。側板と小口板との関係は、側板の北西隅が小口板よりも僅かに外側に突出しており、側板が小口板を挟む構造であったことがうかがえるが、小口板と底板の関係は明らかでない。墓壙24は、縦断面および平面の観察によって、小口板が底板の上に載ること、また、側板が小口板を挟む構造であったことが明らかであるが、側板が底板の上に載るのかについては、横断面の観察を行ったが確認できなかった。墓壙26は、横・縦断面の観察によって、側板および小口板が底板の上に載る構造であったことが判明する。側板と小口板との関係は明瞭に検出できなかつたが、おそらく墓壙16・24同様に側板が小口板を挟む構造であったと思われる。

このように、当遺跡では木棺の構造が統一されておらず、いくつかのタイプが混在する。この構造の違いが何に起因するものなのかは、他の遺跡と比較しながら今後検討しなければならない。

以上のように、当遺跡からは多数の墓が検出されたが、集落跡は全く確認されていない。これだけ大規模な方形周溝墓群が形成されていることから、近隣には大規模な集落が広がっていたことがうかがえるが、同時に実施された丘陵裾の高宮遺跡の調査でもその痕跡は確認されていない。平成14年度には谷を1つ隔てた東側丘陵上の遺跡の確認調査が実施されており、ここでは弥生時代中期後半の竪穴住居址を多数検出している¹¹。本格的な調査は行われていないが、おそらくこれらが大尾遺跡に方形周溝墓を築いた人々の集落であったと推定される。今後の調査を期待したい。

古墳時代（6世紀末～7世紀中葉）

丘陵頂部でたいへん見晴らしもよく、古墳が築かれてもおかしくない場所であるが、その痕跡は全く確認できない。古墳時代の末期（6世紀末～7世紀初頭）になってようやく墓地として再利用される。検出した遺構は土坑墓（墓壙4）と木棺墓（墓壙1）がそれぞれ1基ずつである。墓壙4には6世紀末から7世紀初頭に位置する須恵器壺蓋が副葬されていたことから、確実に時期を特定することができるが、墓壙1にはまったく遺物が伴っておらず、正直なところ時期の特定が難しい。ただし、木棺に舟材が転用された可能性が高いことや、その木棺が粘土床上に置かれていることなど、明らかに5区で検出した多くの弥生時代の主体部とは構造的に異なるものである。したがって方形周溝墓の主体部ではなく、古墳時代の墓壙と推定したが、これが7世紀まで下がるものかは詳細な検討を要する。

このように古墳時代の遺構は確実に存在するものの、その広がりは、調査を実施した約5,000m²の中に墓壙が1基ないしは2基と、非常に稀薄なものである。しかし包含層や、層位関係によって7世紀後葉から8世紀前葉のものと判明する遺構からは、7世紀前葉から中葉の遺物も一定量出土しており、本来はこの時期の遺構がさらに多く広がっていたと推測できる。それはおそらく方形周溝墓の凹凸を利用して築かれた墓壙であったと思われる。

飛鳥・奈良時代（7世紀後葉～8世紀）

遺跡の西側に隣接する国指定史跡「高宮廃寺」が創建され、隆盛を極めていた時期に相当する。高宮廃寺から1つ谷を隔てた当丘陵上には、その立地を生かして集落が築かれる。検出した遺構は掘立柱建物跡21棟、塀跡4棟である。この時期になんしても方形周溝墓の痕跡がある程度残っており、まずは

これら凹凸の整地作業から行われる。凸状に残る周溝墓のマウンドは削り、この土で凹状に窪む周溝が埋められる。また丘陵の斜面にもある程度の盛土が施され、斜面の勾配を緩くする。これは5区検出の溝50・53（第38図）、および丘陵斜面に直交するように設けた畔（第6図）の断面観察によって確認できる。古墳時代の遺構の多くはこの段階で削平されたのである。出土する遺物の中に7世紀前葉から中葉のものが多く含まれるのはこのためと考えられる。調査当初は、当時期の集落が築かれる以前に、7世紀前半の集落も広がっていたと考えていたが、新しい遺構にそれ以前の遺物が混入することは日常的に起こり得る現象であり、7世紀前半の遺物が出土する建物＝7世紀前半の建物、と即断することはできない。建物7や11の柱穴から弥生土器が出土していることはそれを端的に示している。上記のとおり、集落が築かれる前段階に、遺跡全体に整地が行われており、その整地土の中には7世紀後葉の遺物が確実に含まれている。5区で検出した建物跡は、この整地土上面から掘り込まれていることから、柱穴から7世紀前半の遺物が出土しようとも、7世紀後葉以降の建物跡であることは間違いない。すなわち、弥生時代中期後半と6世紀末から7世紀中葉にかけて墓地として利用されたこの丘陵は、7世紀後葉になって朱落を塗くための大規模な整地が行われる。その際、嘗ての遺構は悉く削平され、遺構に伴う遺物は整地土に混入して、周溝の痕跡であるの窪地や斜面部に散き均される。整地完了後、掘立柱建物の建設へと執りかかるが、整地土の上から柱掘方を掘るため、その中にも7世紀前半の遺物が混入した。というものである。ただし、整地土には8世紀前葉の遺物も確実に含まれており、整地の時期に若干の疑問も残る。しかしその量は7世紀代の遺物量から見れば極めて少なく、集落形成後の生活している過程での混入と考えても差し支えない程度のものである。現時点では、7世紀後葉に築かれた集落が8世紀前葉まで存続していた物証として捉えておきたい。なお、5区以外の調査区では、この時期の整地層を確認できないため、建物跡との関係を把握できないが、建物の規模や振れから、5区以外で検出した建物跡も5区と同時期＝7世紀後葉から8世紀前葉の建物跡と考えて問題ないであろう。ただし、2区検出の建物20と塚2、3区検出の建物5と6のように、明らかに重複して建つもの、また5区検出の建物13と14、建物18と19のように接近しすぎのものなど、少なくとも2時期以上の建替えがあったことは確実である。以下建物の変遷について検討する。

一般的には建物の振れの違いが建物の時期差と捉えられ、建物のグループングに用いられているが、当遺跡検出の建物跡には各々微妙な振れの違いがみられる。これらは平面図上で割り出される数値であり、現地では全く気づかない程度の誤差のものもある。したがって建物の振れだけを参考に建物の時期を分けた場合、数時期に及ぶ変遷となってしまい問題が多い。また建物18と19のように明らかに時期が異なると思われるものでも同じ振れをもっているなど、建物の振れの違い＝時期差とは一概にはいえない面もある。おそらく当遺跡に関しては、丘陵上に立地しているため、地形上の制約を強く受けたものと思われる。つまり同時期の建物であっても、丘陵頂部に建つものと、斜面に建つものとではまったく建物の向きを異にしていた可能性が高いと考えられるのである。したがって、建物の時期を分ける重要な手掛かりの一つとして、建物の振れを参考にしつつも、柱穴の規模や形状など他の要素も勘案し、検討する必要がある。

まず、1区検出の建物1と塚1は共に座標北から東に5°振れ、柱穴も同規模の隅丸長方形を呈することから、同時期（仮にI-1期とする）に並存していたと考えて問題ない。2区検出の建物2と3についても、同様の理由から並存していたとみられるが、他の建物とは異なり主軸は座標北から西に振る。これは丘陵斜面に立地するために、地形上の制約を受けたものと考えられる。柱掘方は建物1・塚1な

どと同規模の隅丸（長）方形を呈することから、振れは違うが建物1・埠1と同時期=I-1期の建物と考えてよからう。建物3の南に位置する建物20は埠2と重複しており、少なくともどちらかはI-1期ではないことが確実である。埠2は建物2・3と振れの角度は異なるが、座標北から西に振る点では共通しており、またその位置も建物2・3との間にあり、目隠し埠的な施設であったことを示唆している。逆に建物20は建物2と同じ立地であるにもかかわらず、振れを異にする。したがって埠2は建物2・3に伴うI-1期の遺構で、建物20のみが異なる時期の遺構と考えられる。3区検出の建物4及び埠3と建物5については、主軸の振れが異なるが、現地ではまったく気づかない程度の微妙な誤差であり、柱穴の規模や形状はまったく共通する。斜面際に位置する建物8も同様であり、4者は同時期の建物であったと考えられる。これらもI-1期の建物と考えてよからう。建物5と重複する建物6は、柱穴の切り合ひ関係から、建物5よりも後（II期とする）に建てられたことが明らかである。建物の振れは建物4や5と大差ないが、柱穴が小さな円形を呈することが特徴的である。これと並存する建物は、振れや柱穴の規模・平面形が共通する建物7である。4区検出の建物9と21は、建物同士が近づきすぎた感もあるが、明らかに南妻柱筋を備えて設計されており、並存していたと考えるのが無難である。4区から5区にかけて検出した建物10~13は、丘陵頂部に整然と配置された一群であり、建物の振れが完全に一致する。建物11の柱穴のみや規模が大きいが、同時に並存していたことは疑いがない。この両グループとも柱穴の形状・規模からI-1期の遺構と考えて問題ない。建物14・15は、建物10~13の一群内に位置し、柱穴規模も建物11と同じ大型の隅丸長方形を呈するが、建物10~13とは僅かに振れを異にする。また建物14が建物13に接近しすぎであり、建物10~13と同じI-1期の遺構とするには無理がある。しかし建物5と6のように完全に重複するものではなく、一群の中に整然と配置されていることから、I-1期とはあまり時期を隔てない段階（I-2期とする）の遺構と考えられる。おそらくこの2棟は建物11代替後の建物であり、建物10~12とは並存していた時期が

第2表 建物跡規模一覧表

調査区	建物No	規模(四)	東西(m)	南北(m)	建物方向	振 れ	柱穴の形状	時期	備考
1区	建物1	2×(3)	1.9	1.9	南北棟	N-5°-E	隅丸長方形	I-1	
	埠1	6+α	2.5	-	東西駆	N-5°-E	隅丸長方形	I-1	
	建物2	2×3	1.85	2.2	南北棟	N-3°-W	隅丸形あるいは長方形	I-1	
2区	建物3	(2)×3	(1.8)	1.2	南北棟	N-3°-W	隅丸方形や楕円形	I-1	
	建物20	2×3	2.0	2.0	東西棟	N-4°-E	隅丸方形や円形	I-2	鰐柱建物
	埠2	4	1.55	-	南北駆	N-10°-W	隅丸長方形	I-1	
	建物4	2×4	1.75	1.75	南北棟	N-8°-E	隅丸長方形	I-1	
3区	建物5	(2)×3	(1.85)	1.9	南北棟	N-12°-E	隅丸方形	I-1	
	建物6	2×3	1.8	2.0	東西棟	N-11°-E	円形	II	
	建物7	2×3	1.8	1.4	東西棟	N-11°-E	円形	II	
	建物8	(2×3)	1.75	1.6	東西棟	0°	隅丸長方形	I-1	
4区	埠3	2+α	2.0	-	南北駆	N-8°-E	隅丸長方形や楕円形	I-1	
	建物9	(2×2)	(1.7)	1.7~2.8	南北棟	N-4°-E	隅丸長方形	I-1	
	建物21	2×3	1.4	1.45	南北棟	N-4°-E	隅丸方形や円形	I-1	
	建物10	(2×4)	(2.1)	2.1	東西棟	N-3°-E	隅丸形あるいは長方形	I-1	
4・5区	建物11	2×4	1.8	1.7	東西棟	N-2°-E	大型隅丸長方形	I-1	
	建物12	2×(5)	1.95	1.8	東西棟	N-3°-E	隅丸長方形に近い楕円形や円形	I-1	
	建物13	2×3	1.7	1.7	南北棟	N-3°-E	隅丸長方形	I-1	
	建物14	2×(4)	2.1	1.8	南北棟	N-10°-E	大型隅丸長方形	I-2	
5区	建物15	(2)×?	2.1	-	南北棟	N-10°-E	大型隅丸長方形	I-2	
	建物16	?×3	-	1.7	南北棟	N-30°-E	隅丸長方形	I-1	
	建物17	2×3	1.5	1.4	南北棟	N-25°-E	円形や楕円形	II	
	建物18	2×2	1.8	2.1	-	N-10°-E	隅丸形あるいは長方形	I-2	鰐柱建物
	建物19	2×2	1.5	1.95	-	N-10°-E	円形	I-3	鰐柱建物
	埠4	6+α	1.6(2.0)	-	南北駆	N-10°-E	円形	I-2	

あったと推定される。前記建物20もこの時期に含まれるであろう。5区西斜面で検出した建物16は、主軸が大きく東に振っているが、建物2・3と同様の理由からI-1期の建物と考えられる。5区南方に位置する建物17も主軸を大きく東に振るが、柱穴は小規模な円形や楕円形である。これは建物6・7に見られる特徴であり、II期の建物であることを示している。建物15の西南側に位置する建物18・19は、両者とも2間×2間の純柱建物跡であり、共に建物14・15と同じ振れをもつ。しかし建物同士が接近しすぎており、同時並存は考えられない。切り合い関係がないため、先後関係は不明であるが、柱穴の規模から、おそらく建物18が建物14・15と同じI-2期の建物と考えられる。建物19はそれからあまり時期を離れてない段階(I-3期とする)で、建物19の建替えに伴って建てられたものと考えられる。つまりこの一画には当初(I-1期)建物10~13が建っていたが、建物13の建替え(I-2期)によって建物14・15・18が建てられ、ついで建物18に代わって(I-3期)建物19が建てられる。というものである。おそらく建物10~12はI-1期からI-3期まで存続して建っていたと推測される。図4は柱穴が小規模な円形であり、II期の特徴を示している。しかしこの周辺は後世の削平が著しく、本来の遺構の形状ではないと判断できる。振れが建物14・15と同じであることから、それらと同じI-2期の遺構と考えておきたい。

以上、当遺跡で検出した掘立柱建物跡や壙跡が、7世紀後葉から8世紀前葉の遺構であることを明らかにし、それらが、丘陵頂部に大型建物を整然と配し、若干離れた斜面に数棟の建物を置くというI期から、僅か3棟の建物となるII期へと大きく変遷したこと、さらにI期の中でI-1期からI-3期へという小規模な建替えが2度行われていたことを復原した。この遺構の変遷を出土遺物と対比させた場合、I期を7世紀後葉、II期を8世紀初頭の時期にあてることが可能である。

5区で検出した墓壙34~36は、奈良時代の遺跡の中でも特に丘陵上に位置する遺跡でよく確認される遺構である。その遺構の特徴として、①平面形は(隅丸)長方形を呈するものが多く、壁は垂直ないしは緩やかな傾斜を成す。②壁および床面の一部が被熱を受ける。③埋土には炭化物が多量に含まれる。④遺物がない。などが挙げられる。火葬墓に付随して検出されることが多いことから、遺体を荼毘に付した火葬施設、あるいは火葬墓そのものと考えられている。当遺跡内では奈良時代の火葬墓は確認されていないが、遺跡の西側に隣接する高宮遺跡からは、奈良時代の火葬墓が数基確認されている。遺構内から骨片が1点も出土していない点については問題として残るが、おそらく墓壙34~36は高宮遺跡の火葬墓に伴う火葬施設であったと考えてよからう。遺構に伴う遺物が出土していないため、遺構の時期は特定し難いが、この遺構が掘立柱建物跡と近接していることから、おそらく集落が廃絶した後のものと推測される。

中世(16世紀後半)

16世紀後半の遺構として、調査地東端の丘陵斜面部で土壙を4基(墓壙5~8)検出した。円形や楕円形の小規模な穴を掘り、墓壙5・6はその中に瓦質擂鉢を埋納する。炭や骨片は確認できなかったが、土壙の底に完形の土器を据えていること、またこの4基が集落内の遺構ではなく、集落から離れた丘陵部に築かれていることなどから、これらの土壙は火葬墓であった可能性が高いと考えられる。なお、通常の火葬墓ならば蔵骨器に火葬骨を納め、蓋をして埋めるのであろうが、墓壙5・6は共に擂鉢を伏せた状態で納めている。おそらく火葬骨の上に伏せたものと思われる。このため火葬骨は水分を含んだ

地面と直接触れることとなり、消失したのであろう。この火葬骨の上に土器を伏せるという風習が、16世紀後半に当地域において一般的に行われていた可能性もあり、当時の埋葬方法を知る重要な資料といえる。

9世紀から16世紀後半に至るまでの間、当地がどのように利用されていたのかは判然としないが、16世紀後半に至り、当地の一画が再び墓地へと変容したことがこれによって明らかとなった。中世に属する遺構は土壙以外には全くなく、集落としては利用されなかつたようである。おそらく当時の集落は丘陵の裾部に広がっていたものと推定される。

近世

丘陵の斜面を雑壇状に造成し耕作地へと変わっていく。段を丘陵の等高線に並行するように築き、段の裾には溝が設けられる。検出した段や溝から、当時の耕地区画の規模が判明する。すなわち2区東辺で検出した溝34（段）から西側の溝31（段）までが一区画であり、その間は約12m、さらにその西側に2区溝30と3区で検出した溝5に区切られた一区画があり、その間は東側の区画よりも広い約21mである。また丘陵上に位置するため、耕地開発に伴い、用水の確保のための溜池が多数築かれる。

以上、時代ごとに遺構の変遷を概観した。これにより弥生時代中期後半に墓地として利用された当地が、古墳時代末期に再び墓地として使われ、7世紀後葉になると平坦に整地された後に、大規模な集落へと変わる。9世紀から16世紀後半に至るまでの間は、当地の土地利用の状況は判然としないが、16世紀後半に再び墓地としてその一画が利用され、それ以降は雑壇造成された耕作地へと変わっていく。という土地利用の移り変わりを明らかにすることができた。

本書では重要な遺構・遺物であるにもかかわらず、両者ともに十分な検討が行えず、資料の報告のみにとどまってしまった。特に弥生時代の方形周溝墓については、中期後半において丘陵上に列状に配置されたものとして、またその主体部出土の石槍など、極めて貴重な発見が多かったが、いずれにも考察を加える余裕がなく、不十分なままでの提出となってしまった。今後、個々の遺構に対する評価はもちろん、遺跡のもつ性格・意義あるいは重要性などについて、周辺地域の遺跡との関係も交え、踏み込んだ見解が示されることを期待したい。本書が大阪北河内地域の歴史解明に少しでも役立つならば幸いである。

註

- 1) 財團法人 大阪府文化財センター 2003 『門真西地区、讚良郡条里遺跡西地区、讚良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第93集